
世界に一つだけの華族

まさかさかさま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に一つだけの華族

【Nコード】

N3735U

【作者名】

まさかさかさま

【あらすじ】

軒並み奇人変人の集う、世界に一つだけの華^{はな}一家。これは、そんな家族が送る珍妙コメディー。

アレな人物達がアレな日常をアレするアレアレな物語ですが、生暖かいアレな目でアレしてやって下さい。

強敵^{ライバル}や親の敵^{かたき}が現れたりはしな……いはず。機会があったら長編にもチャレンジしてみようかと。

名前だけでも覚えて帰って下さい。いえ、やっぱ帰らないで下さい。

1話『諺（いとわざ）遊び』

「二兎を追うもの一兎も得ず！ ……これはどういう意味？」

「二匹の兎を捕まえようとしたら失敗したんだ。つまり欲張っても失敗するという意味だぞ、妹」

「へえ。でも十匹追えば一匹ぐらいは得^えそうだよ。数^{かず}撃ちや当た^あるってやつ」

「面白いこと言うな、お前。それは諺^{ことわざ}じゃねえけどな」

「こんにちは。夏休み、昼過ぎ。妹の妙な解釈に、ちょこつと感心する今日この頃。」

軽く自己紹介させてもらうと、俺の名字は、華^{はな}。下の名前は嫌いなので割愛^{かつあい}。高2。あだ名は“クラ”。別段気に入っては^みないが、名前で呼ばれるのが嫌なので昔から皆^{みな}にはそう呼んでもらっている。

「ちなみに同じ意味で『蛇^{あぶ}、蜂^{はち}取らず』って諺^{ことわざ}もあるぞ、妹」

「『蛇、八取らず』？ そりゃ八匹も捕まえられないでしょ。刺されるよ」

「ちげえ。数字の八じゃなくて虫の蜂。蛇と蜂が同時に現れたから両方捕まえようとして失敗したんだ」

でもって現在会話中のコイツが妹、華^{はな} 向日葵^{ひまわり}。あだ名は“ヒマ”。頭がアレな天真爛漫^{てんしんらんまん}小学四年生。

おっと、某^{ぼう}野原さん家の二歳児と被^ひつてるとか思ったろ？ ポジションとあだ名まで丸被りだけど特に例の人気アニメは一切関係無いからな。その辺よろしく。

で、今何してるのかっていうと、ヒマに夏休みの宿題を教^おえてや^やつてるところ。科目は国語。熱気にやられ部屋で溶^とけていたところ、教^おえてくれと頼^{たの}まれたのだ。内容は『四年生の諺^{ことわざ}マスター』なるプリントの束で、諺^{ことわざ}の意味を調べて空欄を埋めろというもの。

取り立ててやることもなく青春を無駄遣いしてたもんだから、まあ、暇潰しがてらに期間限定エセ教師活動中なのである。

「でも意味は間違っていないよ? 『蛇、蜂取らず』でも『蛇、八取らず』でも。どちらにしる欲張って失敗してるでしょ」

小首を傾げるヒマ。

「おお、確かにそうかも知れん」

よくコイツは変に捻くれたことを言う。考えてものを言っているからなのか、何も考えず言っているからなのか、それは場合によるが。単にマセてるだけなのか、実は大物なのか知らんが、親から教育を任されてる俺の影響でないことを信じたい。

「そもそも蛇や蜂なんか捕まえて何がしたいの。自分より弱い生き物支配して悦^{えつ}に入りたいの?」

「お前は、またそんな子供らしからぬことを。いま全世界の虫取り少年を敵に回したぞ」

だって、ねえ? と生意気な疑問系の妹。だがそこで、

「でも、ゴキブリは結構好きだよ私。触りたくないけど。汚れにまみれながらもしぶとく生きようとするその生き様は全国の自殺志願者も見習うべきだと思うの」

「お前は、またそんなガキらしからぬ事を。いま全世界の自殺志願者を敵に回したぞ」

つまり、自殺志願者はゴキブリ以下だ、と。……うん。少し、俺もコイツの育て方を間違えたのかも知れない。ま、変じゃないヒマなんて、そんなのはただの向日葵だ。いや意味わかんねえ。

「でさ、これはどういう意味なの? クラさん」

プリントに印刷された、次の諺を指差すヒマ。ちなみにコイツは俺のことを何故か『クラさん』と呼ぶ。曰^{いわ}く『タモさんみたいなんだそう。うん。昔から相変わらず謎である。』

「どれどれ?」

さて、ヒマが指差す問題を覗き込むと、そこには『目の上のタンコブ』と記されていた。ん、これは有名だな。

「こりゃあれだ。ほら、目の上にタンコブが出来ると邪魔でしようがねえだろ? だから、目の上に出来るタンコブのように邪魔な存

在だって意味だよ、妹」

「なるヘソ！」

ポム、と手を叩き、早速横の空欄に『目の上のタンコブ』の意味を書き込むヒマ。

「書けた」

「えらく早いな」

おかしい、3秒足らずで書き終わったぞ。小4のくせに、そんなに筆が早いはずはない。俺でももつとかかる。

訝しみながらも覗き込む。……おおう。そこには『クラさん』とだけ書かれていた。

「誰が邪魔者だコラ」

「クラさん」

「小娘め味なマネを！」

俺はタンコブ扱いかチクショウ。なんか気に障るさわような事したか？

「さ、次行ってみよう」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、とつと次の問題に行ってしまう。今日も妹さんは自由奔放に生きてらっしゃる。

「ええと、『目から鱗うろこ』だって。これはどういう意味？ 教えたまへ、クラよ」

微妙にウザい聞き方のヒマに、とりあえず答えてやる。てか呼び捨てすんな、敬え。

「あー、これはだな。普通、目から鱗なんて出るものじゃないだろう？ そんなありえない反応をしてしまいうぐらいに驚くって意味だ」

「なるヘン！」

「なんだ、なる“ヘン”て」

“ヘソ”じゃなくて“ヘン”だ。カタカナマジックというやつである。ところでそもそも、何故『なるほど』をもじったら『なるヘソ』になるのか自体が疑問だな。ヘソに曰くでもあるのか？ どーでもいい。

でもって、ヘソ一辺等じゃバリエーションないからね、とほざき

ながら『目から鱗』の意味を横の空欄に書き込むヒマ。

今度は2秒で書き上げやがった。

「早すぎだろ」

見てみる。『クラ』とだけ書かれていた。

「誰が目から鱗だコラ！」

「貴様」

「何その態度!？」

珍生物扱いかチクショウ。目から鱗なやつだ。多大に傷付、くわけでもない。いつものことだし、今さらなあ。というかコイツとのかけ合いは飽きなくて良い。

「次行ってみよう、レッツネクトス！」

「ネクトスな？」

調子こいて、ろくに使えないイングリッシュをトークし始めた。楽しそうに次の諺を読み上げる。

「じゃ、クラさん。『蝸牛角上の争い』^{かぎゅうかくじょう}。これは何て意味？ なんかカッコイイけど」

「カッコイイな」

補足だが、ヒマにも読めるよう、漢字にはルビがふつてある。

ふむ、この諺はあまり見ない。どういう意味だったか。脳内ライブラリを漁ってみる。えーと、おお、あったあった。

「確か、つまらないことで争うって意味だぞ、妹」

「なーんだ、人間のことだね」

「何を生意気言ってるやがる、小学生」

その発言は大物なのか、小物なのか、さてはて判断に困る。どうか小物であってほしい、人類の栄華の為に。……どうでもいいか。人類の繁栄よりは妹のが大切だ。ふはは、シスコンとでもなんとでも呼ぶがいい！

俺も大概、頭がアレなのかも。^{たいがい}

「ロリコン過ぎて、他人の私を攫^{さら}って監禁し、妹として育て上げたぐらいだもんね。よ、敏腕^{びんわん}変質者」

「そうそう、うら若き娘が深夜出歩いてたからつい……んなわけねえだろ。おい小娘、危ねえ冗談言うな！ 初見の人が勘違いすんだろ！」

そして思考読むなよちゃっかり。

「にしてはノツたね」

これが奥義ノリツツコミである。一流の漫才師にのみ許された究極の必殺技、それがノリツツコミ！ ……なわけねえだろ。もちろん冗談だ。勘違いしないでほしい。

「おー、それが秘技ひぎ一人ノリツツコミ？」

「お、分かるクチですかい」

うふふあははきひひ、と二人で怪しく笑いあう。はたから見たら気味悪いことこの上ない。……うん、俺、疲れてるのかも。

はいはい、切り替え切り替え。

「よし、次の諺は何だ？ バツチ来い」

「ん。バツチ言う。ええと、『後の祭り』あとまつだって」

「それはだな――」

「待って待って、これは聞いたことある」

ちよつと黙ってて、と手で遮さへぎるジェスチャー。ほう。ま、これぐらいはヒマでも分かるだろ。

んーんー、と唸うなる小学生を微笑ましく見守る。

「分かった！」

「へえ。言ってみ？」

すると、自信満々の笑顔で、

「ずばり、私！」

「もしや俺へのあてつけか！？」

そりゃ、親からヒマを任されてる身として、教育の仕方を間違えた感はあるがな！

「もう後の祭りだよね」

「自分で言うなよ」

後の祭り。取り返しをつかない、という意味。うん、取り返しの

つかん、妙な小学生に育ったもんだ。

いやー、愛情の賜物たまものだねー。……反省はしています。

「後悔先に立たず、とも言うよね」

「それは知ってるんだ」

「えへん」

「いばるな」

「ま、私は私だよ」

「というかお前、自覚あったんだな、変な小学生だっていう」

だが、後悔はしていない。これから自由_に育てていく方針っすよ、父上母上。そっちのが楽しい。

俺は教育者には向いてないんだろな。

「まーねー。てか、クラさんは自覚あるの？」

「ん？ 何の？」

「あ、いや……まあいいや」

なんのことだろうか。俺はヒマと違って、いたってノーマルな人間だ。

「んで、次の諺は何だ？」

「ん。ええとね、『同じ穴の貉』むじなだって」

「ああ、それはだな」

そんなこんなで、取り立てて事件もなく今日も過ぎて行く。

宿題教えて、珍妙な会話して、ちよっと笑って、日が暮れて、他の家族も帰って来て、余計騒がしくなって、飯食って、風呂入って、疲れて、寝て、起きて、また一日が始まって。

そんなちよっとアレだけど、平和な日常。

今日も華家はなけは、楽しく過ごしてます。

「ねえ、何この物語？ 続くの？」

「当たり前だろ。それと、物語じゃねえ。日記だ」

さて。最後に楽屋ネタで締め^したところで。

今日の家族日記はここまで、と。

7月〇〇日 華^{はな} 向日葵^{ひまわり}の“姉” 華^{はな} 桜^{さくら} 著

2話『むしパン』

夏休み。熱帯夜。くそ暑い。

今日の昼間も、サンサンと太陽の野郎は、暑苦しく仕事に熱中していた。その恩恵は、こんな夜中にまでしぶとく俺を苦しめている。くそう、少しは休暇をとる気は無いのかね、太陽さんや。世間は夏休みだというに。つっても、その太陽が頑張って働いているからこそ夏休みがあるわけで。太陽が働くから、俺達が休める。そう言うと、親と息子の関係みたいだな。……全然違うね、すみません。暑さでイッちゃってる朦朧もうろうとした思考で、週刊少年チャンプーを読んでいると、

「ねえクラさん、パン食べない？」

妹の華はな 向日葵ひまわりが、俺の部屋の扉を開け、そんなことを聞いてきた。

「パン？」

「そう、パン」

こりやまた、唐突だな。今はパサパサしたもんより、キンキンしたものを食いたいんだが。でもまあ、隠れシスコンな俺が、特に妹の頼み事を断る理由も見当たらないので、

「あー、食ってやらあ」

適当に承諾。

「さんくー」

微妙に変な礼を返し、ゴソゴソと、どこからかともなく緑色のパンを取り出すヒマ。……え？ 本当にどっから出した？ 地味にスゲエ。

「あのね、今日の昼、友達の家で一緒に作ったの。美味しそうに焼けたからクラさんに食べもらおうと思って」

……おお。お姉さん、ちょこつと感動。あのヒマがこんなこと言うなんて。苦勞して面倒見てきた甲斐かいがあったというものだ。

ああ、それと。勘違いされてたと思うから、一応もう一度自己紹介させてもらうが。俺の性別は、れっきとした“女”である。女性だ、メスだ。いや、執刀医が使う手術のお供ではなく。

女っぽく振舞うのが嫌いで、言動や態度からよく間違われることがあるんだがな。だから、華はな桜さくらという名前は好きくない。クラと呼んでほしい。

「じゃ、頂いただくぞ」

ヒマからパンを受け取り、そのまま口に放り込み、ムグムグ食す。うーん、パンだから当たり前だけどパサパサだな。それに別段、美味くも不味くもない。まあ、それは店頭で並んでいるものと比べたら、というわけで。

自作にしては、上手に出来ている。ヒマのことだから、さぞ奇想天外な味がすると踏んでいたんだが。

「さんきゅう、美味かったぞ」

ヒマの頭を軽く撫でてやり、バリバリのお世辞を言ってやる。対して妹は、どことなく嬉しそうに微笑みゴソゴソ、

「も1つあげる」

また、どこからともなく出現するパン。注視していたが、手の動きは見えなかった。手品だろうか。

別に、腹は減ってないんだけどな。夕飯食ったし。だがまあ、仕方ねえ。

「これが最後な？」

そう言って、またも緑色のパンを受け取り、マグモグ食す。

ふうむ。さっきの味は微妙に違うが、大体評価は同じだな。良くも悪くもないが、オリジナルとしてはよく出来ている気がする。

「うん、美味いんじゃないの？」

思ったことを、お世辞で脚色。すると、ニヤリと笑い、とんでもないことを聞いてくる。

「カマキリとバッタどっちが美味しかった？」

……………。

はい？

「まさかお前……入れたのか？」

「うむ！ たっぷり！」

力強く頷くヒマ。

「マジか」

「うむ！ マジ！」

あの緑色はバツタとカマキリの色か！？ 抹茶とかじゃなくて！？

まんまと虫パンを食わされたわけか。

この小娘は！ そりゃコイツがまともなもん作るわきゃないか！

「最初のがバツタで、後のがカマキリだよ」

「ちょ。嘘だと言っておくれ！」

「人からパンもらう時は、まず虫が入ってるかどうか確認するのが常識だよ。私のクラスの」

「とんでもねえクラスだな！」

カマキリとバツタて！ いや、食おうと思えば食えるだろうけども！ 佃煮つくだにとかあるし。だが、そんなもんを食うほど俺は飢えちゃいない。

てかひでえ。

「バツタとカマキリどっちのが美味しいのか私の友達グループで口論になったの。んで、作ったはいいものの、さすがに食べる気がしなくて。そいや家にいい感じのモルモットが居たなー、ってね」

淡々とそんな恐ろしい話の顛末てんまつを語るヒマ。どうやら、コイツの姉貴は実験動物並の扱いらしい。まあ、可哀想な姉だこと。……俺だ！

そもそも、どうやってそんな口論になったのだから。

「んで、クラさん。どっちの方が美味しかった？」

「だまらっしゃい」

ビシ。軽くチョップをかます。

「何すんのクラさん。美味しいって言ったから、別に教えても問題ないかなって思ったのに」

「何すんのはこっちのセリフだよ！ 食わせる時点で大問題だ」
全くこいつは。なんてものを……。生き物は大切にしなさい。カ
マキリもバツタも姉も。

ちなみに、どっちの方が美味しかったかというと、後に食べた虫
パンのが美味かった。カマキリ味の方な。

「へえ、カマキリのが美味しかったんだ」

「こら、人の心を勝手に読むな」

そこでニヤリ、と罨に引っ掛かった兎を見るかのように笑うヒマ。
「心は読んでないよ。デタラメ言っただけ。へえ、本当にカマキリ
のが美味しかったんだ」

な……。この小学生やりやがる。

適当なことと言って俺をカマにかけたわけだ。いや、だから何？
って感じだが、それは無粋というもの。

「カマかけてみました。カマキリだけに！」

「そのギャグはうまくねえ」

「誉めてもいいよ？」

「うん、黙れ」

えへん、と胸を張るヒマ。その顔は何処か誇らしげだ。なんなの
こいつはもうほんとに。

「そういえば、まだパン余ってるんだけど……食べる？」

「おいおい他にも作ったのか？」

うむうむ、得意気に頷きどこからともなく3つのパンを取り出す。
どうでもいいが、やはり出現場所は分からなかった。

「この薄く黄色いのがカタツムリパンとナメクジパン。んでんで、
この黒いのがゴキ——むぐ」

「言わせねえよ？ 黒いのは言わせねえよ？」

すんでのところでヒマの口を塞ぐ。危ねえ。

黒いので。アレか。黒光りするGか。台所に現れる、カサカサ蠢
くアレ。

いや、カタツムリとナメクジの時点で大問題だけども。

「カブちゃんとクワちゃんもあるだよ」

「子供の夢を壊すようなパン作るな！ いや、お前も子供か」
もしかして全部食わせようと思ったのか？ とは、とても聞けなかった。

黒いパンを食べる俺の姿だけは想像しなくなかったから。

「ちなみに、これ全部蒸しパンだから。虫だけに！」

……………。

「無視しないでよ。虫だけに！」

……………。

「あれだね。飛んでパンに入る夏の虫ってやつ？」

「少し……頭冷やそうか」

につくき妹の頭を、ガシッとホールド。

この後、華家の夜に、誰かしらの悲鳴が響いたそうなの。

追記だが、この虫パン騒動がドッキリだったと知るのは、また別のお話。

7月〇〇日 華^{はな} 向日葵^{ひまわり}の姉 華^{はな} 桜^{さくら}、著

3話『あなたにオレオレ詐欺』

夏休み。日中。暑い。

こんにちは。華はな 向日葵ひまわりです。愛称は“ヒマ” “ヒマちゃん” “クソガキ” などなど時と場合によって多種多様七変化。他にも色々あるけど、私の自尊心に関わるので割愛。

そんな可憐かれんな乙女な私ですが、今日も相変わらず暇です。ヒマだけに、暇です。そんなアホなこと言って一人ニヤニヤしてしまうぐらい暇なヒマです。

「あー、ひまー、ヒマはひまだようー」

今日はクラさんも他の家族も出掛けてて、お留守番。別にどこか遊びに行ってもいいんだけど、この暑い中そんな気にもなれない。今年は数年に一度の猛暑というやつらしい。クラさんがよく文句を言っていた。ああ、早くクラさん帰って来ないかな、つまんない。

「やること無いようー、暑いようー、ごろごろー」

ひんやりしてそうで気持ち良さそー、と淡い期待を寄せ、試しに廊下を駆け回るも硬い床が痛いだけだった。といっても特にやることも無いので、そのままゴロゴロ芋虫遊び。それ程にやる事が無い。今なら蟬の抜け殻ゴッコでも死体ゴッコでも存分に楽しめる気がする。

そんな怠惰の境地に辿り着き掛けていると、私の枯れ果てた心を潤うるおす、救いの福音ふくいんが鳴り響く。……福音でどういう意味だろう？ ま、いいや。

ジリリリと、要は電話が鳴ったんだよってこと。これは良い暇潰しになること間違いなし！

「お、おおお、おお、メシアよ」

起き上がり、ゾンビのような足取りで家電の受話器を取る。ガチャ。

そして、救い主もとい電話を掛けてきた相手は、

『あ、もしもし？ オレだよ、オレ。ほら、オレ。オレオレ』

オレオレ詐欺さんだった。しかも、恐ろしくクオリティの低い。確か、この手のオレオレ詐欺は既に絶滅危惧種に認定されているから丁寧に扱いなさい、とクラさんが言っていたのを思い出す。

ふ、ふふふ、絶好のカモだぜ、と怪しく微笑む。日々暇を持て余す私は、オレオレ詐欺の遊び方を完璧に熟知しているんだよ。

「あんれえ、その声は孫の桜ひぐくじゃないかい？」

隠れ特技の婆ちゃん声で対応する。

『そう、桜。オレ桜だよ、婆ちゃん。いやあ元気してたー？』
ノッてきた。アホな詐欺師も居たもんだね、ほんと。

「それで、どうしたんだい？ 婆ちゃんの声が恋しくなったのかね、ふえふえふえ」

『うん、久々に婆ちゃんの声が聞けて嬉しいよ。それで、ちょっと話があるんだけど――』

「待てい」

『な、何かな？』

「お前さん、本当に桜かの？ 確かに声は桜じゃが、喋り方が少し変だのう。確かワシの孫の桜は、語頭に“グヒヒ”を付けていた筈じゃが」

『あ、いや……。ぐ、グヒヒ、もちろん桜だよ。グヒヒ、やだなあ婆ちゃん』

うわあ。グヒヒて。私の姉を何だと思ってるのコイツ。

笑い声を堪えるのが苦しくて仕方ない。

『グヒヒ、それで婆ちゃんに頼みがあるんだけど。グヒヒ、聞いてくれないかな？』

「待てい」

『グヒヒ、今度は何かな？』

「お前さん、本当に桜かの？ 確かに語頭は桜じゃが、何かもの足りんのう。確かワシの孫の桜は“く年金よこせ”を語尾に付けていた筈だのう」

『とんでもねえ孫だな』

「……何か言ったかの？」

『……………。グヒヒ、もちろんオレが桜だよ、年金よこせ。グヒヒ、やだなあ婆ちゃん、年金よこせ』

うわああ。年金よこせて。私の姉を本当に何だと思ってるのコイツ。

こうノリが良いと楽しくて仕方ない。

『えーと、グヒヒ、それで頼み事なんだけど、年金よこせ———』

「誰が貴様なんぞにやるかああ!!」

『グヒヒ、ちょ、違う違う今のはオレの口癖だって、意味もなく婆ちゃんの年金をねだったりしないよ、年金よこせ』

「どっちじゃあ!？ やらんと言っとなるっちゅうに!」

『グヒヒ、だから勘違いだって、オレのこの真剣な声が婆ちゃんの年金ねだってるように聞こえるの？ 年金よこせ』

「聞こえるわい! めちゃくちゃ怪しく笑っとなるじゃろう! グヒグヒうるさいんじゃないボケえ!」

『えええ…………』

「そもそもワシの孫は三年前に死んだるわい! 貴様、桜、さてはワシを呪い殺す為に化けて出たな!？」

『超展開きた!』

「もう二度とワシにその声を聞かせるな! 呪うなら爺さんの方を呪え!」

『爺ちゃん身代わりにしやがった!』

「夏風邪ひくんじゃないよ! ちゃんと御飯食べるんだよ! べ、別に貴様の身を案じて言ってるんじゃないんだからね!？」

『婆ちゃんデレた!』

「あんたのことなんて全然好きなんだからね!」

『ババアに告白された!』

「結婚しよう」

『やだよ』

「式はどこで挙げようかね？」

『いや振ったんだけど？』

「婚約旅行は楽しかったねえ」

『事後！？』

「子供はもう一人欲しいねえ」

『既にいるのか！』

「孫の顔が楽しみじゃのう」

『もしやこれ婆ちゃんの回想！？』

「うう、どうして死んじまったんじゃ、桜」

『ば、婆ちゃん……オレのことを……』

電話越しに、おいおいとむせび泣く声が聞こえてくる。桜や、何故死んでしまったんじゃあ……。こんなおいぼれを残して先に逝ってしまふなんて……。

しばらく、二人して黙り込む。

「……」

『……』

「………」

『………』

「で、さ」

『何かな、婆さんや』

「クラさん……暇なんですよ？」

『まあな。どうせお前も暇だったんだろ』

「うん、めっちゃ暇だった」

『どの辺から分かってたんだ？』

「いや、電話に出た瞬間分かったよ。何年、同じ声聞いてると思っ
てんの」

『そりゃそうか。てか、よく考えてみると最初から俺の名前言い当
ててたな』

そう。つまり、電話の主、オレオレ詐欺師さんの本名。それは、
そのまま華^{はな}桜^{さくら}本人だったんだよ。

「ある意味オレオレ詐欺成立してるよね」

『誰に対しての詐欺なのか……それを口にするのは野暮ってもんだな』

「何人ぐらい引っ掛かったかな？」

『さあなー。そんなことよりさー』

「何？」

「『誰の口癖が“グヘヘ年金よこせ”』なんだ？」「おいコラ小娘こっち向けや』

おかしいね。電話越しからも、背後からもクラさんの声が聞こえてくる。私の耳に二重音声機能は備わっていなかった筈なんだけど。「ごめん、つつい調子に乗っちゃって。あの口癖は、クラさんの三年前の黒歴史だったね」

「なわけねえだろ！ 勘違いされるようなこと口走るな！」

ビシ、

「うあ」

振り向いた瞬間、私の頭にチョップが下る。いつ帰ってきたのか、携帯電話を持ったクラさんがそこに居た。

「もー、ただいまぐらい言おうよう」

「うるせえ、クソガキ」

そんなこんなで、今日も華家の一日は愉快に珍妙に過ぎて行く。

「そいや、題名の時点でタネ明かししてたんだね」

「ちよこつとヒントだ」

7月〇〇日 華 はな さくらの妹 華 はな ひまわり 向日葵著

4話『不思議クシャミ』

「……38度もある。ヒマ、今日は一日安静にしてろよ?」

「ううん、分かったあ」

こんにちは。桜^{さくら}、もとい、クラです。なんかヒマの顔が赤いなー、
と思って試しに熱を計ってみたら、なんと38度ちよいもあつた。
夏風邪^{なつかせ}というやつだろうか。

「そんじゃ今日は俺ずっと家に居てやるから、何か頼み事があつたら微妙に聞いてやる」

「微妙になんだ」

何でも聞いてやる、なんてうっかり言ってしまうと、本当に何でも言ってくるからなコイツは。前回、それで失敗したことがあるのだ。クラさんは、日々進化を怠^{おこた}らないのですよ。

「てか、このところ毎日じゃん、クラさんがずっと家に居るの」

「む、失敬な。ちゃんとバイトも行ってるぞ。……週一だがな」

「よく週一で雇ってくれたよね」

それには俺も同意する。普通、少なくとも週二以上入らないといけないのがバイトの常識だ。ただ、俺の借雇^{しゃくよつやいせ}先は店長が少し特殊な人なのだ。何事にも例外はある。

「とにかく、もう寝なさいヒマ。悪化しても知らねえぞ?」嘘である。俺は基本シスコン思考なのだ。コイツが熱を40度でも出したらしたら、きつとうろたえまくるだろう。

「うん、おやすみ……」

「おう、おやすみ」

そう言ってヒマを寝かしつけてやり、今日もいつものようにボーっと過ごす。最近のマイフェイバリットは、何もせず家の背景に溶け込むこと。単純に暑さで何もやる気が起きないだけなんだが。

「あついなあ」

ぐてー、っとヒマの寝ている横でヘッドロのように身体を横にする。

うあー、溶けるー。惰性の極みー。

にしても、何でアイツらはこんな暑い中活動する気になれるのかね？ アイツら……つうのは、他の家族達のこと。未だにこの日記には俺とヒマしか登場していないが、本来、華家はもっと賑やかな筈なのだ。ただ、俺とヒマ以外の家族は皆、夏休みだからって一日中家でゴロゴロしているような暇人じゃないというだけのこと。

俺も何かした方がいいのかな。流石に、時間がもったいな過ぎる。もったいないお化けに食べられちゃうよん。

……。……………。

「カモン、もったいないお化け！」

……。……………。

……来ない。

当たり前だろ。来たら通報するわ。うーん、そろそろ俺の頭も末期なのかも知んねえ。

あっちははー、暇人過ぎるだろ華 桜！ 仮にも、うら若き十代の乙女だぞ！ いいのか？ お前はそれでいいのか！？

「それでいいのだー、っと。ほい」

ピッ。リモコンを押し、テレビを付ける。これが溶怪^{ようかい}クラさんの限界だ。今の動きで行動力の全てを使い果たした。

「お、“ニューキーズ”の再放送じゃねえか」

漫画からドラマ化された、いつかの名作である。ちなみにこれ新^{ニユ}鍵組^{ーキーズ}と書く。前代未聞の鍵職人物語だ。

なんてどうでもいいことを考えていると、

「ハクサイ」

……なんか聞こえてきた。

空耳か？ “白菜”^{はくさい}と聞こえた気がしたが。声のした方向――
――ヒマの寝ている方向を見る。

「ハクサイ」

また聞こえた。……というか、ヒマが呟いた。

「どうしたヒマ？　ほしいのか、白菜」

「……は？　いや全然欲しくないけど。なんなの唐突に」

「え、あ。……そうか？　いや何でもない。ただの空耳だ、多分」
へんなの、とダルそうに言い残し、また夢の世界に戻るヒマ。

おっかしいな。確かに聞こえたんだが――

「ハクサイ」

――今のは誤魔化せねえだろ。

「おい、ヒマ。白菜欲しいなら欲しいって言いなさい」

「??　だからいらないよ白菜なんか。意味分かんないこと言わないでよ。ハクサイ」

「嘘つけえ！　ハクサイハクサイうるせんだよ！」

「言って――は、ハクサイ――言ってないよ！」

いや、妹よ。それは流石に無理があるぞ。

もしや、自覚が無いのか？

「まったく。体調悪いんだから――ハクサイ――起こさないでよ」

「あ、ああ……なんかすまん。きつと疲れてるんだな、お前。もう寝なさい」

「言われなくても寝るよ。ハクサイ」

もう、めんどうなので放っておこう。ヒマの生態は、まだまだ謎だらけだ。そのうち黙るだろ。

「ハクサイ」

「……」

「は、ハクサイ」

「……………」もう、ツッコまんど。

「ねえ、クラさん。ハクサイ」

「何だヒマ？　あと一応言っておくが、俺は白菜じゃねえぞ」

「当たり前でしょ。で、あのね。クシャミが止まらなくて眠れないの。ハクサイ」

「まさかそれクシャミのつもりだったのか!？」

「? さっきからずっとクシャミしてるじゃん、私。ハクサイ」

「えええ……」

どう聞き間違えたらクシャミに聞こえるんだよ。白菜白菜言ってるだけじゃん。しかも、凄い平坦な声で。

「どうすれば止まるかな、これ。ハクハクサイ」

お。微妙に変化した。

「ま、まあ、放つときや止まるんじゃないか? それが本当にクシヤミなら」

「むー、使えないクラさんだねー。ハクサイ」

悪かったな。生憎、俺はクシャミの止め方なんか知らん。
それにしても、不思議なクシャミだ。

それから小一時間が過ぎた頃。

ヒマはすっかり寝てしまったのか、あの謎なクシャミも聞こえなくなった。

ちなみに俺は、未だに新鍵組ニューキーズを見ながらゴロゴロしている。

「バクガトウ」

「……」

なんか聞こえた気が……いや、気のせいだ。そう、気のせい。
“
麦芽糖”^{ばくがとう}だなんて聞こえてくるはずがない。

「バクガトウ」

「……」

ああ、どうしよう。今絶対に麦芽糖って聞こえた。さすがにスル
ーできねえ。しかもヒマの方から聞こえてきた。

「ば、バクガトウ、バクガトウ」

めちゃくちゃ平坦な声で、麦芽糖を連呼するヒマ。

「ねえ、クラさん。バクガトウ」

「なんだヒマ？ あと一応言っておくが、俺は麦芽糖じゃねえぞ」

「あのね。またクシャミが止まらないの。バクガトウ」

「それは……クシャミだと言い張るには苦しくないか？」

「何言ってるんのクラさん。バクガトウ。どこからどう聞いてもクシヤミでしょ。バクガトウ」

赤く火照^{ほて}った顔で言うヒマ。どうやら、本当にクシャミのつもりらしい。

わんだほー。

「バクガトウ。でさ、喉乾^{のど}いたんだけど。バクガトウ」

「あ、ああ分かった。飲み物持ってくるな。お茶でいいか？」

「ん。ありがとう」

冷蔵庫から麦茶を取り出し、ヒマのコップに注ぐ。それを受け取るヒマ。

「ん。バクガトウ」

「ん。どういたしまして」

「……何が？」

「いや、一瞬ありがとうって言われたのかと」

「言ってるないよ」

ややこしわあ。麦芽糖ややこしわあ。

「ああ、もー、暇ー、つまんないー。ば、バクガトウ」

「十分面白いと思うぞ、お前のクシャミ」

「？」

次の日。一日安静にしてたおかげか、ヒマの風邪はすっかり治っていた。

「私にかかれば風邪の一つや二つチョロイもんだね」

昨日の弱りっぷりが嘘のように元気なヒマ。ちゃっかり、“風邪にかかる”と“私にかかれば”というのがかかっている。お、今ので三重にかかったぞ。どうでもよろし。

まあ、あの不思議なクシャミも出てないみたいだし、これでいつも通り――

「お、オリゴトウ」

――おっと、クシャミが出ちまったぜ。

「クラさん。……オリゴ糖がどうしたの？」

「は？ オリゴ糖？ いや、どうもしねえよ」

「え、あ……そう？ なら別にいいんだけど」

？ ま、いいや。

いつもながら変なヒマは置いて、さて今日は何しようか――

――
「オリゴトウ」

おっと、またクシャミが出ちまったぜ。鼻風邪かな？

「クラさん、またオリゴ糖って言ったよね？」

「は？ だから俺はオリゴ糖なんて言って――お、オリゴトウ

――言ってねえ！」

「言ったよ！ 今、絶対オリゴ糖って言ったよ！」

「？ どうしたんだ、お前。相変わらず変なやつだな。お、オリゴ

トウ。オリゴトウ」

「ええ……」

この日、俺は体調を崩し、一日中寝込むことになった。幸い微熱で済んだのだが、それにしても――

「――オリゴトウ」

……クシャミが止まらない。

7月〇〇日 華桜 はな さくら

5話『気になるアイツ』

夏休み。日中。めちゃ暑い。

俺は、この時期は部屋で溶けていることがしょっちゅうで、油断していると一日中寝そべっているだけの日もある。そんな怠惰で無駄な夏季を過ごしている為、毎年夏休みが終わったとたん周囲が一ヶ月分ぐらい進んでいてプチ浦島太郎な体験をすることになるのだが……。そんなこともどうでもよくなるぐらい、暑い。

あああ、あつい。だるい。身体が重い。最近は特に酷い。

そもそも何故？ 何故に、この日記は1話目から夏休み突入して

んの？ アホなの？ バカなの？ 死ぬの？

そんな心境だが、少しでも暑さを忘れようと現実逃避する為、この華家の家族日記、略して“華族日記”を書き始めたのは俺自身なのだった。

というわけで今日は。今日も怠惰に愚痴ります、華桜です。

そんな事を思考しながら、冷え冷えの麦茶を求め、ふらふらリビングに来てみると、

「これはこれは、姉御さん。ちーっす、なのですよ。今日も大変良
いお日柄で御座いやがりますね」

ソファの上で正座しながら両手を構えている娘っ子、もとい変なのが一人。……相変わらず、珍妙な日本語を使いやがる。

俺を姉御と呼ぶコイツは、もう一人の妹、華美菊。中学二年生。
通称“ミキ”。もしくは“ミッキー”。

そのミキだが、小学生の方の妹である向日葵にも負けず劣らずの変人だ。

まず、喋り方がかなり独創的である。なんと言うのか、など言うのだろう。粗雑なお嬢様口調？ グレた丁寧語？ ニュアンスはそんな感じ。

肌は白く、小柄で儂げな矮躯。そんな見た目に反し、中身は喧嘩

上等熱血思考。更に見た目に反しまくり、とてつもなくパワフルで運動神経が良く、喧嘩が異常なまでに強い。激強い。夏休み中はいつも外に遊びに行っていて、昼間家にいるのは結構、稀だ。

要は、見た目に騙されるなという思想を全力で体現したような奴。「……何やってだお前は。暑さで頭やらかしたか？」

冷蔵庫を開け、麦茶を取り出しながら聞いてみる。

「アイツが……気になるアイツが飛び回ってやがるのですよ」

中空を凝視しながら、言ってくる。……なんつうかアホっぽい。

んで、何？ 気になるアイツ？ 飛び回ってる？ ……ああ、つまり蚊のことか。夏だしな。要は、蚊がうるさいから捕まえようとしているのだコイツは。このクソ暑いのに不毛な。

「あっそー、せいぜい頑張ー」 「ソコですよ！」 「――ーれ？」

チュドンー！！

コップに麦茶を注ぐとした、その刹那。日常生活では決して聞くことは出来ないであろう、デンジャラスな爆音が鳴り響く。

――ーあ？ 何か確認しようとし、手に持っていたコップを置こうとする……が出来ない。というかコップが大破していた。

「ちくしょー、逃がしましたのです」

「……」

美菊――ー通称ミキが、投球後のピッチャーのように、全力で何かしらを放った後の体勢で悔しがっていた。

え？ ええ！？

「ミ、ミキ、お前何か投げた？」

「おっす、で御座いますよ。姉御さんのコップにアイツが止まっていたので、ミッキーダイナマイをお見舞いしたまでであります」

ジャラジャラと、左手で数個のパチンコ玉を弄びながら言うミキ。

ううん、おっかしいなー、俺の知る限りパチンコ玉にあんなミサイルのような破壊機能はなかった筈なんだがなー。と悠長なことは言ってられない。今のはミキの必中必殺の遠距離攻撃“ミッキーダ

イナマイ”だ。

「お、おおお、おま、おま、殺す気か!？」

「もちのろんでブチ殺す気で御座いますよ」蚊を、と続くのだろうきつと。

なんつう馬鹿力。あの細腕のどこからそんなパワーを引き出すんだ。

とにかく、ヤバイな。ここに居たら、やつの爆撃で病院送りにされかねない。秘められし動物の本能が、全力で危険信号を放っている。

「じゃ、俺はこれで退散させてもら——」「今です!」

チュドドドオオン!!

リビングの扉に向かおうとした状態で止まる俺。そして、近くの壁には煙を立ててメリ込む銀色の鉛玉が……3つ。危うく餌食^{えじき}になるところだった。

「……あ……あぶ、な」

こ、ここ、殺される! マジで殺される! あのアホ見境^{みさかい}が無く なってやがる! 目が武士^{もののふ}のそれだったぞ!

熱気にやられ重くなった身体に鞭打^{むち}ち、無言で猛ダッシュ。リビングの扉を開け、

「待ちやがれです!」

「えええ!？」

何故かミキが追って来た。

え、何!? 狙^{たくい}いは俺!? もしや蚊と同じ類だと思われてる!

? そんなにやかましかった!?

「ミツキーダイナマイ!」

チュゴオオン!!

銀玉が一発、扉を貫通する。数センチズレていたら、俺の背中に直撃していた位置を。

「こ、殺されるうううう!」

必死の形相で扉を開け、廊下に出る。やーばいやばい。

「逃がさないですぜ！　ダダダダイナマイ！」

今度は5つ同時で飛ばしてくる。追いながらで狙いを付け難いのか、弾道は全部ギリギリのところを抜けていった。

チュドドドドン！！

壁に、五つの銃痕じゅうこんのような窪みくぼが出来る。

まるでマシンガンじゃねえか。そんな軽い感想を言っている余裕も無い。それ程に、今のやつに容赦ようしやはない。

うふふ、私、今日死ぬかも知れないわ。ヒマは元気にやっていくかしら。

落ち着け俺の脳！　何を今更いまさら女の子っぽく振舞ふるまおうとしてんだ！

自分でやって吐きそうになる。最近、疲れてるのだろうか。元々こんなっすね。

「待ちやあああがれえええい、ですよ！　さあさ、大人しくお陀仏だぶつしなさい！」

ミキによる、ダイナマイ！　という怒声が耳をつんざく。

チュッドオオオオン！！

さらに、爆音も耳をつんざいてくる。

「ひいい、怖い、なにあの子怖い！」

廊下を突き進むと、玄関に差し掛かった。

いよし、レッツ外！　バイト以外の久々の外出が、こんな形になるうとは……。

まあいい、外に出さえすればこっちもんだ……て、あ、あれ？

あれ？

ガチャ。ガチャガチャ。ガチャガチャガチャガチャ。

あ、か、な、い、だ、と？

失念していた。冷静になって見てみると、家の中に風を通す為なのか、少し開いた状態でチェーンが掛かっていた。うっそお。

ビチュン！

呆然自失していると、顔のすぐ横をミッキーダイナマイが通過する。扉の鉄製の部分に当たり、独特な音が鳴り響いた。

あはは、冗談キツイつすよミキさん。

後ろを振り向くと、フシューフシュー、と引き結んだ口から危ない唸り声を発すミキ。

あー、今度こそ終わったかな、俺。

そのミキの威圧感に気圧され後退するが、ガン、と無情にも扉に遮られ、逃げ場を失ってしまう。ううん、諸行無情なり。

「ミッキイイイイイイー――」

「あ、ああ、ああ……」

なむあみだぶつ。さらば現世、やあこんにちは来世。

泣けるぜ。こんな下らない理由が死因だなんて。蚊と間違われて鉛玉で打ち抜かれた、なんてな。

イイハナシダナー。タノシージンセイダタナー。ぐっばい！

「――ダイナマイ――！！」

この日最大の爆撃音が、華家に鳴り響いた。

……。

……………。

……………？。

さて、死んだか？

ここは天国ですか？

地獄だったらヤダな。

どうかパラダイスでありますように。

恐る恐る瞑っていた目を開いてみる。

そこは――天国だった。何故って？

目の前に天使が居たか

ら。

……天使？

いやちげえ。前言撤回、間違い間違い。今のなし。

目の前にいるコイツは、決して天使なんかじゃねえ。天使の皮を被った超絶怪力悪魔だ。

そう。そこには、ニツコリと天使のような笑顔を浮かべる、妹、ミキがいた。

要は生き残ったわけだ。

「姉御さん、安心してくださいです。“気になるアイツ”は、このミキめが全て仕留め^{しと}めました。もう大丈夫でやがりますよ」

「……は、はい？」

ミキが優しく言うてくる。

なんだなんだ？ もう安心？ 気になるアイツ？ 仕留めた？
意味が分からない。

「な、なんだ気になるアイツって」

蚊、蚊、蚊、のことではなかったらしい、どうやら。

俺の質問に、キョトンとした表情で返す。

「？ 姉御さんには見えなかったのですか？ さっきまで姉御さんの周りにウジャウジャ群がっついていやがったですよ。“アイツ”が。だからわたしがミッキーダイナマイで全て撃ち落したんツスです。身体がとても軽くなっているはずで御座いますよ」

“アイツ”？ 俺には見えなかった？ ウジャウジャ？ 撃ち落した？ 身体が軽くなった？

それらの言葉が、頭の中で化学反応を起こし、謎の答えが浮かび上がってくる。

……まさか。

ミキに言われた通り、試しに身体を動かしてみる。すると、どう

だろう。最近の身体の重さが嘘のように、よく動く。その軽いのなの。まるで、常日頃^{つねひじょう}から付けていた重りを全て取り外したかのような感覚。

ま、さ、か。

「なあミキ。一つ聞いていいか？」

「一つと言わず、いくらでもどうぞツスます」

「その、なんだ。俺の周りに群がっていた“アイツ”ってのは、どんな姿形をしていた？」

「本当に見えてなかったんですか。“アイツ”がどんな格好だったかというと、皆さん揃って真っ白な服を着てやがりましたね」

「ど、どんな風に“気になる”やつだったんだ？」

「うらやめしやうらめしや、ってやかましかったです」

呪ってやる呪ってやる、とも言ってましたね、と補足。

「なるほどー。そうかそうかー。蚊じゃなかったんだなー。それはお姉さん予想してなかったかなー」

アイツ……それは蚊などではなく、なんと“アイツ”だったのだ。

「――――」

「姉御さん、どうしやがったのですか？　口から何か出てますよ。」

“アイツ”化でもするのですか？」

「――――――」

「……気絶してますね」

翌日。

身体はやたら軽いし、しかもいつもより暑苦しい日。にも関わらず、その日の俺は、布団の中から顔を出すことが出来なかったのであった。

7月〇〇日
華^{はな}
桜^{さくら}
恐怖で震えながら、
布団の中にて

6話『トラブレター』

夏休み。夕方。むし暑い。

今日は。華はな 桜さくらです。最近、こればかり言っている気がしますが、とにかく暑いです。

現在、バイト先からの帰り道。日は沈みかけているにも関わらず、最後の悪あがきとでも言うかのように、殺人熱波を放ってきている。うう、俺のゾンビばりに太陽光線に弱い皮膚は、その地獄の如き業火によって、あーもーとにかく暑いんだっつもの！ 早く沈め太陽コラ、このやろコラ！

そんな意味も無いストレス発散の為だけの罵詈雑言ばりぞうごんを、俺達地球の尊い恒星様に浴びせると、いつの間にか家の前まで辿り着いていた。

「待ってたかい、俺のとってもユートピア」英語の成績は御覧の通り。

さて、扇風機せんぷうきに団扇うちわに氷、様々な避暑法が俺を待ってるぜ。：

…ん？ エアコン？ 妄想の中で満喫する予定です。

そんな不毛なことを思考していると、

「……何だこりゃ？」

俺の注目を一身に集めるそれは、赤と錆色が独特なコントラストを産んでいる、手紙のはみ出た華家はなけのポスト。

まあまあ、はしたないお口ですこと、と謎な感想を漏らすわけもなく、ポストの口から半身を飛び出させたそれを引っ張り出す。

その手紙には『華はな 美菊様宛みきく』と記されている。しかも、なんとハートを模ったシールかたしで封をされていた。

これは……もしかしてもしかすると……。らう、れたーというやつでは？

いやいやいや。ミキ宛だぞ？ あの怪力馬鹿宛だぞ？

うーん、でもアイツ黙って座っていれば、それはそれで“深窓の

令嬢”なんて呼ばれそうな容姿だからな。勘違いする可愛そうな輩が現れてもおかしくはない。

とすると。中身が物凄く気になるんだが、これ。ちょこつと覗くぐらいなら……。

待て桜、仮に姉妹同士だとしても、最低限の礼儀作法は必要なんじゃないか？ でも、らう、れたーだぞ？ 今時の中学生が、らう、れたーだぞ？ それもミキ宛の。

これは気になる。これは、気になる。うっかり開けちゃっても仕方ないんじゃないか？ でもプライバシーがないやつだと思われたら嫌だな。されど気になる。

しばらく好奇心と自制心を葛藤させているとふと、あることに気付く。

「うわ」

今までほとんど覗いたことがなかったから気付かなかったが、手紙の入っていた赤色のポスト。その中には他にも大量の手紙が詰まっていた。どうやらこのらう、れたーは、その中の一つに過ぎないらしい。

とりあえず全部取り出す。

「ひい、ふう、みい、よう、ごう、ろう、なあ、やあ、くう、とう、——、ふくすう、たくさん、もりたくさん、いっぱい、もつといっぱい、たいりょう、」

途中から数えるのが面倒になる。何通あるんだ、これ。

特筆すべき点は、なんとその手紙の宛先が全て『華 美菊』だということ。しかも全てがハート型のシールで封をされている。

ここまですくともうホラーだな。

なんだか一通ぐらい見ても全然大丈夫のような気がしてきた。つっても気味悪くて見る気がうせた。

「というか気付いたなら誰か処理しろよ。ミキんとこ持ってこう」
仕方ねえな、と両手いっぱいの手紙を持ち、全身を駆使して扉を開け、開け、開け、開けコラ、開けることに成功。

「ただいまー」

大量の手紙を抱えながら挨拶。よしよし、一通も落とさなかったぞ。後はこれをミキのいる部屋まで運べ、ガッ。ビタンッ。バサバサバサ。

うう、段差の存在忘れてた。

そんなこんなで、様々な障害物に四苦八苦しながらやっとこさミキの部屋の前まで辿り着く。アレだ。階段は強敵だった。

「おい、見てみるミキー――」

ガッ。ビタンッ。バサバサバサ。

言い終える前に、部屋の扉のちよつとした段差に足を引っ掛ける。うう、段差の存在忘れてた。

「姉御さん、そんなところで寝ていると風邪をひいちゃいますよ?」

「うるせえ。お前が片付けちゃんとしないのがいけないんだ」

部屋の奥から例の美菊ことミキが出てくる。

「まあいいです。それわざわざ持ってきてくれたのですね」

礼は言ってやるぜです、と散らばった手紙を掻き集めるミキ。と
ころで、

「なあ、お前って実はモテるのか?」

「姉御さん、そんなところで寝ていると風邪をひいちゃいますよ?」

「寝言じゃねえよ!」

「いえ、突然ありえない発言を聞いたので、つい」

「何言ってるんだお前。そんな大量のラブレター貰っというて、モテてないわけないだろ」

「姉御さん、そんなところで寝ていると風邪をひいちゃいますよ?」

「だから寝言じゃねえよ!」

「いえ、唐突に意味不明なことを言われたので」

不思議そうな表情で、掻き集めた手紙を力任せに合体させるミキ。そのラブとレターで出来た球体をゴミ箱にダストシュート。ぽす。

……ええ。ひでえ。

「ミキ、それはあんまりじゃないか？ 差出人が可哀そうだろ」

「なあにを言ったりやがるのですか。やつらに失礼も何もないですよ。毎日毎日送りつけられて、迷惑この上ないです」

「なんだ、そんな嫌なのか？ ラブレター貰うの」

「……らぶ、れたー？ なんですかそれ、どこの国の料理でやりますか？」

心底訝しそうな顔で聞いてくる。料理で。あえていうなら乙女の国かな。

「まさか分かってないのか？ お前が今さっきダストシュートした手紙の塊。あれ全部お前宛のラブレターだろ、どっからどう見ても」
「マジで何を言ってるやがるのですか、姉御さん。あれは果たし状ですよ」

「ミキ、そんなところで寝ていると風邪をひくぞ？」

「寝言じゃねえですよ！」

や、だって。意味が分からない。コイツは、あのラブレターの束を果たし状だと言うのだ。

……果たし状で、あれか。ちよいとタイマンしようぜ！ みたいなノリのアレか。

「いやいやいや」

部屋の隅のゴミ箱から先程のラブ&レター製の塊を取り出し、一通広げてみる。

そこには、

「『敬愛なる美菊様へ。貴女は私のことを覚えていますか？ 私は覚えてます。あれは、私が不良に囲まれ脅されていた時のこと。誰もが見て見ぬふりをする中、貴女だけが駆けつけて私を守ってくれました。とても嬉しかったです。それからというもの、寝ても覚めても貴女のこと忘れられません。もしよろしければ、7月〇〇日午後5時に、校舎裏にある桜の木の下に来てもらえないでしょうか？ 伝えたいことがあります。木下 きのした 恋より』ってこれ、まぎれもなく————」
「————まぎれもなく果たし状でしょう？ 闘士

が全く伝わってこねえのは不思議ですが」

ダメだコイツ。今の手紙のどこをどう解釈したんだ。

にしても、女子が女子にラブレターで……。我が妹ながら、未恐ろしいやつだ。しかもこんな大量に。てか他のも開いて読んでみると、全部『木下 恋』とやらからだった。ええ……。怖。

「つまり、こういうことでやりますよね？ 『私の勝てなかった不良共をフルボッコにした貴様の強さに戦慄^{せんりつ}を覚えた。寝ても覚めても貴様を討ち負かすことしか考えられねえ。7月〇〇日、午後5時、桜の木の下で待ってる。テメエの血で桜吹雪を吹かせてやるぜ、ウケケー！』私にはそうとしか読めません！」

「お前、それはもう病気だぞ」

ミキのバトルマインドにかかれば、恋文も果たし状に早変わりだ。すまん、木下 恋とやら。代わりに謝っておく。

「つうか7月〇〇日って明日じゃねえの？」

「無視です無視」

「行くだけ行ってみろよ」

「めんどくせえで御座います」

「50円でどうだ？」

「仕方ないですね」

安いやつである。

次の日。7月〇〇日、午後5時半。ミキが帰ってきた。

「で？ どうだった？」

「友達になりました」

「『やめておきなさい、あなたじゃ私の相手は勤まらんですよ』『そう……ですか。なら、せめて友達から初めてみませんか？』みたいな会話したろ」

「おお、すごえです姉御！ 一字一句完璧にあってますです！ エスパーさん！？」

「俺の勘すげえ！」

一字一句あってんのかよ。会話の流れ予測しただけなんだが。

「エスパ―、略してパーと呼んでやるです」

「それはやめろ」

にしても良かった良かった。相手の子を問答無用で殴り飛ばして
いたらと思うとゾツとする。やりかねんからなコイツは。

や、相手が女の子だから手を出さなかったのか。もし相手が男だ
ったら、うんまあ、ご愁傷様だ。

「ところで、パーさんは貰ったことないので御座いますか？ 果た
し状」

「野暮なこと聞くもんじゃないの」

「??」

「あと誰がパーだ」

7月〇〇日 華 桜

7話『オババと白雪姫と毒』

「ふえっふえっふえ。さあ、白雪姫。このリンゴをお食べ」

夏。昼。暑。

こんにちは。華^{はな}桜^{さくら}です、はい。

昼過ぎまで部屋で惰眠を貪り、いい加減腹が減ったのでリビングに来てみると、我がシスター向日葵^{ひまわり}が妙な格好で妙なことをやっていました。

「これはこれは！ どうも御丁寧にありがとうございますですよ！」

その妙なヒマの妙な言動に応えるのは、これまた妙なシスターの美菊^{みきく}。

……何やってんだコイツら。ついに暑さで頭やらかしたか？ それとも俺の頭がやられてしまったのか。

とりあえず、少し様子を見てみる。いきなり過ぎてついていけない。

「ふえっふえっふえ。元気なお姫様じゃ」

これはヒマ。黒いローブを羽織り、何故か老婆のような台詞を言っている。声もかなり皺枯れていて、というか婆ちゃん声うまいなヒマ。そういう前のオレオレ詐欺の時もこんな声を出していた。

「ありがたく頂くぜです」

こちらはミキ。普通にいつも通りの格好と、例のグレた丁寧語。

いつ見ても肌は雪のように白く、身体は細く華奢だ。野菜でいうと、まんまモヤシである。

グシャ。ボトボト。

そしてこれは、リンゴがミキの手により握り潰された音。本当、あのモヤシはどこから筋力を捻出しているのだろうか。華家の109不思議の内の一つである。ふふふ、あと108つあるのですよ。煩惱の数より一つ勝っているところがミソです。

「貴様、毒リンゴを食わせようとしたですね？ 私の命をとろうたあ、いい度胸ですぜ！ どこの組のモンじゃい!？」

「ふえっふえっふえ。大海の主、人魚組のオババじゃ。よく毒入りだと見破ったの」

「ふ、あまいです。私のこの心裏眼にかかれば、貴様の思考などお見通しだぜなのです」

「ふえっふえっふえ。あまいのう、白雪姫。そのリンゴは皮に触れるだけで体中に毒が回るのじゃ」

「な、なんだとです!？ グハア!!」
倒れるミキ。

「ふえっふえっふえ。ん？ そういえばワシも直接リンゴ触った気が、グハア!!」
倒れるヒマ。

「……く。私もここまでですか。……後は頼むですぜ、七人の小人……達。ガク」

「ぐぶえっふえ、っふえ。オババ一生の不覚! ガク」

「……」

「……」

「なんぞこれ？」

二人の謎過ぎる奇行に思わず本能的にツッコんでしまう。どこまでも意味不明だ。曲がりにも途中まで白雪姫だったのに、いきなりオババも白雪姫も死にやがった。

「何って。見ての通りで御座いますよ、姉御さん」

「夏休み後にある学芸会の練習してるんだよ、クラさん」
普通に二人とも起き上がって、そう言う。

「どんな学芸会だよ」

ただ毒リンゴで姫とオババが死んだだけじゃねえか。
てか、とんでもないアホだなオババ。

「そんなに感動しなくても」

「してねえよ!」

感動というか、疑問符しか出ない。台本考えた奴とんだエセ野郎だな。

「私が考えた台本なんだよ、凄いでしょ」

とんだエセ野郎は俺の妹だった。

「て、は? ヒマが考えた台本で学芸会やんのか、お前のクラス」

「だから凄いでしょ? って言ってるの。誉めよ称えよ」

「私は付き添いで手伝ってるのですよ」

「つまりね——」

ヒマの説明によると、つまりこういうことらしい。

夏休み明けにある学芸会の台本を、代表に選ばれたヒマが考えることになった。でもって、ついさっき書き上げた台本を姉のミキと実演してみた、と。

生徒に台本考えさせるなんて、なんとまあ変わった学芸会だ。

「先生が極度のめんどくさがりでさ。何でもいいから決めといって、ってね。そんじゃ自分達で作ってみようよーって委員長が言うから」
「随分とフリーダムなクラスだな。何でそんなに教師やらせてんだ」

「委員長も委員長だよ。確か、華とかいう変な苗字のやつだよ」

「お前じゃねえか!」

「えへん」

「いはるな」

まあ、自由なのは良いことだと思います。ただ、自由と放置は別物だと思えますよ先生。

ほら。おかげで妹達がこんなに楽しそうにしてんじゃねえか、めんどくせえ。教育委員会は何をやってるんだ。

「てかお前の役オババなんかでいいのか?」

ヒマのことだから、真っ先に自分を主人公にしそうなもんだが。

オババて。魔女だろ？ ばりばりの敵役じゃん。

「うん、いいの。オババ主人公だもん」

その発想は無かった。てかどうせ、絶対その場の思いつきなんだろう。どんな元氣婆ちゃんだよ、主人公なオババて。

これが世に聞くガバイ婆ちゃんというやつだろうか。それはガベえな。ガベえてなんぞ。そもそもガバイて何だっけか？ ヤバイの強化版？ メガとギガのような関係だなきっと。

「ヒマ。悪いことは言わないから、別のお話に変えなさい」

「さすがに悪ふざけが過ぎたかな？」

悪ふざけの自覚はあったのか。そりゃ素でこんなこと言ってたら通院ものだからな。だが自覚があるのは、それはそれで厄介な気がする。

「うーん、別のって言われても。いや一応考えてあるんだけどさ。聞く？」

「是非とも聞いてみたいで御座いますよ、ヒマさん」

横から会話に突っ込み、ヒマを促す。なんか目が輝いているが大丈夫かコイツ。類は友を呼ぶってやつだ。

ちなみにどうでもいいが、ミキは年下相手でも“さん”付けで呼ぶ。

「どんなんだ？ 聞いてやるから話してみ」

ちゃんと直すところは直してやらんと。せっかくヒマの学芸会なんだから、ちゃんとしたものにしてやりたいし。何度も言うが俺は隠れシスコンだからな。

俺とミキが聴衆モードになり、促されるままに話し始めるヒマ。

「むかーしむかし、あるところに。お爺さんとお婆さんが住んでいました」

よしよし。ここは普通だ。続けて続けて。

「ある日、お爺さんは山へ芝刈りに。お婆さんは川へ洗濯しに行きました」

うんうん。斬新さの欠片もないが、普通のでいいぞ、普通ので。

「お婆さんが川で洗濯をしていると、どんぶらこーどんぶらこー、と大きな桃が流れて来ました」

桃太郎やん、まんま。いや別にいいけどな。突飛すぎる話よりは全然マシだ。

「ふとお爺さんの顔が頭によぎってイラつときた婆さんは、桃を粉^{なみじん}微塵に粉砕しました」

「ええ!？」

何やってんだ婆さん!？ てか放つとくと爺さんの命が危ねえ!

「オギイアアアアア、という泣き声と赤い鮮血が吹き出したそう
な。なんか興奮したお婆さんは、返り血をベロリと舐めました」

生々しいなおい。もう完全にアウトだろ、これは。フォローを入れる隙が見当たらない。

これ学芸会でやったら泣くぞ子供達。ああ、ヒマも子供だったか。

「『かかったなオババ! その血は毒だ!』『そ、その声は白雪姫

!？ グハア!!』お婆さんは血に混入されていた猛毒により、帰らぬ人となったそう。『ふ、いつかの仕返しだ。お前の負けだなオババ。フハハハハハ、は、は? グハア!!』ついでに血を浴びていた白雪姫も帰らぬ人となったそう。めでたしめでたし」

オババも白雪姫も同じレベルのアホだったそう。

「で、どだった?」

「めでたかったな。オババと白雪姫の頭が。ナシに決まってるだろ、こんな話」

「ええ? やっぱ、お爺さんをもっと活躍させるべきだったの?」

「や、そこじゃねえよ」

コイツの着眼点は根本的なところでずれている。というか、脳の構造自体が根本的なところでずれている。

「これはアリですね! オババと白雪姫の私怨が、とてもいい味を出してやがります」

ああ、ここにもずれたやつが。

それらの姉が俺なのだと思うと……。何故だろう? 目から水が

溢れてきそうだ。

「まったく、頭が固いねクラさんは。文句言うならクラさん考えてみたら？」

「なんで俺が」

やだよ。こういうの考えるのは昔から苦手なんだ。

小学生の頃、国語の宿題でオリジナルストーリーを書かされたことがあった。

その時、俺の書いた物語への担任の感想が『資源を無駄にするのはよくないですよ』だ。それは落書きじゃないですよ先生！ そう言ったら本気で謝られたのを覚えている。何故だろう？ 目から水が溢れてきそうだ。

「あの、私も一つ考えやがったのですが、よろしいですか？」

「期待しないで聞いてやる」

むふー、と唸ると「それではでは」語り始める。

「むかーしむかし。あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。ある日、お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ桃刈に行きました」

まあ、普通の桃太郎――いや、微妙に変だ。

桃刈り？ え？ 確かに川に桃取りに行く物語だけどな。

「お婆さんは言いました。『ワシは桃刈り王に、絶対なる！』」

マニアックな王だな。それにどっかで聞いたことある。

俺の嫌な予感をよそに、物語は続く。目を輝かせながら聞けるヒマが羨ましい。

「時は桃刈り時代。荒れ狂う川にドンブラコする巨大な桃達。その濃厚な甘味を求め、数々の屈強な婆さん達が激流の大河へと足を踏み入れやがりました！」

ツッコまないぞ。俺はあえてツッコまないぞ。

あからさますぎて、何か言ったらむしろ負けな気がする。

「かつての桃刈り王“シルバー・P・ロチャー”は死の間際に言い放ちました。『この世の全ての甘味をそこに置いてきた！ 探せえ

！ 一繋ぎの果実！ ワンピーチを！！』」

「ちよっと待て！！」

いきなり大声を出した俺に驚いたのか、目を丸くしてこちらを向く二人。

口を挟まずにはいられなかったです。でも仕方ねえだろ。そりゃ、なあ？ こんな俺を誰が責められようか。

「ど、どうしたのですか姉御さん。いきなり著作権侵害を阻止するかのような声を上げて」

「それは確信犯だと名乗ってると判断していいんだな？」

「ミキ姉、さすがにワンピーチはまずいよ」

おお、珍しくヒマがまともなことを。そうだ、もっと言ってやれ。
「ええ？ やはり、もう少しお爺さんを活躍させるべきだったので御座いますか？」

「それもあるけどね」

それもあるのか。なんでお前らの着眼点はいつもそこなんだ。

「ワンピーチじゃありきたりだって言ってるの。例えばね……ピーチをピースに変えてみると、ワンピー———むぐ」

「言わせねえよ？ それは言わせねえよ？」

すんでのところでヒマの口を抑える。危な！ もう隠せてるかどうか非常に怪しいけどな！ コイツにまともな意見を期待したのがバカだった。

「ヒマさん、ワンピーチのどこがありきたりなのですか！ ピーチをピースに変える理由が何かありやがるのですか？」

「よく分からないけど、ピースにすると人気が出る気がするの」
気のせいだ。絶対気のせいだ。そりゃすげえ人気漫画だけどさ、あれ。それを真似たからって人気は真似できないぞ。

「とにかく違うのになさい」

「何故のですか！？」

「なんでも！」

むー、と口を揃えて不満そうな妹二人。

一応お前の為なんだけどな、ヒマ。そんな姉の気苦労も知らない
生意気小学生は、何やら思わせぶりに黙考していると、

「新しいの思いついた」

「……話してみろ。駄目元で聞いてやる」

コイツは、どうしてそうポンポン無駄なことばかり思いつくの
だろうか。あきらかに脳細胞が偏っている。

「むかしむかし、あるところに一寸法師が住んでいました。鬼と戦
いました」

めっさ省きやがった！ ショートカットの域を飛び越え、ワープ
だ。説明不足のレベルじゃねえ。

「鬼は言いました。『ふえっふえっふえ。ここで会ったが三回目。
ついに追い詰めたぞ白雪姫——おっと間違えた、一寸法師じゃ
った』」

オババじゃねえかコイツ。鬼の皮を被ったオババじゃねえか。

「『まさかこの一寸法師——おっと間違えた、白雪姫をここま
で追い詰めるとはな。やるなオババ！』」

コイツに至っては隠す気すらねえ！ 言い直して自分で正体バラ
した！

「なんだかんだで二人とも毒で死にましたとさ。めでたし」

全て省きやがった！ 結果は分かりきってたけどな、オババと白
雪姫が出た時点で。

扱いが、あんまりにもあんまりである。

「オババと白雪姫に恨みでもあんのか」

「ぶっっちゃけ途中でめんどくさくなって」

「そろそろ私も飽きてきやりました。そんなことより、外出て体
動かしたいのですよ」

なんていい加減な奴らだろうか。ミキに関しては、既に走り去っ
てしまう始末。結局、何がしたかったんだコイツら。

「じゃ、学芸会もう桃太郎でいいのか？」

「ぶっっちゃけ私が主人公ならどーでもいいーよ」

「その為の台本作成提案だろ」

「誉めよ称えよ」

にこーっと笑うヒマは、まさに太陽を浴びる向日葵のよう。

……ま、いいか。なんやかんやで楽しそうなら、それが何よりだ。
めでたしめでた……いか？ まあ、おめでたくはあるな。

7月〇〇日 華 桜

8話『レストラン・徳川日記』

今日は週に一度の御楽しみ日。行き先はレストラン『ユニークス』。

何十年前、ここ森羅町に移り住んできた外来人が開業したもので、その孫が今の店長をやっているらしいが、その辺の込み入った事情はよくは知らない。

とにかく料理の味にはなかなかの定評があり、固定客もそれなりの数ついているちょっとした老舗だ。すぐ近くに『森羅学園』という大きな高校が建っている為、高校生の客も結構来る。

まあ、店のことなんてどーでもいいんだけど。

しばらく大通り沿いを歩いていると、ようやく『ユニークス』に到着。正面を周り従業員用の裏口から入、るわけでもなく、普通に正面から入店。

「いらっしゃいませー」

接客用スマイル百二十パーセントな笑顔と挨拶を、ウェイターから掛けられる。そのお目当ての声を聞け、顔を見ることが出来、思わず頬が緩みそうになってしまう。

……おっと、下心があると思われてしまうだろう、静め、静むんだ心。

……ふう。やはり、今日も相変わらずカ、カ、カワ、カワカワ、カワワ、割愛。

「て、うわ」

その挨拶をしてきたウェイターは、来店した客の顔を見て――一つまり僕の顔を見て、そんな失礼なことを言う。心外な。

「なんだい、僕がここへ来ちゃいけないのかい？」

受付を済ませると、わざわざ、そのウェイター――看板娘“フラワー”の近くの席に座り、思ったことをそのまま聞く。

「……」

質問に数秒黙るウェイター、もとい、フラワー。かなり嫌そうな表情で、しばらく僕の顔を見つめている。

……。

こらこら、そんなに見つめるな照れるじゃないか。

僕の頬が赤くなってき始めた頃、フラワーは溜息をつき、ようやく客用の敬語で言葉を返す。

「……はあ。今日のご注文は何に致しますか？」

「アイスコーヒーを一つ」

「かしこまりました」

心なしか物凄く抵抗ある口調でかしこまり、カウンターへと歩いていく愛しのフラワー。その後姿を見て、僕は満足に吐息を漏らす。うーむ、今日も征服がよく似合っている。

小柄で、整った凛々しい顔立ち。若干釣り目気味だが、覇気の感じられない気の抜けた瞳。後ろで縛られた長く流麗な黒髪。よく通る、凜とした声音。その全てが、僕の心を魅了してやまない。

週に一度の御楽しみ日。そう、その目的は店の料理などではなく、看板娘のフラワーである。

「他にご注文はよろしいでしょうか？」

カウンターからこちらに戻ってきたフラワーが、盆からアイスコーヒーをテーブルに置き、感情を殺した平坦な声で他の注文の有無を聞く。

「君を一つ」

ガス。

「うござ……」

あ、足の小指を思い切り踏まれた。なんてピンポイントな。

「ちょ、き、君、仮にもお客様の足を踏むのは酷いんじゃないかい？」

「申し訳ありませんが、当店ではそのようなサービスは提供していません。他の店を当たって下さいませアホ、おっと、お客様」

「今アホって言ったね！　今、絶対アホって言ったね君！」

「あはは、ご冗談を。聞き間違いではないですか？ 耳鼻科はあちらで御座いますよお客様、おっと、アホ」

「今のは言い直す必要ないんじゃないかい!？」

なんて接客態度だろう。耳鼻科で。耳の検査をしてこいと？ フラワー、君は舌の検査をしてくるべきでは？

「よろしければ、精神科と脳外科も御紹介いたしますが？」

「よろしくないよ」

「そうですか。それでは私はこれで失礼させて頂きま死ね」

死ねって言った！ どさくさに紛れて死ねって言った！ 敬語に擬態してた！

目で必死に講義するも、しかし完璧無視で去って行ってしまうフラワー。

見た目に似合わず、なんてトゲトゲしい性格なんだろう。敬語以外は、普段学校で話すのと全く態度が変わっていないじゃないか。

「だがそれがいい!」

ツンデレというやつだろう。普段ツンツンしている分、ふとした時にデレるのがグツとくるのだ。今まで一切デレられた試しがない気はするけど、それは気のせいだということにしておく。

あー。そういえば、自己紹介がまだだった。そうだね、改まって紹介させてもらうとしよう。

僕の名前は、徳川^{とくがわ}家善^{いえよし}。恋する乙女ならぬ、恋する乙男^{をじし}、高校二年生。意中の相手は、幼少時代からの幼馴染であり、今なお同じクラスで隣の席、喫茶『ユニークス』で働くウェイトレスこと“フラワー”だ。

さて、今日もマイエンジェルの仕事っぷりを眺め、存分に目の保養に励むとしよう。

「三番テーブル、ミラノ風ドリア一つ、ピアノ風ドリア一つ注文入りました」

他の客から注文を取りに行っていたフラワーが、厨房にそう伝える。

……ピアノ風て何だろう。相変わらずアレな料理名だけど、まあ、そんなことはどうでもいいや。僕の視線は愛しのウェイトレスに釘付けた。

「あいよー」

厨房からやる気の無い声が返ってくる。

しばらく時間が経ち、待つ間別の仕事をしていたフラワーが、厨房の店員から料理を受け取る。そのまま三番テーブルまでいそいそと早足で向かい、

「お待たせいたしました。ミラノ風ドリアと、ピアノ風ドリアで御座います」

丁寧にお辞儀をすると、男性客二人組みの座るテーブルに例の怪しい名前の料理を置く。

「ねえねえ、君、可愛いねえ。どこの学校の子？　後で僕と夜の感動ロマンティックナイトでもどうかな？」

男性客の一人――茶髪野郎が、僕のフラワーをナンパしやがった。

というか夜の感動ロマンティックナイトで。同じ単語が二回入っている。アホ丸出しだなアイツ。

「いえ、申し訳ありませんが、当店ではそのようなサービスは提供していません。他の店を当たって下さいませアホ、おっと、お客様」
二ツコニコ、目が笑っていない笑顔で茶髪野郎の誘いを断る。流れているのだろうか、あの断り方。

「またアホのアホアホラッシュが始まったか」

もう一人の男性客は、諦観した眼差しで相方の言動を眺めている。もう慣れきっているのだろう。だがアホと言われた茶髪野郎は、傷ついた様子も怒る素振りも見せずにしつこくナンパを続ける。

そのまま何分経っただろうか。フラワーの額に青筋が浮かび始め、丁寧語もすっかり崩れ去った頃。または、僕がフラワーを助ける為に席を立とうとした頃。

もう一人の諦観していた男性客が「支払いは全額あのアホに」レ

ジに言い残し、コソコソ店から出ていった。

……ええ。そいつの意外な行動に、僕は立ち上がりようとしていた足を止める。

「だからさ、今夜………て、何でカジヤ外にいの？ あ、ダッ

シュすんな！ 待てあの野郎——」 「待つのはテメエだよコラ」

「ひっ」 「千五百八十円になります」

逃げた相方を追おうとする茶髪だが、目が笑っていない笑顔のフラワーに肩を掴まれ、哀れ二人分の食事代を払わされる。

自業自得、というかアホだろアイツ。

「もう二度と来るからな！」

捨て台詞を残し去っていく茶髪野郎。そこは『二度と来ない』じゃないんだ。でもなんだか、そんなに悪いやつではないような気がした。

フラワーが小トラブルに巻き込まれ、心中穏やかではなかったが、なんだかんだ片付いたみたいで安心する。ホッと一息、アイスコーヒーを飲もうとし、

「あれれ、また来たんだ徳川君」

「あれれ、そんな貴女は家連さんじゃないかい」

後ろから声を掛けられる。

同じ高校の家連やれん 忍女しのめさんだ。クラスは確か二年B組だった気がする。僕は常連だから顔も名前も覚えられていて、よくこうして話をするところがあるのだ。

「ありり、今日もフラワーちゃん目当て？」

「そ。目の保養がてら、変なのが近付かないか見守ってるんだよ」

「へええ、ナイトかそれともストーカーか、見方で立場が逆転するね」

「失礼な、僕はナイトでもストーカーでもなくて、フィアンセだよ」

「にひひ、既に結婚は決定なんだ」

可笑しそうに笑う家連さん。

この人は、僕らの愛を応援してくれる話の分かる人だ。店長から

は『くのいっちゃん』と呼ばれている。名前が女忍者っぽいからだろうが、こちらは“フラワー”と違って全然客には馴染んでいない。そりゃそうだ、“くのいっちゃん”はあんまりだと思う。

「ねええ、徳川君せっかく来たんだし、フラワーちゃん呼んで来てあげよっか？」

「ありがと。でも遠慮させてもらうよ、アイツの仕事邪魔するのは悪いから。ここで見てるだけでいいよ」

「にはは、そんなに想われてて羨ましいよあのコが」

それからフラワーのやつを眺めながら、ひとしきり家連さんと会話を交わし合い、良き知り合いとして親交を深める。やはり話の分かる人だ。

「んじゃじゃ、そろそろ仕事に戻らせてもらうね」

「ん、バイト頑張っというで」

キリの良いところで会話を切り「いらっしやいませー」新たに来店した客に、ウェイトレスとしての任をまっとうしに行く。

さて、コップの中のアイスコーヒーもなくなっちゃったし、何か他のものでも頼もうかな。もちろん、ご指名はフラワーで。

軽食でも注文しようかと、呼び鈴に手を伸ば――

「こんのクソ女ああま！！ 俺の服に汚れ付けやがって、タダで済むと思っあまてんのかゴラア！？」

――そうとし、いきなり店内中に響いた怒声に心臓が飛び上がる。

怒鳴り声のした方向を見ると、いかにもな大男が、ちよこつとだけ水に濡れた袖を指差しウェイターの一人の襟首を掴んでいた。……実際にいるんだな、ああいう客。暢のんき気な感想が頭によぎるも、そんなものは一瞬にして消え去る。

大男に襟首を掴まれているウェイター。困った顔のその人が、さつきまで話していた家連さんだったからだ。

「テメエ、ちよおおと顔貸せやコラ！ その辺の路地裏にでも連れてってやる」

大男は家連さんの腕を力強く引っ張り、店の外に連れ出そうとする。カウンターの方からも、なんだなんだと何人かの店員が覗いている。

事態に気付いた一人が、店長を呼びに行ったのだろう、店の奥に消えていった。

ちよ、あれやバイんじゃないか!?

あのままだと店長が来る前に連れ出されてしまう。というか誰か止めろよ!

僕は急いで席を立ち、大男と家連さんの仲介に入ろうと近寄る……が、出来なかった。

あまりに——あまりに唐突なソイツの行動に、思わず足を止めてしまったからだ。

誰もがその光景に、啞然と口を開く。

バシャバシャバシャ。

コップに水を入れる為の、氷水入りのポットを逆さにし、

テーブルの上に立ち、大男の頭からぶっ掛ける、

ウェイトレス———フラワーが居た。

「申し訳ありませんが、当店ではそのようなサービスは提供していません。他の店を当たって下さいませお客様、おっと、ど低脳」

場違いにも、フラワーの満面の笑顔に、一瞬心臓がときめくのを感じた。

—
—
—
—
続
く
—
—
—
—

7月〇〇日
徳川日記より抜粋 とくがわ

「え？ 何コレ」

「どしたヒマ。変な声出して」

「や、だって。何このノート」

「俺のクラスメイトが書いた日記だが？」

「日記のクセに続くってどういうことなの」

「さあ、アホなんだろう」

「てか、クラさん何書いてんの？」

「ん。会話記録」

「なにそれ」

「投稿者が、徳川日記の感想聞かせろって言うから」

「投稿者？ 誰それ」

「俺達が書いた日記を改良して、どっかのサイトにアップしてくれる人」

「へえ。もの好きなのも居たもんだね」

「ちなみに、この会話もアップされっから」

「ああ、今現在の会話を記録してたんだソレ。先に言ってよ」

「何も言わない方が、脚色無しの感想聞けるだろ」

「にやるほど」

「つつうわけで、お前の感想は『何コレ』だ」

「ええ」

「それでは、次話で会いましょう」

「誰に言ったの、急に」

「読者」

「いるの?」

「知らん。いることを願え」

「いたらどうなるの?」

「投稿者のやつが金くれる。だからお前も読者の存在を願え」

「うわ、クラさんガメツ。しかも、その発言ちゃんと記録するんだ」

「それでは、次話で必ず会いましょう」

「会いましょう」

7月〇〇日 華家の会話記録

9話『レストラン・フラワー日記』

今日は週に一度のバイト日。雇用先はレストラン『ユニークス』。ウェ이터の仕事をやっている。

こんな可愛らしいデザインの服着たくはないのだが、店長にどうしても頼み込まれ、週一で高自給という破格の条件で雇われている。

うーん、確にかなりの好条件なんだが……店長に名付けられた『フラワー』というあだ名は頂けねえな。そりゃ苗字は“華”だけどさ。

近くに俺の通う『森羅学園』という高校があり、知り合いが結構来るという懸念要素があったのだが、未だに誰もフラワーの正体はな桜だとは気付いていない。その理由には色々と事情があるのだが、説明はまた今度ということだ。

だが例外が二人居る。一人は、俺と同じウェ이터をやっている、同じ高校に通う家連やれん。忍女しのめというやつ。今のクラスは違うが、一年前のクラスが同じで結構仲良くやっていた。ここ『ユニークス』の店長に俺を紹介したのも忍女である。

そしてもう一人が――チラリと、ソイツの座る席を一瞥する。ニコリ。……うえ。

目が合ってしまった、気持ちの悪い笑顔が返ってきた。チラッチラこちらを見ている。

あのストーカーもどきの名前は、徳川とくがわ家善いえよし。幼少期からの腐れ縁で、多分、俺の人世最大の汚点だ。

顔は……まあ、言うほど悪くは、ない、気が、する。だが中身が中身だからなアイツは。

これは自惚れでもなんでもなく、ただ事実としてぶっちゃけるが、アイツは俺に好意を寄せている。それもあからさまなまでに、一切包み隠さず。

気付かないのがおかしい、とかそんなレベルの話ではなく、なんとあの野郎、顔を付き合わせる度になんらかの形で告白してくるのだ。気色悪いったらない。

最近ではバリエーションも増えてきて、たまに告白されたのだと気付かないような言い回しで言ってくる時もある。その度、俺の足やら拳やらヘッドバットやらが飛び出るのだが。懲りずに当たって碎けてくる。

そんな家善だが、今は少し離れたところで忍女と談笑している。アイツらは結構仲が良い。忍女に至っては、この前『にふふ、桜ちゃんはあるなにも徳川君に好かれて羨ましいねー』などとほざいてきた。家善に気でもあるのかも知れない。

――一ち、あいつら楽しそうだな。何、話してるのかな。

！ おっと、家善がこちらをチラ見する。俺は咄嗟にあらぬ方向を向き、家善（笑）のことなんざ見てねえよアピール。

くう、さっさと帰れよアイツ。気になって仕方ない。営業妨害だ。

「おいコラ姉ちゃん、ちょっとこっち来いや」

不意に不機嫌そうな声を掛けられ、ちよつと驚く。なんだ？

「アンタだ、アンタ。ほらボサツとしてんな」

今日は変なのによく絡まれる。家善しかり、ナンパを仕掛けてきた茶髪のアホしかり、この男性客しかり。

二十代後半ぐらいだろうか？ 体格はかなりでかく、て、おいおい、立ったら何センチあるんだよ身長。だが決してでかいだけというわけでもなく、相当鍛えているのだろう、筋骨隆々で無駄のない引き絞られた体躯はレスラーか何かを連想させる。

髪の毛は燃え盛るような深い赤の短髪で、その巨軀も相まって相当の威圧感を醸している。

「え、えと、何か不備がありましたか？」

萎縮する声を自覚する。うう、おっかな。

「これ見てみる」

そう言って大男は、食べ掛けのナポリタンをズイと押し付けてく

る。異物でも混入していたのだろうか？　だが、特に異常は見当たらない。

……いや、待て。よく見てみると、髪の毛が一本入っていた。

「これをアンタどう思うよ？」

どう、と言われましても。この赤色の毛は貴方のですよね、としか。

つまり、言われのないイチャモン。性質の悪いクレーマー。それも、こちらが一步引いて対応しないと余計面倒なことになるタイプの。

えー、と。

「これは申し訳ありませんでした。すぐ他の物とお取替えますので、少々お待ち願えますか？」

「てめえ、んなことで許されるとでも思ってたのか？」

「きゃっ」

思い切り手首を掴まれ、引っ張られる。成す術も無く、そのまま大男の懷まで引き寄せられてしまう。必死に抵抗するも、筋肉マンばりの肉体を有する大男に敵う筈もなく。

て、ちよ、変な声出た、何すんだこのやろ、やめ、

むに。

――触られる。――胸を。

「？　全然ねえな。……男か？」

ブチッ。

何かが切れる音が聞こえた。

——こ、こ、この、こんの、ど畜生が、ぶ、ぶち、ぶち殺すぞ、コラ、クソ虫、

「おとと、申し訳ありませんお客様、色々滑っちゃいました」
バシヤ。

突然テーブルにあったコップが倒れる。いや、近くまで来ていた忍女が、わざと倒した。

倒れたコップから一杯分の水がテーブル上に広がり、大男の袖をチョンと濡らす。

掴まれていた手首から大男の掌が離れる。その瞬間をつき、俺は急いで後退。なんとか逃れることに成功する、が。

「こんのクソ女あ！俺の服に汚れ付けやがって、タダで済むと思っ
てんのかゴラア！？」

店内中に響く怒声。見ると、俺の代わりに今度は忍女が大男に襟首を掴まれていた。

「テメエ、ちょおおっと顔貸せやコラ！その辺の路地裏にでも連れてってやる」

大男は忍女の腕を力強く引っ張り、店の外に連れ出そうとする。カウンターの方からも、なんだなんだと何人かの店員が覗く。

だが俺は、未だ冷静さを取り戻せず、

——だ、れ、が、マナ板だ！

近くにあった氷水入りのポットを掴み、大男の赤い髪へと、

バシヤバシヤバシヤ。

「申し訳ありませんが、当店ではそのようなサービスは提供していません。他の店を当たって下さいませお客様、おっと、ど低脳」

「……」

『……』

その光景に、大男も、客も、店員も、全員が啞然とする。

そこで自分のやったことに気付く。

手には冷水の入ったポット。そして真下には、びしょ濡れになった赤髪の大男。

……うあー、やっちゃった。

でも後悔はしていません。

「他の店行けつつったんだよ、ど低脳」

でもって、更に罵倒で煽る。これで忍女への注意が外れてる間に、店長が来てくれれば……。

「……」

無表情で沈黙する大男は、

「あー」

忍女の襟首を放す。ポリポリと頭をかき、ジロリとこちらを向く。それは、沸騰した憤りが蒸発しきり、凍てついた惨忍さが宿った危険な目。その視線に射抜かれ、この大男が堅気じゃないということとを本能で悟る。

怒ってらっしゃる。確実に怒ってらっしゃる。

さて、店長が来るまでどうやってやり過ごすか、だよな。

何か策を巡らそうと辺りを見回すも、これといった打開策は出てこない。

——いやーどーしよー。

「ほう」

？ その時、大男が一瞬微笑んだように見えたのは気のせいかな。

「うおおおおおおお！！」

瞬間、猛スピードで誰かが駆けつけ、大男に思い切り殴り掛かる。その無謀な突撃に、目を見張る。

家善だ。

俺が危ないと察し、一目散に飛び出してくれたらしい。

トス。

家善の拳が大男の顔面にぶち当たり、軽い音が鳴る。そのヘナチヨコパンチは、大男の頭を多少揺らすだけに留まる。

それもその筈、家善は殴り合いなんて全く向いていない青っ白いモヤシっ子だ。

到底、ダメージがあるようには思えない。俺の妹なら例外だが。

「どうした？ 相手はこの僕だ木偶の棒！ それとももう怖気づいたか！？」

安い挑発。

ダメージを与えるのが目的ではなく、大男の注意を自分に向ける為の一撃。

その目論見は成功。俺を睨んでいた目が、家善へと対象を変更する。

バキリボキリ、と威嚇の為か大男は両手を鳴らす。それでも、怖気づきながらも震える声で家善、

「はっ、見掛け倒しのデカブツが僕に敵うとでも？ こ、こここ、こいやコラ！」

既に涙目。足はガクガクと、激しいリズムを刻んでいる。

何やってんのアイツ、まともに喧嘩なんかしたことないくせに。

「よく言った、小僧」

特に言葉を荒げることもなく、ゆっくり拳を上げる大男。何故か、声音に少し喜色が混じっていたように聞こえた。気のせいかな？

「ひ、ひい。……さ、さあ来い！ いつでも来い！ ビビッてなんかないもんね！ 震えてないもんね！ ちょっと熱が四十度越えて寒いだけだもんね！ 体調悪いだけだもんね！ だから加減はして下さい！」

うわ、かっこわるい！ めちゃくちゃ下手に出た！ というか四十度越えてたら、それはそれで不味い気もする。

大男はニタリと笑い、へっぴり腰の相手に対し、大きく右腕を振りかぶる。手加減をする気配は全くない。

ビュオオ！

風を切り裂き、凄まじい勢いで拳は家善の顔面へと迫る。
家善は両目をギュツと瞑り、だが逃げる素振りはなく、

「さくらああああ！！ 好きだああああ！！」
「ふええ！？」

まさかのタイミングで告白される。

不意打ち過ぎて、常日頃言われ慣れた言葉にも関わらず動揺を隠せない。

どうしたのアイツ！？ 死期でも悟った！？ そんな死ぬ間際みたいなことを！

俺も思わず目を瞑ってしまう。

そして拳は容赦なく、家善の顔面へと、

バキヤツ。

嫌な打撃音が響く。

かなり、不味い音。

続き、ドサリと人が倒れる音。

辺りは、シーンと静まり返っている。

――――。

どう、なった？

恐る恐る目蓋まぶたを持ち上げる。

そこには、地面にうつ伏せに倒れる家善。

「家善！」

慌てて駆け寄り、それを機に店内中もざわめく。

嫌な予感が脳裏をよぎり、動転した手つきでうつ伏せの家善を抱き起こす。

急いで損傷の度合いを確かめ―――ようと、する、が、出来ない。

「ううん、痛いよー死んだー、僕の屍は気にせず、あー、やっぱ土葬ぐらいはしてってー」

だって傷なんてどこにも見当たらなかったから。

「少し黙ってね」

ビシ。

痛い痛いほざく家善の頭にチョップをかます。

「おや」

簡単に気絶しやがった。

とすると。あの音はいつたい？

周囲をキヨロキヨロ見回すと、一発で原因が分かった。

近くにあったテーブルの一つが半壊している。どうやら大男はギリギリで軌道を変え、あちらに当てていたらしい。むちゃくちゃな威力だ。あれが家善の頭だったらと思うとゾツとする。

そして肝心の赤髪大男はというと。

「こんぐらいでいいだろう。んじゃ、俺はこれで失礼させてもらうわ」

いいもん見させてもらったぜー、と豪笑しながら店の出口へと退散していく。

「は……はあ？」

思わず間拔けた声が漏れてしまう。

やけにすんなり去ってったぞ。しかも、凄い清々しい笑顔で。

てか足はや！ 店の外に出るなり、韋駄天の如き猛ダツシュで走り去っていく。みるみる背中が小さくなっていき、すぐに見えなくなる。

そして、それに続くように、目の前をもう一つの影が通り抜ける。

「くお、待ちやがれえええええ！　テーブル弁償してけやあ
ああああ！！」

店長だ。ようやく来たのか。

赤髪の大男に負けず劣らずの速度で、店外へと飛び出していく。

その唐突な光景に、俺はしばらくポカンと惚けていることしか出来なかった。

……なんだったんだ？

「はああ、まったくあの人は。なんでわざわざテーブル壊したのかなあ」

後ろで、なにやら忍女がブツクサ言っているが、よく聞き取れない。

？ まあ、よくわかんないけど。

「収まったっぽいな」

その後、ちらかった店内を片付け、野次馬どもをどうにか追い払い、普通にウェイトレスの仕事に戻る。

それにしても、あの大男は本当になんだったのか。単に気まぐれなだけの客なのか、もしかしたらなんらかの意図があったのか。

まーいいか。終わったことだし。

俺はバイトの制服から普段着に着替え終わり、他の店員に軽く挨拶をし、裏口から外へ出る。ちなみに忍女のやつはバイトが終わった後も用事があるらしく、いつも先に帰ってしまう。

というわけで、

「家善、お前さ。“次バイト先来たらぶち殺す”っていつも言ってるんだろ。懲りねえやつだな」

「何を言ってるんだいフラワー、いや桜。夏休みに入ってから、なかなか君に会えなくて僕がどれだけ寂しい思いをしているか！」

「ごめん、キモい。あと名前で呼ぶな」

必然、家が同じ方向の、家善の馬鹿と帰ることになる。この野郎、毎回俺のバイトが終わるのを待っているのだ。そろそろストーリーカーの容疑で訴えてやろうか？

そうやって幼馴染を警察に突き出そうかどうか検討していると、家善が改まった真剣味のある声で話し掛けてくる。

「桜」

「なんだ？ あと名前で呼ぶな」

「子供は何人欲しい？」

「死ね」

「あー照れてる照れてる。……ん、あんなところにホテル発見。少し寄ってかない？」

「あ、もしもし警察ですか？ すぐ横に変態が――」

「うわああ！？ ちょ、冗談！ 冗談だって！ ほんとツツコミがキツイね君は！」

「――場所森羅町〇丁目〇番地です！ た、助けて下さい！ きゃああああ！！」

「ぎゃああああ！！ 本当に通報しやがったああああ！！」
シャレんになってないシャレんになってない、と慌てて逃げていこうとする家善。

「いや逃がさねえよ」

ガシ。咄嗟に右腕を捕まえ、引き寄せる。そのまま首を絞め、ホールド。

「ちょ、勘弁、勘弁！ ぐええ」

「落ち着け家善、冗談だつつの。どこにもかけてねえ」

ニヤリと笑い、バッテリー残量が切れた真っ暗な画面を見せる。

「……え？ あ、ほ、ほんとだ。なんだ、驚かせないでよー」

あっはっはー、とアホっぽく安堵する家善。

ううむ、コイツは本当いじりがいがあって楽しいな。やってて飽きない。

しかし、一時期はどうなるかと思ったな、今日は。結局、あの

赤髪の大男は何がしたかったのか。

悪いやつ？　なにかどうかは知らんが、でも、あの目に睨まれた時は生きた心地がしなかった。テーブルを素手で破壊するぐらいだからな、美菊レベルじゃないと相手になんねえな、ありや。

それなのに、コイツは躊躇^{ためら}いなく殴り掛かったのだ。人一倍、ヘッポコのクセして。俺の身を案じて。

チラ、と横を歩くソイツの顔を見る。

「なあ、家善」

「なんだい、マイハニー？」

「キシヨ。……やっぱいいや、言う気失せた」

「あ、ちょ、なにになに、そういう反応されると凄く気になるんだけど？」

「死ね。うん、死ね。それが言いたかったんだ」

「うわ、ひど。相変わらず、なんてトゲトゲしいんだ君は」

シヨボーン、と地味に落ち込んでしまう。

ううむ、なかなか言い辛い。くそう、なんでこんなことを。家善のクセに、ゾウリムシのクセに。

でも、何も言わないのは、それはそれでどうかと思う。

「あー、まー、そのー、なんだ。……あ、あ、あ……う」

「？　“あ”、がなんだって？」

「……」

ちゃんと聞けよノミ虫野郎。

俺はそのまま何も言えず、両者ともしばらく沈黙しながら帰路を進む。

なんだ、この空気。

仕方ないので、俺がもう一度口を開く。

「あ、あ、あ、蟻が十匹ー！」

「いきなり何を言ってるんだい君は！？」

「うつせーな、そういうことだよ」

ああ、くそ、察しの悪いやつだな。もういいか。

?? と疑問符を発生させまくってる家善の頭をバシッと軽くはたき、早足で先に行く。

まったく、ダメな幼馴染を持つと苦労する。

これじゃ、コイツが俺の気持ちに気付くのは何十年先になることやら。

まあ、ゆっくりやってこうか。

7月〇〇日 フラワー日記より抜粋

10話『殺戮扇風（ジェノサイドタイフーン）』

「クラの。少々、モニターを頼みたいのだが、いいかね？」

偉そうな口調で頼みごとをしてきたのは、俺の兄貴であり、華家の長男、華^{はな}球根^{たまね}。自称発明家の大学二年生。

自分の金で近くのアパートの一室を借り、そこを『研究室』と称し拠点として活動している。寝る時と飯の時間以外は『研究室』で研究、実験、開発、勉強、レポートなどを行っている為、華家に居る時間はかなり限られる。

更に、色々な資金が必要とあり、複数のバイトをやっている為、夏休みであっても暇な時間はほとんど無いとか。

能力はそこそこあるらしく、工学部や薬学部では期待の星だとか。工学と薬学って別もんじゃね？ という質問は兄貴にどうぞ。

とにかく、バイトに大学に個人活動。年中めんどくさい星人な俺の兄貴とは思えない多忙な人である。

「モニター？ また怪しいもん作ったのかアンタ」

そんな球根兄貴^{たまね}だが、時たまこうしてモニターの頼みごとをしに来る。自分の作ったものを試行したくて仕方ないらしい。

「クラの、怪しいとはなんだ怪しいとは。我輩^{わがはい}の発明品を一足早く^{おが}拝めるのだから、喜色を浮かべてしかるべきだろう」

ちなみにコイツ、一人称が“我輩”、二人称が“ゝの”だ。このご時世に、我輩で。

「喜色つつうか、気色悪いんだよアンタの発明品は。『眉毛が急激に伸びる育毛剤』とか『カムと泣き叫ぶガム』とか『飲むとブリッジの格好でカサカサしたくなる薬』とか。アンタ本当に期待の星なのか？ 奇態^{きたい}の星の間違いだろ？」

いつだったか、この三つを同時に使わされ、それはもう悲惨な目に遭った。想像してみるといい。『眉毛だけ異常に長い人間が、泣き叫びながら、ブリッジでカサカサ蠢く様』を。どこのエクソシス

トだ。

「クラの、安心するがいい。今回の発明品は貴様にとっても有益なものだ」

「恒星爆破装置とか？」

「貴様はどれだけ夏季が嫌いなのかね!？」

「三百六十五日、春だけで事足りると俺は思うんだ!」

「太陽を消し飛ばせば春も来なくなるぞ」

「安心しろよ、華家は年中春みたいなものだろ。常に変なのわいてんだろ」

「否定はせんが、一番春っぽい名前のやつに言われたくはないな」

「うるせえ。根っ子みたいつつうか、根っ子そのもののみようちくりんな名前のアンタに言われたかねえ」

「それは言わない約束だぞ、クラの! 性別的に華がないからって球根にされた我輩のブルーハートを少しは氣遣うのだ」

「知らねえよ、親に言え」

「貴様だって男みたいな性格のクセに、何故無駄に名前に華があるのだ」

「俺だって嫌だよ、こんな女っぽい名前」

「女だろう。鏡を見ているがいい」

「あー、あー。うるさい五月蠅い煩わしい」

俺の嫌いな話題になったので、アレだアレ。
閑話休題。

……。

よし、再開。

「で? 今回の発明は、俺にどう有益なんだ? 球根兄貴」

「球根兄貴と呼ぶでない! 球根だ、球根!」

「はいはい、そんな文章媒体じゃ分かりにくい漫才はいいから会話を進めろ」

「貴様が言ったのだろう! ……まあ、いい。それで今作の発明品のコンセプトだが……ズバリ、“涼”だ!」

兄貴が、声高々にそう叫ぶ。こんな歳にもなって痛々しい奴だ。

“涼”？ とすると、アレか。

「扇風機せんぷうきとか？」

ちなみに、華家には扇風機の一つもない。東日本大地震以前から節電精神を取り入れてるんだ。偉いだろ。単に金が無いだけというのは内緒。

「そうだ。貴様が、日中にも関わらずあまりにグデングデンなのでな。我輩が腕を振るってやったのだ」

「おお、さすが球根兄貴！ 分かってるじゃねえか！」

「そうだろう、そうだろう。それと球根きゅうこんと呼ぶでない！」

「イカスぜ、キュウカンバー兄貴！」

「球根たまねだ！」

そんなこんなで、『研究所まで取ってくるので少々待っておるのだぞ、クラの』と言いつつ兄貴を見送り、十分後。

華家、リビングにて。

「おお、結構あるな」

テーブルに、球根兄貴が例の発明品とやらを所狭しに並べる。ゴチャゴチャしていて何がなんだかわからないが、とにかく、メカニカル！ な感じ。

俺はその中の一つを選び、兄貴に聞く。

「まず、この見るからにプロペラが回転しそうなのは、扇風機だよな？」

それは、見ての通りの扇風機。マッドなサイエンティストの兄貴には珍しく、普通の形状の扇風機だ。

「ほう、それに目を付けたか、クラの。貴様の言う通り、それは真正銘、扇風機だ。使ってみるか？」

ん、と返事をし、俺は早速その扇風機を床に置き、コンセントを

挿す。したらば電源を、

「待て、待つのだ。早まるでない」
「？」

兄貴が咄嗟に手で制す。すると、扇風機の上部をパカリと開け、
懐^{ふとろ}から何やら取り出し、入れる。

……おい、何入れやがったコイツ！ 緑色の物体だったぞ！？

「では、ご自由にどうぞ」

「どうぞじゃねえよ。なんだ今の緑のは？」

「……。強いて言うのなら、殺戮^{さつりく}装置だな」

「俺を殺す気か！？ てかそんなもんどっから持ってきた！」

「何を言っとするのだ貴様は？ その辺のコンビニに売っているだろう」

「嘘をつけ」

心底不思議そうな顔で、常識だとも言うかのような球根兄貴。

日本はいつからそんな物騒な国になったんだよ。

「ものは試しというだろう。騙されたと思って、電源を入れてみる」

「ものは試しで殺戮するんじゃないやねえよ」

「そう心配するな、クラの。ちゃんと屍^{しかばね}は我輩の手で、ティッシュ
にくるんでゴミ箱に捨ててやる」

「なお悪いだろ。ちゃんと棺桶^{かんおけ}でくるんで墓穴に葬むってくれよ」

「アホか貴様は！ 費用がもったいな過ぎるだろう！ そこまでしてやる義理は無い！」

「アンタ最悪だな！？ 妹が死んだのにティッシュでくるんでホイ
か！」

「アホは貴様だ！ 我輩に害虫を妹として扱う趣味などない！」

「害虫！？ え、ひどい！ 害虫呼ばわりされるとは思わなかった！」

「ふん、害虫に害虫と言って何が悪い。人に寄^{たか}って集って食い物を
ねだるだけのカスが」

「くう、否定できない自分が情けない……」

そりゃ、俺は普段ゴロゴロしてるだけで、兄貴みたいに一生懸命

何かに取り組んでいるわけじゃねえけどさ。でも、害虫扱いは、あんまりにもあんまりじゃない。

「うう、死んじゃえアホ兄貴！」

「こ、コラ、落ち着けクラの、止めるのだ！」

殺戮扇風機を兄貴に向け、『強』のボタンを押す。

ポチ。

ブオオオオオオオオオン！！

けたたましい音とともに、凄まじい速さで回転するプロペラ。激しい風を兄貴に送り出す。同時に、モクモクした煙が扇風機の下部から排出され、それがプロペラの強風に乗り、兄貴の元へと襲い掛かる。

「ぎゃ、ぎゃあああああああああ！！？」

そして、球根兄貴は無残な惨殺死体に……なるわけもなく、その場で身悶える。

「ふえ？」

兄貴のその様相に一瞬ポカンと呆けるが、すぐに得心する。

……下部から排出されてる煙、これはもしや。試しに匂いを嗅ぐ。けほっ、と軽くむせる。

こ、これ、は、

「蚊取り線香じゃねえか！！！」

「だから最初から言っているだろう！ 害虫を殺戮する、コンビニで買えるものだ！」

「まぎらわし！ コイツの言い回し、まぎらわし！」

ややこしわあ。コイツややこしわあ。俺の傷心を返してほしい。

先程の会話を頭の中で読み返してみると、致命的なまでにすれ違っていることに気付く。それがなんだか腹立たしく、害虫呼ばわりのお返しとばかりに扇風機の『強』ボタンの上にある『狂』のボタンを押す。

ポチっと。

「うおおおおおおお！ 目が！ 目があああああ！！」

「ははは、兄がゴミのようだ」

「悪かった！ 悪かったから止めてくれ！」

「三分待つてやる」

「貴様、鬼だな！」

「貴様ではない、ム○カ大佐だ」

「この場合、我輩がムス○大佐な気がするのだが！？ ぐあああ、やめろ近づけるでない！」

「黙れパズウ」

「パズウ！？」

三分後

「……本当に三分キツカリだな。我輩、目が見えないのだが今」

「奇遇だな、俺もよく見えてねえ」

殺戮扇風機を発動してから三分後。部屋は、ものの見事に真っ白になっていた。風に乗った煙が、調子にも乗って部屋中を満たしちまったのである。

うう、煙い。これは確かに殺戮されただろうな、蚊。

「てか、なんでアンタは扇風機と蚊取り線香のキマイラを作っちゃまったんだよ。マザースリ○みたいな発想だな」

「いやなに、最近、我輩の研究室に蚊が多くてな。更に、それはもう蒸し暑いのだ。虫だけに蒸し暑いのだ。これは無視出来ぬだろう」ギャグセンがヒマと丸被りだ。華の血が流れてるだけある。俺もだが。

「それで？」

話の続きを促す。

「この暑さは無視できない。だが、蚊もウザイ。そこで、我輩は閃いたのだ！」

キマつてるとでも思ってたのか、グワッと変なポーズを決め、

「扇風機と蚊取り線香シンクロ召喚すりゃいいんじゃない？ と」

「そこは融合召喚使えよ。なんだそのチョイス」

「最新技術を取り入れたかったのだ」

「エクシーズ召喚って知ってるか？」

「それは初耳だが、まあ遊○王トークは置いておくとしてだな。そんなわけで、我輩は扇風機と蚊取り線香を合体させるという天才的な発想に至ったのだ！」

「アホだな」

「だってさ、これなら涼しいし周りに蚊が近付かねーし、まさに一石二鳥だぜ！ って思ったんだよ」

「おい球根。口調が変だぞ。素が出てんぞ」

「ゴホン！ あーあー、何かね、クラの？ 我輩、ちょっと煙のせいで耳が遠いのだが？」

「そんなにキヤラ作りが大事か！ しかも煙は関係ねえ！」

「それと球根きゅうこんと呼ぶでない！ 何度も言っているだろう！」

「都合の良い耳だなアンタ！ がっつり聞こえてんじゃないか！」

「球根たまねと呼べ！」

「黙れキュウカンバー」

「それでよし！！」

「いいのか！？」

「そうして出来上がったのが、蚊を殺戮出来て更に涼しいというハイテクノロジー、『殺戮扇風機ジェノサイドタイフィン』なのだ！」

「だっさ！ でもって何事もなかったかのように話題を戻したな」

「そうだろう、そうだろう。イカしてるだろう」

「都合の良い耳だな」

「まあ、結局失敗作に終わったわけなのだが」

チラ、と残念そうに殺戮扇風機を見やるキュウカンバー兄貴。視界は大分晴れてきている。窓開いてたしな。

というか、

「普通に、扇風機と蚊取り線香、別々で使えばよかったんじゃないか？」

「……………」

「更に言うと、この殺戮扇風機。蚊取り線香入れないで使えば、普通に役立つのでは」

「……………」

その後、華家に新たな家電製品、殺戮扇風機が加わったそうなの。その危なげな名に反し、熱気で荒みきった俺の心を癒してくれる、頼もしい夏のお供として絶賛稼動中だ。

そういえば、他にも色々発明品あった気もするが、時間と尺の問題でまた今度ということに。そのうち紹介出来れば幸いだ。ガラクタしかないが。

「ねえ、クラさん」

「なんだ、ヒマ？」

「この扇風機、何で“殺戮扇風機”っていうの？」

「耳障りな連中を皆殺しにすることが出来るからだ。今は封印されてるけどな、力」

「なにそれカッコイイ！ 封印ってどこにあるの？」

「上部の蓋だ。……絶対に、そこに何も入れるなよ？」

「入れたらどうなるの？」

「やめとけ、煙に巻かれるだけだぞ」

「へえ」

この後、家中がアロマな香りで満たされることになるのだが、それはまた別のお話。

8月〇〇日 華 桜

11話『華家血祭り（スイカシーズン）』

「スイカだね」

「スイカだな」

「スイカでやがりますね」

「スイカであるな」

上から順に、向日葵^{ひまわり}、桜^{おれ}、美菊^{みきく}、球根^{きゅうこん}が、口々に告げる。一応言っておくが、果物のスイカだからな。ワンタッチで使用できる便利なアレではない。

「何故、我輩^{キウカンバー}だけルビが間違っているのだ？」

「場違^{ばちが}ってるからだろ。性別的にも種族的にも」

「性別は当たり前だが、人間否定されるのはあんまりではないか？
って、ちょっと待て！ “我輩”のルビがキウカンバーになっているぞ！？」

そんな黒一点キウカンバーの発言は無視し、状況説明というこうじゃないか。

それは、朝のこと。チャイムが鳴った。俺、起きた。皆、起きた。玄関に向かう。宅配便だった。荷物、受け取った。それスイカだった。

こんな感じ。大体、伝わっただろ？ で、現在に至る。

補足だが、差出人は親父だ。ヤツの仕事は、勤め先の会社から世界各地に派遣され、その派遣先で何やら何だかんだで何々するらしい。詳細は知らない。とにかく、世界各地を飛び回っているらしく、たまにだが、産地直送でお土産を郵送してくるのだ。今回は奇跡的にまともな品だが、いつもなら、それはもうアレなものばかり送られてくる。

「それで、どうしやがるので御座いますか？ ……この量」

呆れた顔で言うミキ。

……そう。親父から送られてきたスイカ、確かに品物自体はアレ

じゃない。だが今回の場合は量がアレしているのだ。そりゃ、数個送られてきただけなら、わざわざ華家在住の俺達が全員集まってきたりはしない。

にしても……この数はヤバイだろう。だって郵便屋さん、トラック連れてきたもの。スイカウォールで玄関から外に出られないもの。印鑑押すのにこれだけ苦労したの初めてだもの。

「とりあえず運ぼうよ。……何年分あるんだろうね、これ」

「少なくとも、夏休み中に家が腐ったスイカ臭に見舞われることは間違いないな」

「親父殿は一体、何がしたいのだ。海外からの郵送だぞ。出費がインフレしている。というか、まずこれをどうやってリビングまで持っていくかだな」

「ふふふふ、今回はミキの出番でやりますね！ 力仕事は任せて下さいですぜ！ ハッスルミッキーです！」

ミキが全部運ぶ。

「ふいー、なんかあったなー」

「待ちやがれです！ わたしの活躍場面あれで終わりなのですか！？ わたしの頑張り描写たったの七文字で御座いますか！？」

なんだろう。ミキがよく分からないことを言っている。よく分からないので、適当に気の無い返事を返す。

「よく見ろ“。（句点）”を入れれば八文字だ。二連休だと思っただら三連休だったやふう！ な心境が味わえて良かったな」

「よくねえです！ 国語のテストを見習えで御座います。彼らは“句読点は文字数に入れません”精神を貫いてやがるのですよ？」

「伝わり辛い！ ミキ、その例えは物凄く伝わり辛い！」

「黙るの死！^{デス} ミッキースイカスロウ！」

チュボン！ 俺の横を緑球^{スイカ}がありえない速度で通り抜けて行く。というか、うわ！ スイカ汁が飛び散って大変なことに！？

てか、コイツは怒ると、本当見境が無くなるな。

「やべえぞミキがキレた」

「なにやってんのクラさん！ それでも、“猛獣遣い森羅町不動の十三位”を誇るクラさん！？」

「限りなく一般人じゃんそれ。でもって、何の躊躇^{ためら}いなく姉を猛獣扱いしたなお前、って危ね！」

刹那、目の前に迫る緑爆^{スイカ}。咄嗟^{とっさ}の判断で、近くにあった緑黄色野菜^{キユウカン}を盾にする。ああ、球根兄貴のことな？

チュボン！

「意外と痛い！ 意外と痛いぞスイカ！ ぐああああ！！」

非常に微妙な雄叫^{おたけ}びを上げ、倒れ伏す兄貴。どうやら顔面にもらったらしく、前が見えずに足を

縛^{もつ}れさせたっぽい。これが世に言う“面食らった”というやつか？
くだらね。

「……はっ！ ……ちくせう。……わたしはまた殺^やっちまったのですね」

「なんだ、その“力の暴走に悩める主人公”みたいなセリフ」

正気を取り戻すミキ。失うのも早ければ、戻るのも早いな、理性で、力の暴走により殺^やられてしまった球根兄貴はというと、

「……おい、我輩は怒ったぞ、クラの。よくも盾扱いしてくれたな！」

バツ、と身体のパネを利用して起き上がる。実は兄貴、見掛けによらず運動神経が良い。まったく、その気色の悪い口調と性格さえ直せば、非の打ち所の無い大学、せいな、んだ、か、ら、、、、

……絶句する。

「きゃあああああー！！」

「うおわ！ どうしたのだ、クラの！ 今更女^{いまめいら}みたいな悲鳴上げて

！

「こ、来ないで、来ないで！」

「ええ、我輩そんな酷いことしたか！？ どっちかと言うとやられた側なのだが！？」

「う、うわ、こっち来ないでよキモチワルイ！」

「そ、そんな、ヒマの、貴様まで我輩を化け物を見るみたいな目で！」

「うっさいゾンビ！」

「ゾンビ！？」

現在状況が混乱してきた為、我輩、華^{はな} 球根^{たまね}が、華^{はな} 桜^{さくら}に代わってお送りするぞ。

一体、なんなのだ！ 妹どもが、我輩の顔を見て物凄く怯えているのだが。顔に何か付いているのかね？ 何はともあれ、自らの顔を手で触ってみる。にゆる。

……にゆる？

「なんじゃこりゃあああ！？」

我輩は、掌にまんべんなく付いた赤い液体を見て驚愕する。

血……だと？ いつの間に流れていたのだ！？

よく見てみると、身体中赤い液体でビチャビチャである。

こやつらは、この姿を見て怯えておったのか！ いつ、いつからだ？

はっ。ミキのにスイカをぶち当てられた時か！ なんとということ

だ、我輩は！ 我輩は、もう！

……というか我輩の血、妙に甘ったるい香りがしないか？

……これスイカか！

「ふー、ふー！ また“気になるアイツ”が現れやがったのですよ

！ 今度は球根さんに憑いたですか！」

成仏御陀仏南無阿弥陀仏、と仏仏言い始めたミキのが、両手にスイカを構えるではないか。

「待て、待つのだ、ミキの！ 我輩、正常！ 至って正常！ これ、ただのスイカなのだよ！ そして貴様まで我輩を球根と呼ぶのであるか！」

うう、なんて酷い娘っ子どもなのだ。我輩、球根。球根、違う。
「やっかましいで御座います！ てめえさんなど、わたしのミッキ―スイカボンバーで粉微塵なのですよ！」

「粉微塵！？ 除霊のつもりであるのなら、我輩本体を粉微塵にしては駄目ではないか！？」

「オマケ死^{デス}」

「オマケ！ 我輩、食玩扱い！」

「ミツキー、スイカボンバー！」

情け無用である。だが、それでも地球は回っている。目の前まで、ミキのスイカボンバーが迫り来るではないか！

ピチューン！

我輩の顔面に当た……ってない。

？ だがしかし、確かに今、自機がやられる音が聞こえたぞ？

「う、ううん、なんか当たった……」

「ヒ、ヒマの」

どうやら我輩を外したスイカは、後ろに居たヒマのに命中していたらしい。

「なにこれ、凄いベタベタして気持ち悪いよ。ねえ、クラさん、私の顔に何か付いてる？」

ヒマのが、ショックで気絶していたクラのに問いかける。こやつクラの、ショック耐性や恐怖耐性はとてつもなく低いのだよな、実は。

「う、うーん……なに、誰？」

「私、ヒマだよ」

「きゃあああああ!!」

「クラさん!？」

「よ、よらないで、よらないで!」

「ええ!？」

「またもやバタンキューするクラの。その有様を呆然と見つめるヒマの。我輩は、ヒマのの肩をポンと叩いてやる。」

「何するの球根! そんな哀れむような行為やめてよ球根!」

「球根だ! 球根呼ぶな! しかも貴様に至っては、もはや呼び捨てなのだな! とにかく、自分の顔を触ってみるといいぞ、ヒマの」

「眉根を寄せつつも、我輩の言ったことに従うヒマの。そして、我輩と同じ反応を――」

「なんやこれえええ!？」

「――なんで方便なん? ま、まあいいか。ヒマのはそういうやつである。」

「ちよございな、ゾンビが二人に増えやがったですよ。やい、球根さんモドキ、ヒマさんを返せです!」

「え、我輩は? 我輩は特に返ってこなくていいのん? それと球根じゃないと言っとるに」

「食玩は黙ってるがいいです」

「我輩、食玩!？」

「黙れですパズウ」

「パズウ!？」

「はいスイカボンバ、はい御陀仏」

「適当! 我輩の扱い適当!」

「チュボボン!!」

「痛い! やはり以外と痛いぞスイカ!」

扱いは適当でも、攻撃に容赦はしないミキの。これで合計三発くらったことになり、現在我輩の全身は万遍なくスイカで塗装され、見るも無残な有様である。

「スイカクラッシュ！ スイカストライク！ スイカジエネレーション！！」

「こ、こら、やめろミキの！ 痛い痛い痛い！」

チュボン、チュボン、チュボオン！

全弾、顔面に命中。結構な量が口にも入り、シャリ、お、美味しい。ではなくて！ ミキのやつ、間髪入れずに緑弾を投げてきやがるではないかぐおうっ！？ また、顔面である。

「ちょ、ちよっと待つのだミキの、ぐあ！ コラ、待て待て、痛！ だから、ねえ、待てやああ！」

我輩、キレる！

もう怒ったぞ！ そっちがその気なら、いいもんね！ お兄さん

徹底抗戦してやるもんね！

我輩は、目の前まで迫ってきていた緑色をギリギリで避け、同時に近くに落ちてたスイカを引っ掴む。そのまま身体を捻じ曲げ、思い切りミキのへと全力投球！

「な、わたしの一撃を避けた上にカウンターでやりますか！ やりますね球根さん！ 燃えてきやがりましたよ！」

チュボン！ ミキのが一瞬にして放ったスイカが、我輩の弾を碎き、そのまま襲い掛かる。だが一度衝突し減速してしまっている弾を、我輩は難なくかわす。

「ふはははは！ 我輩の二つ名を教えてやろうではないかミキの！

その名も、『戦闘力ばかり無駄に高い僧侶』だ！」

「限りなく無駄な肉体でやがりますね！」

伊達に、『あいつ見た目科学者のクセになんて体育会系な動きをしやがる！』と言われ続けているのだよ。水泳、野球、柔道、空手、陸上、剣道、ラグビー、ボクシング、バスケ、サッカー諸々のスポーツを経験し、無駄に鍛え上げられているのである。研究には

一切、役立たんがな！

それからスイカ合戦は更に白熱していき、ついにスイカが残り数個になった頃。

「ぐふう！ ……く。 ……我輩も、もうここまで ……か」

ドサ。

「甘いですね、貴方もスイカも。このわたしに勝とうなど、おこがましいぜで御座いますよ。ふ、ふふふ。これで、これで、わたしが今年のスイカ王で御座いますよ！ うふふふふふ！」

……うーん。これは……ミキの声？

うるさいな、何がそんなに嬉しいんだ。というか俺、何やってたんだっけ？ 確か、大量のスイカが送られて来て、それで、それで ……それで？

そういえば、何か悪夢を見ていたような。確か、兄貴がミキに頭をスイカでぶち割られて ……。

そんなわけない、よな。あれは夢だ。

嫌な予感が走るも、俺は恐る恐る目を開け、当たりを、みま、わ、す、…、

……絶句。

「うふ、うふふふ、やっと起きやがったのですか、姉御さん」

全身赤い液体に塗りつぶされ、怪しく笑い掛ける、ミキがいた。

「あ、あああ、ああ、こ、こないで、こないで」

「ふ、ふふ、うふうふふ、何をそんなに怖がっていやがるのですか？ 大丈夫なのですよお、こっちにおいでえ」

「ひうつ」

顔を不気味な笑顔で歪ませ、ユラユラと近付いてくるミキ。：
いや、ミキ、なの、か？

俺は、震え硬直する身体に動け動けと必死に命令を下し、なんとか床に手を付き後退する。ぐちゃ。

——ぐ、ぐちゃ？

見てみると、手で、何か赤い塊かたまりを潰してしまったのだと気付く。

そこでようやく周囲の有様を確認する。

「————」

声も出ない。どこもかしこも、赤、赤、赤、赤、赤赤赤赤赤。床は赤い液体の海と化し、壁はおろか、天井でさえ赤の液体で彩られている。視界に写る、全てが真っ赤。

この赤い液体は何？

とうに答えは出ているのにも関わらず、脳がその答えを否定する。駄目だ、理解しては駄目だ、早くここから逃げ出さないと、逃げ出さないと！

冷静さを失い、恐怖と生存本能に突き動かされ、玄関へと、、むに。

「————っ！！」

なにか踏み、そのまま躓つまずく。

何を、踏んだ？　今の、柔らかさは、人？

倒れ込んだ状態のまま、見てはいけないと分かっているのに、首が後ろを向いてしまう。そして、

「……んー、ん？　おう、クラのではないか。どうしたのだ、そんなところで」

全身赤い液体まみれの球根兄貴が、そこに居た。
絶句する。

「きゃあああああああああ！！」

「うるさいなあ。なんなの、あの人達はもう。少しは静かに出来ないのかな」

シャブ。

一つだけ潰れていなかったスイカを、私は一人ガツガツ食べる。
シャブシャブシャブ。

「んー。うまあー」

スイカは食べる物だね。

8月〇〇日 桜 球根 向日葵 合作日記

12話『私はコックリさん』

こんにちは。おはようの人もこんばんはの人も、まとめてこんにちは。ついでにアニヨハセヨな人もこんにちは。

コックリさんなう。

私が大事にとっておいた禁断の果実が誰かに食べられてしまったので、コックリさんで犯人捜索中です。

「コックリさん、コックリさん、私のミカンを食べたのはだーれ？」
グググ。

五十音表の上を、人差し指を乗せた十円玉がゆっくり動く。ゆっくりゆっくり緩慢に漂い、でも次第に留まる場所を定めていき、やがてある一点を指す。

それは、サ行の一番上の文字。即ち、『さ』。
シュシュ。

でもって、そのノロマな動きはなんだったのか、矢継ぎ早に次の文字、『く』と『ら』を示す。

「“さ”、“く”、“ら”。これは一人しか居ないね」

犯人を特定し、すぐさま十円玉が指し示した人物に聞いたです。

「クラさん、私のミカン食べたでしょ？」

その問いかけに、ソファで寝そべっていたクラさんがダルそうにこちらを向き、答える。

「ミカン？ 何だヒマ、やぶからぼうに。んなもん食ってねえよ」
キョトンとするクラさん。むむ、シラをきるとはけしからん娘だね。

「嘘は見苦しいよ。ちゃんと証拠だってあるんだから」

「証拠？ いや、非の無い所に煙は立たねえよ。俺は食ってない」

「嘘だ！ コックリさんが、犯人はクラさんだって証明してくれた

もん！」

「コックリさん？ ああ、さっきからブツブツうるさいと思ってたら、コックリさんやってたのか、お前」

「そう。一人で」

「一人でって……完全にこじつけじゃねえか！ それコックリさんの意思じゃなくてお前の意思だろ？」

ガミガミとうるさい犯人。なんなのこの人は、往生際の悪い。

「コックリさんの意志だよ。コックリさんは居るんだよ」

「お前は小学生か！ ……小学生だったな」

一人でツッコんで一人で得心する、変なクラさん。まったく、手の掛かるコだね。昼ドラやコナ○君の犯人でも見習って、とっとと動機やらなんやらベラベラ白状してほしい。

めんどくさいので、とっておきの真実を一つ突きつける。

「コックリさんの意志は正しいんだよ。だって私がコックリさんだもん！」

「つまり、完全にお前の独断じゃねえか！」

「私がコックリさん！ だから私の言うことは全て正しいの！」

「何コイツめんどくさっ」

「コイツではない、私の名はコックリーノ三世である」

「へえー。で、お前がそのコックローチ三世だっという証拠はあるの？」

「一匹見たら二十匹は居ます」

「ノリおった！」

まさかのノリに、対応に詰まるクラさん。そんな哀れな小娘に、仕方ないので言ってる。

「じゃあ、証拠見せてあげるよ。私が本物のコックリさんだっていう」

「……見せてみ」

半眼で、半ば投げやりに促される。まったく、これだから最近の若いのは。なにかにつけて嘘だ嘘だと、根拠も無しに先入観だけでのたまいおってからに。クラさんがこんなだと、妹の将来も心配だよ。嘆かわしい。

「ちよっち来て」と、さっき使っていた五十音表の前で手招き。はいはい、とやる気の抜けた返事でソファからこっちに移動するクラさん。

したらば、私は十円玉を五十音表に置き、その上に人差し指を重ねる。

「クラさん、何か質問して。私がこれで当ててあげるから」

要は、目の前でコックリさんの力を使って見せようというものの。百聞は一見に難いなんちゃらってやつだよ、確か。

「仕方ねえな。……ううん、えっと」

しばらく考え込み、

「じゃ、俺が今考えてること当ててみる、コックリさん」

むむ、ありがちだけど、なかなかの難題を出してきたね。考えることなんて、もし当たってたとしても、本人が認めない限りは当たったことにならないじゃん。小学生にも容赦ないとは、さすがクラさん。

でも、私はそんなこすい質問にも答えてあげるのだよ。偉い！

ほわあああ、と人差し指にありったけの念を込めて、十円玉を動かす。

グ、グググ、とのっそりのっそり動かす。

「き、きてますきてます！ ハンドパウワーがみなぎ漲みなぎってきてます！」

「誰のマネのつもりなんだよ、そりゃ」

やかましいクラさんは無視して、順調に一文字目を当てる。

最初の文字は、『ま』。

ほほう、なるほど『ま』か。ふうん、『ま』ねえ。

「ふふん」

「いやドヤ顔されても。だからなんだとしか」

悔しがってる悔しがってる、凶星だからって悔しがってる。ふふ、お子ちゃまなんだから。

クラさんの顔を尻目に、私は更に十円硬貨を動かす。
シュシュシュシュシュシュシュツ。

「はや！ さっきのそのそした動きは一体！？」

クラさんが、私の疾風はやての如く素早さに慄おののく。ふははは、これがコックリさんの本気なのだよ。単に、一文字一文字時間掛けるのが面倒だからというのは内緒。

十秒足らずで、一つの文章が出来上がる。

「整ととのいました」

「整えちゃったか」

「間違えました」

「あそう」

「慄おののきました」

「慄いたのか！？」

「驚おどろきました」

「……お前、語感で言ってるだろ」

「その通りました」

「それは違ちがくねえか？」

「滞とどりました」

「滞とどってないで、さっさと言え」

「整ととのいました」

「そこに帰結すんのな」

結局原点回帰し、“クラさんが考えていたこと”の答えを、ズバツと言いつける。

「クラさんがさっき考えてたこと。それは『毎日牛乳飲んでるのに、なんで胸も背も成長しないだろ私』です」

ビシ。

「あいたっ」

「殴うるよ？」

「殴った後に言われても」

チョップされた所をさする。結構本気で手刀してきたよこの人。気にしてるんじゃない。まったく、これだから、最近のすぐキレる若者は！ 姉がこれじゃ、妹の将来も心配だよ。

「もー、当たったのになんで怒るの」

「……まず一人称からして違えだろ」

「そんな筈ないよ。私、コックリさんなんだから。一字一句当たってるはずなの」

「意地でも言い張るのな、それ」

やっぱり信じてくれないクラさん。

なら、信じてくれるまで証拠を見せ続けるだけだよ。どうせこの人、年中ダルンダルの暇暇人間なんだから、時間はいくらでもあるだろうし。

「仕方ないなー。じゃあ、今度は別のこと当ててあげるよ。ほれ、質問しな」

「なにこの子うざい。……まあ、飽きるまでは付き合ってやるよ」

意外とノリには定評のあるクラさん。なんだかんだで話し好きだよね、この人。

「よし、次の質問いくぞ。えーと……俺の趣味はなんだ？ 言ってみろ、エセコックリ」

むむむ、また本人の言葉次第でどうにでもなる質問を。いいよ、当ててあげるよ。

ふおおおお、と再度十円玉に念を込め、五十音表の上を滑らせる。

グ、ググ、シュシュシュシュ。

五秒足らずにして、一つの真実が紡がれる。

「分かったよ、クラさんの趣味」

「コックリさんにあるまじきスピードだな。言ってみなさい」

「『お人形さん集め』で間違いありませんね？」

「そんなに俺のキャラ崩壊させたいのか」
ビシ。

またもや無慈悲のチョップが下される。

「うう、当たってるのに」

意地っ張りな娘だね。そんなだから、いつまでたってもマナ板なんだよ。姉がこれだと、妹の将来も心配だねまったく。

それからは、クラさんが質問して、私が当てて、クラさんが否定して、また質問して、言い当てて、否定して、ひたすら同じような問答を繰り返す。

いい加減、飽きがき始め、色々どうでもよくなってきた頃。

「なあヒマ、なんで俺達こんなことやってるんだっけ？」

何気なくといった風に、ポツリと聞いてくる。

「クラさんが私のミカン食べたからでしょ」

「確か最初そんな話もしたな。食ってねえけど」

「ぶっちゃけ、ミカン食べればどうでもいいよ」

「そうだな。日も暮れてきたし、コックリ問答も飽きたことだし、ほれ」

諦めた、とでも言いたげに五百円玉を手渡される。

「それでミカンでもオヤツでも買ってこい」

「おお、話が分かるね！ やふう！」

こうして、私はミカンを美味しく頂きましたとさ。

8月〇〇日 ???の記述より抜粋

わーい、と掛けていく“ソイツ”を見送り、俺はソファに座る。

それにしても、驚いた。

まさか、本当に全部言い当てられるとはな。

それも、一字一句正確無比に。

やっぱ勝手にミカン食ったのは不味かったかなあ。

といっても、そのミカン食ったのって、俺が小学生の頃の話なんだが。

ついさっき思い出した。

いつだったか、小学校からの下校中、ちょっとした悪戯心^{いたずら}で、神社^{やしろ}の社にお供えされていたミカンを食べてしまったのだ。

まさか、今になって贖^{あがな}わされるとは思ひもなかった。食べ物の恨みは恐ろしい。

「ねえ、クラさん。ちょっと宿題教えてほしいんだけど、いい？」

「ん。いいぞ、見せてみ」

さっき玄関から出ていったはずのヒマが、“二階から”降りてくる。

「？ この五十音表、私が一年生の頃使ってたのじゃん。なんでこんな所にあるの？」

「俺が出した。昔、友達と遊んだのを、ふと思い出してな。一人コツクリさんやってたんだ」

「一人コツクリさんて。どんだけ暇人なのクラさん」

「ああ、ちよつと反省してる。一人でコックリさんなんてやるもんじゃねえな。まさか本物降臨するとは思わなかった。人間、恐怖が限界を超越すると、むしろ通常の対応が出来るのな」

「……クラさん、頭でも打ったの？」

「そうだとよかったん、だけ、ど、」

ふっ、と目の前が暗転。

どうやら、緊張の糸が切れてしまったらしい。今更になって身体が恐怖に震えているのを感じる。

そういやアイツ、俺の妹に化けてたつもりだろうけど、耳と尻尾隠せてなかったぞ。あれじゃすぐバレるだろ。

8月〇〇日 華 桜 後ろに佇む、^{たたず}耳と尻尾の生えたヒマ（？）
に怯えながら

13話『すれ違い通信』

こんにちは。僕、徳川^{とくがわ} 家善^{いえよし}です。恋する乙男^{をとし}高校二年生。
現在、今日の分の宿題を終わらせ、適当に自室でくつろいでます。
いやあ、クーラーきいてていいねえ。この暑い季節にエアコン無しの生活なんてありえないね。

僕はゲームをしながら、チラと壁掛け時計を見る。十一時。

よし、今日も待ち遠しの時間がやってきた。すぐ傍^{そば}にスタンバイさせていた携帯電話をカパッと開き、アドレス帳を検索、お目当てのメールアドレスを選択。宛先は、もちろん桜だ。

幼馴染こと桜は、僕の永遠の友達であり、家族のような存在でもあり、一番大切な人で、憧れで、そして恋愛対象。親に携帯を買ってもらった時まさきに桜のメアドを教えてもらったんだけど、僕があまりにもメールを送って来る為、アイツこの時間帯になるまでは僕のメアドを着拒設定するんだよ。しかも、着拒開放時間はたったの数分で、開放されるのも三日に一回。一週間に一回の時もある。まったく、照れ屋さんなんだから。この前これを本人の目の前で言ったら、桜のやつアドレス変更して僕にだけ教えないという、本気で落ち込む避けられ方をした。泣いて謝りなんとか教えてもらえたけど、あの時の蚊を見るような目は結構、堪^{こた}えた。

おっと、今こんなこと振り返ってたら、せっかくの貴重なメール開放時間があったいなね。確率は三分の一もないけど、愛しのあの子と意思疎通できるチャンスを逃すことは、僕のプライドやらなんやら色々が許さない。

カチカチと、あらかじめ決めておいたメール内容を手際よく打つ。
内容は、一言で、

『結婚しよう』

というもの。毎回、最初はこの文章から始めます。そんなことばっかりやってると軽い男に見られるぞ、と言われても知ったことではありません。

さて、返信早く来ないかなー。一分一秒が物凄く長く感じるよ。まあ、返信来たとしても、『豆腐の門に小指ぶつけて爆散しろ』とか『球根（求婚）は兄貴だけで十分です』とか、そんなんばっかだけどさ。

それでもドキドキと心臓の鼓動を高鳴らせながら、今か今かと待ち続ける。

ブブブブ。来た！

今回は随分と早い。さてさて内容は、

『いいぞ』

……。

……。

………！？

あまりに有り得ない一言だった為、念のため聞き返してみる。

『に、日本語でOK？』

混乱と驚愕とアレやコレが混ざり合い、混乱した頭で返信を待つ。

『ああ。結婚式は挙げなくていいから。生活費は銀行に振り込んでおいてくれれば
いいから。俺ん家の合鍵はやらねえから』

『凄い都合良い男だね僕！』

『そんなこたねーよ！？ 愛してる、ああ、愛してるともさ』

『ほ、ほんと？』

『これ言つときゃ男は金くれるって本で読んだ』

『なにその男の純情を弄ぶ最悪な本！』

『いや最近、金欠なんだよ俺。つうわけで、あれだ。さっさと出すもん出せやコラア！』

『君って言動だけ聞くと、まるっきり不良だよね』

『自分、不器用なんで』

『そんな所も含めて、僕は君の全てが好きだよ』

『ごめんなさい、生理的に無理です、もう私に近付かないで下さい、さようなら、二度と会うことはないでしょうが、お元気で徳川さん』

『名字！ 他人行儀！ 普通に拒絶されるより遥かに傷付くんだけど！？』

『このメールアドレスは現在使用されていません』

『嘘を吐かないで！？』

『このメールを3日以内に10人の人に送らなければ、あなたは死にます』

『チェーンメール送らないで！？』

『ですが送っても死にます』

『たち悪！ このチェーンメールたち悪！』

『おめでとう御座います。あなたは、なにやら当選しました。というわけで銀行の口座番号、教えて』

『いや引っ掛かないよ！ 物凄い雑な詐欺もやめて！』

『今から言う銀行口座に100万円を振り込め。さもなければ、60億もの黒ずくめがお前の家に押し掛けるぞ』

『全人類！？』

『お金。それは私と貴方とを結ぶ赤い糸』

『凄い嫌な糸だね。赤というか金の糸だね』

『金の切れ目が縁の切れ目って言うよな』

『僕との絆、金の縁でしかないんだ』

『ああ。むしろ、“縁”じゃなくて“円”だから。いいから、金よ

こせ。金欠だって言ってるんだろ』

『僕は君にとってどう思われてるんだい……』

『……歩く財布？』

『泣いちゃうぞっ』

『おっけ、写メで撮って送ってくれ』

『最悪な趣味だね！』

『べ、別にアンタの写メなんかネットで晒すだけなんだからね！』

『なお酷くない！？』

『べ、別にアンタの写メなんかプリントアウトして毎朝八つ裂きにするだけなんだからね！』

『何だろう、命の危険を感じるんだけど』

『背中に気を付けろよ』

『君に殺られるなら本望さ!』

『……110番と119番どっちがいい?』

『どっちも呼ばないで!?!』

『あ、消防車の方を御所望でしたか』

『何を消火するつもり!?!』

『ほら。誰からでも、放火されそうな人柄だろ? お前』

『とんでもない嫌われ者だね、僕』

『誕生日には防災頭巾をプレゼントしてやる』

『誕生日気分を一気に憂鬱にさせるチョイスだね』

『家善』

『なに？』

『付き合うか』

『あっはっは、新しい冗談だね。僕が言うならまだしも君が言うなんて』

くしばらくの間く

『そうだな。もちろん冗談だ』

『あれ、反応が薄いね』

『そうだな。死ね』

『ええ!?!』

『刺されるなら、どこを残してほしい?』

『どこを刺されたいかじゃないんだ! 一部分以外は全身刺される
こと前提なんだ!』

『おっけ、財布は刺さないで残してやるよ』

『待って!?! 財布を当然のように僕の体の一部として見ないで!』

『むしろお前が財布の一部。それもチャックあたり』

『つまり僕の存在理由、財布を開ける為だけにあるってことだね
!』

『じゃあな、もう寝る。お前も早いところ永眠しろ』

『さっきから何を怒ってるんだい……』

『家善』

『なに？』

『今日の日曜日、どこか買い物でも行きませんか？』

『そうやって僕を財布扱いするんだね君は！』

『画鋏^{がひよう}飲み込んで爆発しろ』

『ええ！？』

『どうしてこっちが押す時に限って引くのかな』

『？.？』

『なんでもねえ』

『そう？　じゃ、もうこんな時間だし、そろそろ寝ようよ』

『もう寝るのか？』

『僕は君に睡眠さえ許されないの！？』

『お前は……本当アレだな。察しが悪いっつか、肝心な時に残念
っていうか、ゾウリムシっていうか。腹立つわー』

『えと。……なんか分からないけどごめん』

『というわけで、あれだ。来週の日曜、俺について来い財布』

『それでも僕は、君に会えるだけで本望さ』

『あっそー。限りなく、あっそー』

『じゃ、また日曜ね』

『また来世でな』

『来世！？』

とメールを送るが、ここで着拒の表示。

うーん、やっぱり素直じゃないなあ。

今日も、最初から最後まで徹頭徹尾一回もデレなかったなあ。

貢がされる約束もさせられちゃったし。

ま、いいや。会えるだけでもよしとしよう。

来週が楽しみだよ。

8月〇〇日 メール記録by徳川

14話『姉か兄か』

「なんでクラさんは、そんなに男らしいの？」

「ふふふ、男らしいか。そうかそうか、ありがとよ」

「それ喜ぶことなのかな」

「いずれ、お前も分かる日が来る」

「それはない」

「ところで、俺はどんな風に男らしい？」

「チンピラっぽい」

「あゝあゝ？」

「そう、そんな感じ」

「てい」

「あうっ。……理不尽」

いい感じのチョップをもらった頭をおさえながら、はい、こんにちは。私、クラさんの妹の向日葵^{ひまわり}です。哲学する小学四年生、華のヒマとは私のことさね。……いや、哲学の意味は知らないけど。なんかカッコイイじゃん。

そんなわけで、プンスカしながら去っていく姉の背中を見送りながら、私は考えます。

それは姉に関して、昔からずっと疑問に思っていたこと。クラさんについての、最大の疑惑。

何かと言うと――――

――――華 桜は男なのではないか？

というもの。

もちろん、私がそう思うのには、いくつかの理由がある。

まず第一に、先程の会話を見ても分かるとおり、言動が実に男ら

しい。

一人称からして女の子っぽくないし。しかも不自然なほどに自然に、男口調が似合ってる。

第二に、性格がなんだかなんだか……なんだかなあ。粗雑？　とても同じ女性とは思えないね。

そして第三に、マナ板。お胸が絶望的なまでにナッシング。

あれだね。小さいとかのレベルじゃなくて、もはや“無い”の。

これが、“クラさん男性説”最大の裏付けだと思う。多分、小学生の私と比べても変わらないんじゃないかな。

顔も綺麗っちゃ綺麗なのかもしれないけど、なんていうか中性的だし。髪さえ切れば、美少年で通る気がする。目つきも悪いし。それと、目つき悪いし。あと、目つき悪いし。

で、最後に、クラさん自身が“男扱いされると喜ぶ”っていうのもある。理由は知らないけど、さっきみたいに、男らしいと言うと何故か嬉しいがる。意味不明だよね。

「という訳で今日は、“クラさん男性説”を確^{かく}たるものにする為、『姉なのか兄なのかはつきりしなよ作戦』を決行しようと思います
！」

私は、声高々に宣言する。すると横からも、喜々とした“協力者”の、

「いえーいっ！　ふーっ！　ぱふぱふぱふ」

という声。

そう。今回は、クラさんの性別の実態を暴く為に、強力な助っ人を用意したんだよ。

紹介しよう。恋する乙男^{をとしこ}こと、コードネーム『なんちゃって武将』さんです。

「さて、なんちゃって武将さん。今回の作戦について、何か一言どうぞっ」

手でグーを作り、テレビ取材のように、なんちゃって武将さんの口元にやる。

「ふ、ふふふ、どうもなんちゃって武将です。いやあ、今日はゴチになりますよ妹さん。性別を暴くってことはつまり、桜の糸纏まとわぬ姿を拝見するのが一番手っ取り早いってことだね？ ふ、ふひひ」

「徳川さんの非常に気色悪い醜態をお見せしてしまつて誠に申し訳ありません」

「え！？ いきなり僕の名前バラしたよこの子！」

わーわー喚く、五月蠅いなんちゃって武将さん。

「うるさいな、駒は駒らしく黙って仕事しな」

「なにその態度！」

「こら、目上の人には誠意をもつて敬語で接するものだよ」

「その言葉そのまま返すよ！」

「人間とは、実際に生きた年月よりも中身が重要なのだよ、中身が」

「うぬぼだとしても、小学生よりは伴なつてと思うよ、僕の中身」

「うぬぼ自惚れるな虫があつ！」

「虫！？」

「この害虫」

「ひどいっ」

「それもゲジゲジ」

「あんまりだい！」

「そしてパズウ」

「パズウ！？」

ふう、助っ人がこれで大丈夫なのかねえ。一応、クラさん繋がりで昔からのよしみだけどこの人、重度のヘツポコだし。その上、ストーカーだし。

「まあよからう。それじゃ、これ私が考案した作戦だから。トクっちは、それに従うだけでいいから」

トクっちに、今回の作戦内容が記された紙を渡す。それにざっと視線をやり、

「……トクっち？」

「うん、トクっち。不満ならストーカーさんで」

「不満ないっす」

じゃ、『姉なのか兄なのかはつきりしなよ作戦』決行！

く作戦一く

「覗き魔作戦！」

「見も蓋もない命名だね」

「いいでしょ分かり易くて。どうせ私は見てるだけだし。頼んだよ、

敏腕変質者」

「嫌だよ、そんな敏腕」

「よ、変質者期待の星！」

「そんなもの期待しちゃ駄目」

「よ、投獄者期待の星！」

「投獄を期待するの！？」

「よ、死刑囚期待の星」

「どんだけやらかす予定なの僕！」

「よ、星！」

「なんの？」

ミーティングをやりながら、草むらで待機する私達。

時間はお昼過ぎ。昼食後。夏休み中、ターゲットはこの時間帯になると、水浴びをしに風呂場に出没する習性があるんだよ。

で、ここは庭。風呂場を窓から覗くことが出来る、絶好の覗きスポット。作戦内容は、ここから風呂場のクラさんの裸体を視認し、アレがアレでアレアレになっているかどうかを確認すること。それ

が、一番手っ取り早く性別を見極める方法だからね。

ガチャ。

ん。早速、ターゲットが現れる音。

潜めた声で、実行部隊に指示を出す。

「トクっち、頼んだよ。アレがアレでアレアレになってるかどうか、その目に焼き付けてきて！」

「おっけい、妹さん！……ところでアレって？」

「すり潰すよ！？」

「ごめんなさい」

まったく、これだからヘツポコは。何で私にそゆこと聞くな。あんまり小学生の純心をなめないでもらいたいね。

じゃ、じゃ行ってくるね、と息を荒げながら風呂場の窓へと足を向けるトクっち。そのまま、一心不乱に窓へと張り付く。

私は草むらに隠れたまま、覗き魔の背中を見守る。

……。

覗き姿があんなに絵になる人も珍しいね。

数秒後、何事もなく戻ってくる。

なんか、思ってたよりも、いやにあっさりしてる。

シズカちゃんの風呂場を覗くのび太君の構図を期待してたのに。

「……」

「で、どだった？」

心なしか、目が諦観しているトクっちに、報告を求める。

すると、驚くべき発言が！

「……あった」

「あ、あつた!？」

なにが？ とは、おいそれと聞けないけど。でもこれは、もしかしてもしかしたら。

クラさん男性説が正しかったという、ぶっちゃけ予想していなかった展開に!？

「あつた、というと、やっぱアレが？ アレがアレでアレアレになつてたの!？」

興奮を抑えきれず、早口でことの詳細を要求。

「……うん。アレは間違いなく男性だよ」

神妙に頷かれる。

「まぢで」

「まぢで。……というか、ね」

「というか？」

「お兄さんだった。一番上の」

「球根きゅうこんかよ!」

まぎらわしっ。

く作戦二く

「言葉巧みに誘導作戦!」

「つまり？ どういうことすかね妹さん」

「まーまー、一見は百聞にしかず。とりあえず、クラさんの目の前でこれ読んで」

トクっちに、ある台詞の書かれた、折りたたまれた紙切れを渡す。
「？ よく分かんないけど、おっけい」

「あ、中身はまだ見ちゃだめ。ぶつつけ本番で」

「嫌な予感しかないけど、おっけい」

苦笑いを浮かべるも、承諾するトクっち。ヘッポコだけど、気はいいからねこの人。昔から私の頼みは色々聞いてくれる。

そんな心ある実働部隊の不安を拭い去る為に、一言励ましの言葉をもって送り出してやる。

「健闘を祈るよ、トクっち二等兵。大丈夫、骨は拾ってあげるから」
「玉砕を前提にしないで。……本当に何が書かれてるんだい、この紙」

「あ、ほら現れたよターゲット。はい突撃突撃」

あー、あついー、と唸りながら扉を開け、部屋に入ってくるクラさん。やつは定期的に水分を求め、ここに出没する習性がある。

ふらふらと、頼りない足取りで冷蔵庫を目指すターゲット。私は、洩るトクっちの背中を押してやる、とかどついてやる。うわわ、とつんのめるトクっち。

物音に気付いたターゲットがこちらを向き、私はとっさに隠れる。

「や、やあ。こんにちは桜。こんなところで会うなんて偶然だねえ、ははは」

よしよし、対応はベタだけど、意外と自然な口調で言ってるね。でも勘の鋭いターゲットは、役者顔負けのその演技を何食わぬ顔で看破する。

「……いやお前、偶然も何もここ華家のリビングだから。なに普通に不法侵入してんだよ」

さすがクラさん、無駄にトクっちと付き合いが長いだけあるね。目の前に空き巣が現れたのに、全然動揺が見られない。むしろ、心なしか声が弾んで聞こえるのは気のせいかな。うん、気のせいにしておく。

「く、まさか一発で見破られるなんて」

「どうして見破られないと思ったんだ。てか、」
人差し指を、私の隠れる場所へと向けるクラさん。
な——一気付かれた!?

「何で俺の背中に張り付いてんだ、ヒマ。まさか隠れてるつもりだ
ったり?」

「……うん。裏をかければ見付からないかなと思って」

「言葉の通りすぎて裏かけてねえよ」

ほら暑いから離れなさい、と首根っこをムンズと掴まれ、猫のよ
うに追い払われる。

むむ。忍者の末裔、を夢見るこの向日葵^{ひまわり}をいとも簡単にあしらう
なんて、さすがだねっ。私が見付かったところで、特に計画に支障
はないんだけどねっ。こう、気分的にねっ。

何はともあれ、トクっちに“さあ、例の紙切れを読み上げろ”と
アイコンタクトを送る。“いえすまむ”と肯定の合図。先程渡した
紙切れを広げ、棒読み。

「よう桜、ちよいと連れションにでも付き合ってくれよごぶあつ!
?」

リアルに痛そうな音をあげ、トクっちの腹にボディブローが突き
刺さる。げほげほと、冗談抜きでかがみこんでしまう。

「しばくぞコラ」

哀れな幼馴染を見下し、満面の笑顔で言うクラさん。額には青筋
がビキビキと走っている。

トクっちは涙目でこちらを向き、私に訴えかける。

「うう、失敗したじゃないか、妹さん!」

「何を言ってるの。これは予想通りの展開だよ。その紙にはまだ続
きがあるでしょ?」

「え? あ、ほんとだ」

紙切れの続きに気付き、うずくまりながらも続きを読むトクっち二等兵。

「ふ、ふひひ、何を今更恥ずかしがってるんだい。小学生の頃は一緒に風呂にも入った仲だぼろしゃあっ!?!」

尋常じゃない打撲音と共に、宙を踊る幼馴染という名の変態。うわ、モロ入ったよ顔面。

「埋めるぞコラ」

言ってることもなんか危なげ。

ドサツ。地面とゴツツンコした変態さんが文句を言ってくる。

「や、やっぱり駄目じゃないか、妹さん!」

仕方ないので、しゃがみこみ、とっておきの台詞を耳打ちしてやる。

「ごによごによ、ごによごによごによって言えば成功するよ」

「ほ、本当かい?」

さすがに気のいいトクっちでも、その言葉を疑っている。ならば、とっておきのしーくれつと情報で受諾させてみせよう。

「あのねあのね、ごによごによごによーによ」

「! おっけい」

親指を立て、ノリノリで了解する。何を言ったのかは内緒だよ。すつくと立ち、「今度はなんだ家善、どこを殴られたい?」そんな脅しはものともせず、私の授けた言葉を口にするトクっち。

「あのさ桜、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」
「つつっ!?!?!?」

この後トクっちの姿は消え、代わりにトクっちによく似た背格好

の人がモザイク処理を伴って現れたんだけど、グロいから“じしゅきせー”ってやつだね。

く作戦三く

「本人に聞いた方が早いんじゃないやね作戦！」

「めっちゃくちゃそのままだねえ」

カクカクシカジカナンジャラホイっと、クラさんにことの成り行きを説明説明っと。

この言葉便利だね。

「―――というわけなんだけど。実際のところどうなの？」

「はあー」深く溜息をおつきになる姉。でもって、少ししてから「ははっ」と軽く笑い飛ばされた。

「お前、本当くだらないことばっか考えるよな。家善のアホも分かっている通り、見たまんま女だ」

なんでもないことの様にあっさり言う。

いやまあ、確かに見ての通りだけど。てか、それぐらいは最初から分かってる。

「うん、それはそうなんだけど」

「……けどなんだ？」

本当に聞きたいことは、他にある。

「そうやって気兼ねなく女だって言えるのに、なんでクラさんは女の子らしく振舞うのが嫌いなのかな、って。男っぽいって言うときぶし。男装癖だんそうへきなの？」

「……」

黙り、難しい顔で中空を睨むクラさん。トクっちも、気まずそうに目を逸らしている。

あ、あれ？

軽く聞いたつもりなだけど。なにこの空気。まずかったのかな。しばらく三人とも黙り、気まずくなったのか、トクっちが取り繕うように言葉を発す。

「そのことなだけどね、妹さん」

「ああ、いいよ家善。大丈夫だ、そんな大したことじゃねえよ」

私を安心させるためだろう、軽い調子で遮る。

でも、その妙にぎこちない言葉に、なんだか居心地の悪さを感じてしまう。

「ちょっと俺の昔話に関わるんだけど。聞きたいか？ ヒマ」

「そりゃ気にはなるけど……」

言いたくないなら、無理に聞くのもどうかと思う。明るく軽く楽しくが私のモットーだし。

「あー、てか聞いとけ。隠してるわけでもねえし。今さら誰に言ったって、別になあ」

むしろヒマには一度話してきたかった、と相変わらず割と妹好きな姉。

「うーん……んじゃ聞かして」

まあ、それなら特に断る理由もないし。

「俺がこんな風になった原因はな——」

こうして、クラさんの昔話が始まった。

8月〇〇日 華 向日葵 続く

「出た！ “ 日記の分際で続くのかよ ” シリーズ！」

「いや、書いたのお前だからな、ヒマ」

「知らないよ。私は分けたつもりもないもん。ちゃんと、最初から最後まで書いたはずなのに」

「じゃ、“ 投稿者 ” の仕業か。妙なマネしやがって」

「尺の問題じゃない？ 多分」

「尺で。コイツは、また子供らしからぬことを……」

「そういえば、会話記録、録音機に変えたんだね」

「ん？ ああ、まあな。手記はめんどすぎる」

「今回もアップされるの？ この会話」

「っぽいぞ。ちよいちよいやるらしい」

「おお、これでお小遣いガツポガツポだね！」

「だな。くっちゃべってるだけで金もらえとか、投稿者の野郎もアホだな！」

「金づるだね、金づる！」

「お主もわるよのう」

「いえいえ、お主こそ」

「ごほんっ。それでは、また次回お会いしましょう」

「ん。ばーい」

華家会話記録

15話『桜の過去』

「お前、桜っていうのかー。女みてーな名前だなー」

「そうか？ 母さんが付けてくれた名前なんだけど、おれは気に入ってるぞ」

小学生の頃の話。

当時、俺は自分は男なのだと勘違いしていた。というより、勘違いさせられていた。

子育ての為にしばらく日本に滞在していた親父が、何を血迷ったのか、女として産まれた俺を男として育てやがったのだ。

その理由が、『可愛い愛娘に変な輩を近付けさせたくない。……そうだ。そもそも、“桜は男”なのだと周囲に思わせられれば、野郎どもも妙な気は起こさないので？』という、実にアホらしく身勝手なもの。親父は昔から親父だったな。

で、親父の目論見は成功。

俺はまんまと“自分は男なのだ”と思い込ませられ、学校の友達も華^{はな}桜^{さくら}は男なのだと勘違いし、結果、親父の期待通り、俺に変な気を起こす男子生徒は誰一人居なかった。もちろん母親もそのことは知っていたが、まだ小さい子供なのだから大した問題ではないと、ただ成り行きを見守るだけだった。

もちろん、男友達ばかり増えていった。鬼ごっこや隠れんぼ、缶蹴りにドロケイ。小学生男子に定番の遊びばかりやっていた。俺は友達グループの中でも、いわゆるガキ大将的な位置にいて、近所ではヤンチャ坊主として知れ渡っていた。

そう。確かに親父の思惑は成功した。だが、一つ誤算があった。俺は男らしくなり過ぎたのだ。

親父の計画では、ちょっと大人しめの男の子程度にする予定だったらしいのだが、なるべく周囲に女だとバレないようにしようと、やり過ぎたのだ。

おかげで俺の思い込みも周囲の思い込みも、どんどん激しくなっているいき、誰もが俺を女だと思うやつはいなかった。

だが高学年に上がる頃、そんな俺を流石に見かねた母親から、前は本当は女なのだと、ついに真実を教えられてしまう。

そりゃもう、戸惑ったさ。十余年の間も男として生きてきたつもりだったのに、突如実は女でしたと言われたのだ。

意味が分からない。今までの人世を全て否定された気分で、世界が百八十度違って見えた。しばらくショックで、元気だけが取り柄で一度も学校を休んだことがなかった俺が、一週間ちよい塞ぎこんだ。親父は何度も謝り、多分一番後悔していただろう。

それでも母親の必死な説得により、俺は自分が女なのだという事実を受け入れ、普通の女の子として生きていこうと決意する。

失敗したが。

それはもう、最悪な形で。

決意した次の日のことだ。

俺は思い切って生まれて初めてのスカートを履き、可愛い髪留めをし、赤いランドセルを背負い、一週間ぶりに教室を訪れ。

半ばやけくそ気味に勇気を振り絞り、元氣よく、

「おっはよーっ！ いやー参ったね、俺……じゃなくて、私が風邪なんかに負けるなんて。でも今日から完全復帰だから、またよろしくね」

そう、挨拶をした。

もちろん、教室中、皆目を丸くして呆けたさ。一週間風邪で休ん

でいたガキ大将が、久しぶりに登校してきたと思ったら、なんと女装してきやがったのだ。超展開すぎて付いていける筈がない。

今思うと、ちょっといきなりはりきり過ぎたなと後悔しているが、何を言ってももう遅い。

俺は必死に、実は私は女の子でした、と説明した。とにかく必死だった。無理して、慣れない口調でだ。

そしたらあいづら何て言ったと思う？

「何だそれ気持ち悪」

親友の言葉だった。

いつも二人で仲良く遊んでいた。いつも一緒に楽しく喋っていた。だからこそだろう。一番仲良くしていたからこそ、突然の俺の変貌が許せなかったのだろう。

前とのギャップが強過ぎたんだな。子供は純粹だからこそ、純粹な気持ちを包み隠さず告げてくる。

この日を境に、俺の男友達は居なくなる。

といっても、俺も俺だ。もう少しやり方はあったはずだ。少しずつ明かしていけば、その元親友も受け入れてくれていたかも知れない。今更何を言おうと遅いが。

まあ、あの頃の俺はすげえポジティブ人間だったから、それでも諦めなかったんだが。男友達が居なくなってしまった。なら、新しく女友達を作ればいいじゃないか。そんな発想に至った。

それも失敗した。やはり最悪な形で。

当たり前と言っちゃ当たり前だが、今までガキ大将として育ってきた俺が、突然女の子っぽく振る舞えるわけもなく。女子とまったく趣味も会話も合わず、友達になろうとしても、ただ避けられた。それでも懲りずに友達を作ろうとしたのがいけなかった。

いじめだ。

皆から避けられ、クラスで浮いてしまった俺は、絶好の攻撃対象だったらしい。

散々だった。最初は軽い嫌がらせ程度だったが、日が経つにつれ、どんどんエスカレートしていった。

ついに俺は心を閉ざし、小学校卒業式まで引きこもってしまう。確か、その頃にはもう、女として振る舞うのがトラウマになっていたな。

自分が男なのか女なのか、私なのか俺なのか、何もかも分からなくなり、全て忘れられる夢の中だけが俺の居場所になった。

しかし、中学入学を目前にしたある日のこと。

家の中に忍び込み、無理矢理俺の部屋に入ってきて、ガバツと包くるまっていた布団を引っぱがし、アイツは言った。

「あ、ええと、お、おはよう！ 今日から中学生だよ、さ、ささ、桜、君、じゃなくて、桜、さん？ 僕も同じ中学に入学したんだ。一緒に行こうよ」

「……」

「どうしたんだい？ そんな呆けた顔して。僕の顔に何か付いてる？」

「……………」

「ほら黙ってないで、なにか不満なことがあったら言って。君の望みならなんでも叶えてあげよう！」

「……………いや」

「なんだい？ 遠慮なく言って」

「…………誰、お前」

それが家善との再開。

いや、出会い？ まあ、一応再開だな。

実は俺、コイツとの小学校時代の記憶が、ほとんどない。

当時小学生の頃の家善は、気弱で無口ないじめられっ子で、これといった接点もなく気付いたら親の都合で転校していった、ただ一時クラスメイトなだけだった何でもない関係なのだから。

なにやら少し話したこともある気もするが、なんだったか。とにかく、転校する前、家善は俺に強い憧れのようなものを抱いていたらしい。

で、転校してから数年後、中学入学の日こっちに戻ってきて、元クラスメイトから俺の現状を聞きつけ、とりあえず突撃を仕掛けたっぽい。

あの大人しかった頃の家善に何があったのか、再開した家善はとてつもなく明るくなっていて、引きこもっていた俺の手を引っ張って導いてくれた。

華 桜が立ち直り、ちゃんと中学に通えたのは一重ひとえにコイツのおかげだ。

で、これは再開当初の会話。

「…………徳川は…………何でこんな俺なんかの世話焼いてくれるんだ？」

「え？ 好きだからだよ？」

「……」

「いやー、にしても君が実は女の子だったなんて驚いたよ。一目惚れた時は、これは棘いばらの道かなって覚悟してたんだけどね。うん、僕の目に狂いはなかった、って、どしたの？ 黙っちゃって。おい。顔赤いよー」

それが、家善のファースト告白だった気がする。ロマンチックの口の字もねえ……。

そういえばコイツ、小学生時代の俺に一目惚れしたってことは、勘違いだとしても男に一目惚れしたってことにならないか？

うわ、気持ち悪っ。そう言った時の家善の反応が「愛に性別は関係ないさ！」だ。うん。普通に引く。

「――――でまあ、そんな気持ちの悪い幼馴染のおかげで、俺は今こうしてなんとかやっていけてるわけだ。要は、男らしく振舞うのが好きなんじゃなくて、女らしく振舞うのがトラウマになっちゃまったんだよ」

そう言って、話を締めくくる。

ヒマは、へえーとだけ頷き、

「そういえばクラさん、ずっと家でゴロゴロしてた時期があったね」

「今も基本的に家でゴロゴロしてるけどな」

はは、と軽く冗談混じりに笑う。

大分省いたが、ざっとこんなもんだ。俺が今の俺に至った諸々の理由。

「思えば、お前はあの頃から何も変わってないな家善」

黙って聞いていた家善に話を振る。

「そう？ ……桜も全然変わってないけどぐえっ」

「胸元を見ながら言うんじゃないやねえ、殴るぞ」

「殴ったあとに言われても」

あの頃は大人しかったのに何でこん凶暴に育っちゃったのかね、とブツブツ文句を垂れる幼馴染。もう一発はたいておく。

「というか、途中からクラさんとトクっちのイチャイチャ自慢になつてたね」

やれやれ、と小生意気なヒマ。

腹立つので、とりあえずチョップ。

「いたっ。……なんで僕？」

やはり、ストレス解消はコイツに限る。一家に一台、サンドバツク・ザ・家善。あなたの心の傷を、体を張って癒します。

ストーカーなのがたまに傷だが。なんだかんだで、限りなくお人好しなやつである。感謝は、まあしてやらなくもない、気がしなくもない。

なににせよ、過去は過去だ。いつまでもうじうじしていても仕方がない。こんな俺だが、今はこうして日々楽しく暮らせている。

幼馴染の頭をはたき、生意気な妹にチョップを下し、アホサイエンティストな兄貴をいじり、怪力馬鹿な妹に命を脅かされ。華桜は、今日も平和にありだこーだしています。や、命脅かされて平和つつうのもアレだな。まいいや。

8月〇〇日 華桜

16話『観察初日・エリちゃんとゲイ男とポリ公と』

こんにちは。華 桜です。

今日、冷蔵庫を開けてみると数本あったスポーツ飲料水が綺麗さっぱり消失していて、微妙に乾いた心持のクラです。アクエ〇アスにゲータレ〇ドにポカリ〇ウェット。

まったく誰だ人のオアシス飲み干したやつは。これは由々しき自体。昨日までは確かに全部揃っていたはずなのに、今日起きて冷蔵庫を見てみると全部消失していたのだ。一晩であの量を飲みきれずは無いし、他のことに使ったとしても飲む以外で飲料水使用することであるか？

と、誰が何の目的でスポーツ飲料水達を消し去ったのか思考していると、

「しりとりしない？」

妹イズ・ヒマがしりとり相手をねだってきた。

……どうしたんだやぶからぼうに。いやいつもやぶからぼうな奴だけど。

一応理由だけでも聞いてやる。

「なぜにしりとり？」

「暇じゃん」

そりゃ暇だけどさ。もっとう、他にやることあるんじゃないかなろうか？ しりとりて。若い二人が昼間にしりとりて。

ま、やること無いし喜んで参加だけど。

「じゃ私からいくね」

てかもう始まってるっぽい。

「ふふふ、私の罵詈雑言捌きに仰天抜かすでないぞ。いざ尋常に参加せぬ」

参らないのかよ。難しい言い回ししようとして空回りする小学生の図である。空回りというか舌回り？

それはさておき、さあかかってこい小学生！ 高校生のボキャブラリーなめんなよ！

そしてまず一言目を口にするヒマ。

「みかん」

「……」

「……………」

「しまった！」

「しりとりで負けた奴初めて見た」

コイツさては口から出任せだな？ 思いついた言葉そのままを言ったのだろう。

「ワンモア」

「しかたねえ」

まあいい、今は聞かなかったことにして仕切り直しといくか。さあかかってこい小学生！ 高校生の大人気なさ見せてやる！

「アルミ缶」

「……」

「……………」

「しまった！」

「なぜ前に付け足したんだ」

さっきのみかんにアル足しただけアルな。うん、あるあ r……ねえよ。

「前に付けた方が有利かと」

どう有利なんだ。

「背中がから空きだったな。“ん”が丸出した」

「ワンモア」

「しかたねえ」

ふん、今回だけは見逃してやる、いや、聞き逃してやる。

さあかかってこい妹！ 姉の容赦無さを見せてやる！

「アルミ缶の上にあるみかん」

「……」

「……………」

「しまった！」

「今度は乗せて来たか」

というかわざとだろ流石に。いつの間に早口だ。むしろこれと言いたかったがためにしりとり提案したとも取れる。みかんもヒマもノってきたな。

「乗せた方が有利かと」

「相変わらず背中は無防備だな」

もはやしりとりりのりの字もない。りの字を取ったのはしりとりにななもうと思つて。

「ワンモア」

「しかたねえ」

ち、今回だけは多めにみてやろう。

さあ、今度こそかかってこい小学生！ 高校生の語彙力でぎったんぎったんにしてやる！

「アミノ酸の上にアミノ酸」

「……」

「……………」

「しまった！」

「それはもうただのアミノ酸だな」

「というかそれは無理がないか？ アミノ酸で。語感似てるけども。既にしりとりやる気ないんじゃないかヒマ。

「アミノさんも参加したかったんだよ」

「酸化なだけに？」

みゆふつ、と二人してニヤつく。うむ、実に不気味な姉妹である。

「ユーモア」

「しかたねえ」

なんかワンモアでなかった気もするが語感似てるしスルー。イツ
ツユーモア魂。

では今度こそ気を取り直して。

さあかかってこいヒマ！ クラさんの、ええと、なんかパワー
見せてやる！

「アミノ酸の上にクエン酸」

「……」

「……………」

「しまった！」

「俺の番まだ？」

もうコイツが何をしたいのかまったくもって分からない。

いきなりしりとり勝負持ちかけてきて、自演の連続一発ノック
アウトときた。しりとりを通して、何か伝えたいこともあるのか。
いつもながらのヒマの奇行に頭を捻る。

「黙らっしゃいクラ酸」

「誰が酸だコラ」

人をスポーツ飲料水の成分みたいに言うなよ。

「いや最近スポーツ飲料水に凝ってまして」

スポーツ飲料水に凝るってどういうことだ。そりゃ確かにナントカ酸が色々使われてる飲み物だけでも。

……てか。スポーツ飲料水？ これはもしかしてもしかしてるな。

「スポーツ飲料消失の犯人お前だろ」

「やっと気付きおったか！」

「何を偉そうに！」

これか！ これが言いたかったのか！

まわりくどい、ビツクリするほどまわりくどい。何故にしりとりで伝える必要があったのか。

そんな憤りとも呆れとも言えない微妙な感情をどう処理したものが悩んでいると、胸を張って誇らしげに言うヒマ。いつも思うが、コイツは何がそんなに誇らしいのだろう。

「自由研究の宿題に使ったの」

「……スポーツ飲料水？」

「うん」

飲料水で自由研究？ 一ミリも想像出来ない。

そういうや自由研究といえばアサガオの観察日記が定番中の定番だ。小学生の頃、クラスの大多数がアサガオの観察日記だったため、誰が一番大きく育てられるか競ったこともあるぐらい定番だ。

それにしてもスポーツ飲料水の自由研究で。一体、どんな珍妙実験やってんだ。

「で、その自由研究は何なんだ？ お姉さんが見てあげようじゃないの」

とりあえず好奇心に任せ聞いてみる。

「ん。観察日記」

ああ、なんだやっぱり定番の観察日記か。なんだなんだ、気にして損……し、た。

「スポーツ飲料水で!？」

「うむ。アクエリ〇スのエリちゃんの観察日記」

「既に名前まで!」

「それからゲータレイドのゲイ男おに、ポカリスウェットのポリ公こう」
「最悪のネーミングだな」

アホだ。アホがいるぞ。奇をてらい過ぎてスベってる感ばかりじゃねえか。

いや待て、ここでアホな実験だと決め付けるのか早計なんじゃないか? ほら、世に名を残した偉人や学者も変人が多いらしいし。馬鹿と天才は表裏一体ってよく言うし。

もしかしたら、それなりにちゃんとした実験なのかも知れない。

「ああ、うん、観察日記、ね。うん。いいんじゃないかな。うん。俺はいいと思うよ、うん。だからちよつと見せてみなさいそれ」

「ええ? 正直、奇をてらったただだよ? そんなに見たいなら見せたげるけどサ」

うぜえ。

「じゃ私の部屋来て」

言うのと、トテトテと二階へ上っていくヒマ。

俺も後に続き、階段を上った所にあるヒマの部屋へ入室する。

「……ええ」

そこには見慣れた妹の私室風景。パツと見は普通だが、よく見るとあちこちに妙くりんなモノが見受けられる。

いつもの部屋に、また一つ珍妙なモノが追加されていた。

「これか」

「それはア○エリアスのエリちゃん」

平たい植木鉢の中に、土の代わりに水浸しの脱脂綿が敷き詰められている。確か理科の実験でやったことがある。中に種を撒くんだ。「この脱脂綿に飲料水を染み込ませてあるんだな？」

植木鉢の縁に、丸っこい文字で『エリちゃん』と書かれている。右隣には、ゲータレイドの『ゲイ男』、更に右隣にポカリ○ウェツトのポリ公が並んでいる。

「うん。アサガオの種撒いたの」

「そこは定番なのか」

「最初は普通にアサガオの観察日記にしようと思ってただけ。ただのアサガオだと物足りないというか面白くないというかユーモアに欠けるというか」

ユーモアはいらないだろう。大人しく欠けさせておけよ。

水の代わりに、スポーツ飲料を使ったアサガオの観察日記か。いや斬新ではあるけど……。

「ちなみにこのアサガオの種、球根が品種改良したやつなんだよ。一週間で花咲かせるんだって」

あの兄貴は凄いんだか下らないんだか分からないな。

「実験のコンセプトは、『どの飲料水を使ったアサガオが一番早く成長するか』と『どういった成長をとげるのか』だよ」

「そういうところはちゃんとしてるのがヒマらしいと言うかなんと言うか」

「あながと」

「え？ 今のって褒めたのか？」

自分で言っていてどっちなのかよく分からん。いやどうでもいいけど。

しかし、実際のところどうなんだろうか？ アクエ○アスやらゲータレイドで育つものなのか？ 確かに吸収はしやすいだろうけど。ま、一週間後には分かることか。

8月〇〇日 華 桜

17話『いとし』

はじめまして、わたし、三波^{みなみ} 南^{みなみ}って言います。三波^{みなみ} 南^{みなみ}なんて
けったいな読みやないから氣いつけといてな。

今、同じクラスのヒマちゃん家に遊びに来てんねん。ヒマちゃん
とは小学校入学時からの親友でな、今日はそないな仲良し二人組み
の友情的一幕を、この日記に記すことにしたんよ。

「コンドルがツツコンドル」

で、わたし達、漫才の練習しとん。

これにわたしがツツコまなあかんのやけど……正直、意味不明と
しか言いようがないねん。

何をどうツツコめばいいんか全然分かれへん。

「……」

「……」

沈黙が気まずいのやけど。どないしよかな。とりあえず、はたい
とこかな。なんでやねん言うとかげば誤魔化せそうやよね。

「どうしたの？ 私、今ツツコミ待ちだよ？ ツツコんでよ南ちや
ん。南ちゃんの大阪風コンドルツツコミを見せてみてよ」

「何や大阪風で」

「なんつでやねん！」

「何がや」

「やかましい！」

ズビシ、

「いとし」

逆に思い切りツッコまれてしもた。何が悪かったのやろか……。

「ぜんっぜん違うダメダメ。何で大阪風の方にツッコミ入れたの？
何でコンドル無視して、大阪風にツッコんだの？ そんなに故郷
が恋しいの？ そこは『コンドルツッコミって何やねん』的なこと
言ってよ。せつかくツッコミにちなんでコンドルなのに。コンドル
にツッコんでよ、コンドルがツッコンドルだけに。無視されたコン
ドルが可愛そうだと思わないの。惨めだよコンドル。しかも何でそ
んなテンション低いの？ そんな心ない冷たいツッコミで、お客さ
んの心が温まると思うの？ せつかくのナチュラル大阪弁なのに宝
の持ち腐れだよ。ひどいよ。世の中には大阪弁使いたくても使えな
い人が大勢いるのに！ あと、いどんって何？」

「そやね、そら悪かった。氣いつけるよ、ほんま」

「なんつでやねんっ！」

「何がや」

「やかましい！」

ズビシ、

「いどん」

うう、なんやの一体。また同じとこチョップされてもうた。もう
少し加減せえよヒマちゃん。

「何でそこで謝っちゃうの？ 謝らないでよ、言い返してよ、ツツ
コミどころあったよ！ 大阪弁使いたくても使えない人ってなんや
ねん、とか！ 別にいないよ！ 誰が大阪弁使おうと自由だよ！

自分で自分にツッコんじやったよ。凄く変な子みたいじゃない私。
そんでもって相変わらず南ちゃんテンション低いよ！ で、いどん
”って何？」

そうやって、なぜか植木鉢に怒鳴り散らすヒマちゃん。何言うと
んのかよう分からんけど、ツツコミが欲しいみたいやね。仕方あら

へん、ツッコんであげよう。

「よう喋る子やな」

と、右手でチョップを、

「なんっつでやねんん!!」

バシッ。

「いどん」

手をはたかれてしもた。なんやのほんま。

「だから! ツッコめや!! 今、私植木鉢に向かって怒鳴ってたんだよ? 明らかに変な子だよ!? 何でそこスルーするの! 友達の奇行には触れない方がお互いのためだとも思ったの!? やめてよ! 変な気遣いされたらやるせないよ、とつてもやるせないよ! 本当に私がアレな子みたいじゃん! よう喋る子やな、つてそっち!? 今更だね! それともそんなにうるさかったかなごめんね!? だから、いどんって何?」

そう一気に捲くし立てるヒマちゃん。激昂のあまりゼーゼー言っている。

なんやねんこの子。わたしが悪いん? ちよつと腹立ってきてもうたわ。

気晴らしに、軽くツツコ……もうとしたけど出来ひん。

「ヒマちゃん、頭のそれカツコよかとばい」

ヒマちゃんの、頭の上に載ってるそれを指差し言う。そこには、サボテンが大量に刺さった麦わら帽があつて、ツツコミが出来ひん。刺さるわ。

「つつつんでやねん!」

ビシビシビシ。

「いどとん」

ううう、三連続で同じ箇所チョップれてもうた。めっちゃいどん。
涙でてきたわ。

「い、ま、さ、ら、かい！！ 遅いよ！ 気付くの遅すぎるよ！
インターホン鳴った時点からツツコミ期待してワクワクしてたのに
！ 今気付いたの！？ びっくりだよ、放置プレイかと思ってたよ
！ ていうかこれカッコイイの？ サボテンだらけの麦藁帽カッコ
イイの！？ ダサイよ、明らかに変な子だよ！ で…… “ばい” ？
地方違くなかとばい！？ ねえ、いどんって何？」

壁をバンバン叩きながらキーキー言うヒマちゃん。興奮し過ぎて
目が回っている。見てて飽きん子やね。

「ああ、もう！ 南ちゃんはこれだからもう！ それでも本当に大
阪産なの！？」

「メイドイン大阪が皆ツツコミ好きやと思たら大間違いや」

よく勘違いする人がいるんやけど、大阪弁やからって別に漫才が
得意とは限らんへんねん。大阪弁の話し方って漫才師みたいなんて
言われんねんけど、全然意味分かれへん。

「仕方ないね。じゃあ、今度は私がツツコミやるから、南ちゃんボ
ケやって」

「いえっさあ」

ピツと敬礼して、一応やる気はあるんよ？ とアピールしとく。

ほな、氣い取り直していきましょ。こうなったら、わたしのとっ
ておきのネタお披露目しましょ。

「布団が……吹っ飛ばない」

「……」

「……」

気まづいわあ。

「え？ ……ご、ごめん聞いてなかったかも。もう一回やってくれる？」

「ええよ」

もっぱついきましょ。

「布団が…吹っ飛ばな——」 「うるさい！」

バシッ。

「超いどん」

いどんわあ。超いどんわあ。思い切りはたかれてしもうた。
頭を抑えてると、案の定怒鳴り散らすヒマちゃん。

「布団が吹っ飛ばないって…だから何！？ 限りなく普通の布団
じゃん！ 寒いとかそれどころじゃないよ、平温だよ、寒かった方
がまだマシだよ、プラマイゼロでむしろマイだよ！ わたしはどう
ツツコメばいいの！？ とところで、いどんって何？」

ここや！

「しっかりツツコメとるやないかい」

ピシ。

「……」

「……」

気まずいわあ。

スー、と腹いっぱい空気溜め込むヒマちゃん。そして、

「それだよ!!!」

今日最大の大声やってん。

ニヤ。

わたし達は、お互い得意げな含み笑いをし合い、お客さんの方に向かって声をハモらせる。

「『以上。『南国ヒマワリ』による漫才、『ボケるツツコミとツツコむボケ』でしたー」

「ほな、感想タイムやね。クラ姉さん、どやった？　わたし達の漫才」

「ウケたウケた？」

わたしとヒマちゃんとの、唯一の観客、ヒマちゃんの姉であるクラ姉さんに詰め寄る。

今回は自信作なんや、今日こそはおもしろい言わせたる。

そして一言、ヒマ姉さんの感想。

「いどんって何だ？」

「わたし流『止めえや』って意味やの」

「痛いだと思ってた！」

8月〇〇日　三波　南

みわ

みなみ

18話『ちよっくらデート』

日曜日。ついにこの日がやってきた。

現在、例のあの子との待ち合わせの一時間前。駅前の銅像前で待ち合わせている。今日は、一緒に買い物をする約束をしているのだ。この日が楽しみで昨日は全く眠れなかった。

僕は高鳴る胸の鼓動を抑えようと、深呼吸をして息を整える。

すー、はー、すー、はー、すー、はゲホゴホゲホグエ。

む、むせたっ。

げーっほげほと咳き込む僕を、通行人が好奇の目で見る。うあ、恥ずかしい。

腹式呼吸を駆使しても、結局胸の振動は収まらなかった。

くう、このままだとあの子が来た時に緊張し過ぎて上手く話せない！ 変なやつだと思われる！ それは嫌だ！ とにかく、何とかしてでも、あの子が来る前に緊張を解きほぐさなくては！

何か、何かないか。緊張を解く方法、何かないか。

僕は必死に脳内の引き出しを漁り、効果的なリラックス方法を探す。

……そうだあれやろう。

掌に人という字を書いて飲み込む、ってやつ。名付けて“人飲んでリラックス”。や、ネーミングについてはスルーで。

それじゃ、ものは試しにやってみよう。

……。

駄目だ。もの足りない。大体、何でこんなことして落ち着くのか見当も付かない。他のやつもやってみよう。

……そうだあれやろう。

以前聞いたことがある。両手を前に突き出し目を瞑りながら歩く

と、とてつもなく落ち着く、という話を。名付けて“ゾンビウォーキング”。や、ネーミングについてはスルーで。

他人の目が痛いということに目を瞑ればいける。目を瞑るだけに。大変な分、効力も大きいねきっと。

いやでも、それでも不安だなあ。

あれも同時にやってみようかな。

今、欲しい物を三回口にする、というもの。名付けて“落ち着け流れ星”。や、ネーミングについてはスルーで。

よし、それじゃ“複式呼吸”“ゾンビウォーク”“落ち着け流れ星”を同時にやってみよう。なんやかんやで効果が増大されて、一発で仙人の如き落ち着きを実現できるはず。

早速、僕は複式呼吸をしながら両手を前に突き出し、目を瞑って歩く。更に、今欲しい物を三回唱える。

「はーっ……はーっ……桜の……はー……下着が欲しい……はーっ……桜の……はーっはーっ下着が欲しい……はーっ……下着がああああ————」

「もしもし警察ですか？ 助けて下さい、変態に襲われているんです。下着を求めて息荒くしながら襲って来るんです！」

何事かと目を見開くと、そこには僕の待ち人——華 桜が居た。携帯持った。

「ストオオオオオオッ 桜あああああ！！」

「黙れゾウリムシ」

「ぐぼあっ……」

直後、鳩尾に沈み込む桜の右拳。しかも調度、複式呼吸の息を最大限まで吐いたところに。

そのままぐず折れる僕。

「……い、いつから居たんだい？」

「お前が下着ねだりだしたあたり」
まるっきり変態じゃないか僕。

「？」

そういえば、やけに早い桜。まだ待ち合わせ時間の五十分前なのに。いや僕が言えたことじゃないんだけどさ。気になったので聞くだけ聞いてみる。

「桜来るの早くない？ そんなに早く買いたいのがあったの？」

「……。え？ あ、うん、そうだな。……早く買いたくてうずうずしてたんだよあははは」

なぜか棒読み。そしてなぜか目を逸らす。

「何をそんなに買いたいの？」

「うるさい」

「ええ……」



「これ、お前に似合うんじゃないか？」

「あ、いいね」

「これも似合いそう。引くぐらい似合いそう」

「あ、いいね」

「これも似合う。近寄りたくないぐらい似合う」

「あ、いいね」

「これも似合う。ただこれ着て俺に近付くなよ」

「あ、いいね」

そんな古着屋内での会話から一時間後。

「……」

「……」

公園のベンチに座る僕らの間には、とても重い空気が流れていた。かれこれ十分ぐらいの沈黙。

さすがに罪悪感に苛まれたのか、口を開く桜。

「すまん……さすがに悪ふざけが過ぎた」

「……いいんだ……いいんだ別に。怒ってなんかない、怒ってなんかないさ。ただ……僕ってなんなんだろうなって」

「……まさか補導されるとは思わなかったんだ」

「いや、店員さんと桜が吹きだすのを堪えていた時点で気付くべきだったよ……」

ふふふ、と悲壮に暮れる、鼻眼鏡、全身タイツ、ハゲカツラ、天使の付け羽の入った紙袋を持つ哀れな僕。

ふ、ふふふ、ふふ、笑ってやってくれ、勧められるがままに全て着用して街を歩き補導された愚かな男を。

「まさか本気で全部着るとは思わなかったんだ……というか気付けよ」

「……店を出る前に止めてよ」

「いや知り合いだと思われたくなかったから」

「僕は時々、君が天使なのか悪魔なのか分からなくなることがあるよ」

「……」

「……」

「家善」

「ん？」

「そのセリフはダサイ」

「……ごめん」



「これ食べようぜ」

「うん、いいね」

「これも美味そうだな」

「うん、いいね」

「こっちも捨てがたいな」

「うん、いいね」

「よし、これとこれも食おう」

「うん、いいね」

「ついでだから、これとこれも頼もうか。早食いで負けた方が全額おごりな」

「うん、いいね」

そんな中華料理店内の会話から一時間後。

「……」

「……」

公園のブランコに座る僕らの間には、とても重い空気が流れていた。かれこれ十分ぐらいの沈黙。

さすがに罪悪感に苛まれたのか、口を開く桜。

「すまん……さすがに注文し過ぎた」

「……いいんだ……いいんだ別に。怒ってなんかない、怒ってなんかないさ。ただ……僕の財布ってなんなんだろうなって。すっからかんだよ」

「まさか嘔吐するとは思わなかったんだ」

「逆に平気な顔の君が怖いよ」

ふふふ、と悲嘆に暮れる、ラーメン、チャーハン、餃子、肉まん、ホイコーローと胃酸を混ぜた匂いが微かに気になる哀れな僕。

ふ、ふふふ、ふふ、笑ってやってくれ、女の子に早食いで負けた上に歩道の真ん中で嘔吐した情けない男を。

「まさか、本気で勝負に乗ってくれるとは思わなかったんだ」

「もう少し配慮と遠慮を心がけてよ」

「あれぐらいの量、平気だと思ってたんだ」

「僕は時々、君の胸のサイズと胃袋のサイズの差に既視感を覚える

よ」

「……」

「……」

「家善」

「ん？」

「ちょっと傷付いた」

「……ごめん」



「ねえ、これ観てみない？」

「ん、いいぞ」

「じゃあ、これ終わったらこっちも観よう」

「ん、いいぞ」

「あ、これも面白そう」

「ん、いいぞ」

「ていうか、これら三連ちゃんだって」

「ん、いいぞ」

そんなB級専門映画館内の会話から七時間後。

「……」

「……」

駅のベンチに座る僕らの間には、とても重い空気が流れていた。かれこれ十分ぐらいの沈黙。

罪悪感に苛まれ、口を開く僕。

「ごめん……さすがに度が過ぎた」

「……いいんだ……いいんだ別に。怒ってなんかない、怒ってなんかないさ。ただ……俺のメンタルってなんなんだろうなって」

「まさか気絶するとは思わなくて」

「古着屋と中華料理店のことがあったから、俺も少しぐらい我慢しないとなって思ったんだ」

ふふふ、と悲観に暮れる、六時間気絶して起きて気絶して起きてを繰り返して、意気消沈してしまった桜。

うう、やってしまった。桜が大の怖いもの嫌いだと知っていながら、無理なやせ我慢をさせてしまった。男としてかなり情けない。

はあ、ダメだな僕は。せっかく好きな子を楽しませようと、はりきって来たのにこの様だよ。

朝は補導されるし、昼は道のと真ん中で吐くし、終いには桜を気絶させちゃうし。穴があったら入りたい。いやむしろ穴になりたい。昔っから、空回りしてばっかだね僕は。桜には嫌な思いばかりさせていて、申し訳ない。

はあ、と自嘲気味に溜息をつき、下を向く。

それからしばらくの間が空き、ぽつりと桜が呟いた。

「夜だな」

「夜、だね」

ぎこちなく、目を逸らしながらの返答。

そんな僕の肩に、ポンと手を置く桜。

「ん、何——」

と言いかけ、

ぷに。

頬を人差し指で突付かれる。

そして、桜は軽く息を溜めると、

「しばらくぞこら——」

「ええ!？」

「何をうじうじ考えてんのか知らねえけど、いいから顔上げろ。お前が落ち込んでるとちょっかいの一つも出せないだろ」

ああ、元気付けてくれてるんだ。本当、僕には素直じゃない子だね。

だからこそ、なんだけど。

少し黙ってから、笑顔で言葉を返す。

「ふひひ、やっと桜もデレ期が来たか、やったね春到らぐぼあっ！？」

案の定、鳩尾に突き刺さる桜のボディブロー。

うぐう、相変わらずいいところに決りこんでくる、ぜ、がく。

「はあ、せっかく大人しくなったと思いきや、すぐそれだな家善は。だからお前は、いつまで経ってもゾウリムシなんだ」

まったく、と呆れ果てたというように、わざとらしく溜息を付く桜の顔は、とても魅力的な笑顔だった。

殴られてもがいている最中だというのに、思わず顔が綻んでしまふ。

うわ気持ち悪っ、と通りすがりの女性がしかめっ面を浮かべるが、そんなものは気にもならない。他人のしかめっ面なんかよりも何倍も価値のある表情を拝めたから満足だ。

そうこうしていると、駅員のアナウンスが鳴り、電車が来る。

「おい、来たぞ電車。遊んでないでさっさと起きろ」

スツと僕を素通りで空いた車両の扉へと進む桜。

うーん、やっぱりきついなあ。

やっと痛みが治まり、僕も後に続こうと立ち上がる。

そこで、ふと気付く。そういう今日はまだ一回も告白していない。会う度にしつこく告白するのが僕のポリシーなのに、これはいけない。よし、思い経ったが吉時、このタイミングで言えば意外性やらないやらが作用して上手く気持ち伝わるかも知れない。

「好きだ！」

「あそう」

三文字で一蹴されてしまった。

いや、上手くいったらいったで度肝抜くけどさ。

だが、車両の前で一回立ち止まり、

「家善」

「ん？」

振り向いた桜の顔はとても綺麗で。

「ちょっと嬉しい」

8月〇〇日 徳川 家善

とくがわ

いえよし

19話『断水』

「うあーあうー……あついーとろけるー……液化化現象ー地盤沈下ー……沸点ー融点ー……蒸発ー気化ー……どろりっちーべとべたー……こーんにちはーどうもーべとべたーでーす……じゃねなくてーどろりっちー……でもねえかー」

現在、ついに暑さの野郎に打ち負かされ、言動が非常にアレになっていますが、気にしないでやって下さい。俺は夏に弱いのです。断熱使用です。熱気や湿気の多いところでの保存は控えましょう。腐ります。こんな感じに。

というわけで、華で桜なクラです。発言は炉心融解してますが、独白ではちゃんと快活にアレコレするので安心して下さいまし。

「あふいー……なんだってちきゅうはさー……こんなにおんだんかをさー……はっするさせてんのかねー、よいしょ……っと、とと」
環境問題に八つ当たりしつつ立ち上がろうとすると、軽く倒れそうになる。

なんとかバランスを保つも、これはちよつとヤバイ。軽く脱水症になりかけてんじゃねえか。そりゃ発言が溶けもする。

「み、みじゅ……みじゅうう」

喉の乾きに今更ながら気付き、潤いを求めてリビングへと向かう。で、うわ。フラッフラする。足取りが完全にミイラ化、もしくは千鳥化してやがる。

ううむ。俺の部屋は二階にある為、リビングに行くには部屋を出た後、軽く廊下を歩き、階段を下らなければいけないのだが。そこまで辿り着けるのかも怪しいぞ、これは。

ぐずぐずしてないで、さっさと向かわないと。

ゆーらゆーらふらつく足を前へ前へと進ませ、二階の廊下を歩く。歩くっつうか、漂うって感じだが。

そして階段に差し掛かり、なんとか転ばずに階下へと到着。リビ

ングへ足を向け、なけなしの力を振り絞り、ドアを開ける。よしよし、順調順調。後は冷蔵庫の麦茶を体内に摂取すれば……て、

「はれ？」

麦茶が……無い……。

そ、そんな。俺のユートピアが。

くう。夏は麦茶に限るんだが、仕方ねえ。他ので我慢するか。

「……？」

?? おかしい。麦茶以外の飲み物も見当たらない。……まさか、全部飲みきった？

ま、まさか。オアシスが枯れ果てた、だと!?

おいおいおい、冗談じゃないぜ。

だが、何度確認しようと、冷蔵庫の中に水分は見当たらない。

ええ……。このままだと、俺マジで脱水症で死ぬぞ？ そんな、殺生な。

いや待て、落ち着けクラ。まだだ、まだ水道水という最終手段があるだろう。おそらくかなり温いだろうが、仕方ない。東京の水道水は美味しいんだぞクラ。

台所から自分のコップを取り、水道の蛇口を捻る。

……。捻る。……。捻る。……。捻る。捻る、捻る、捻る、捻る捻る捻る。

されど、全く音沙汰無し。

「ふええ……」

どう、いう、こと、だ？

もしや。

バツと振り返り、カレンダーを見る。今日の日付。そこには、赤ペンで丸をされていて、『断水の日』と書かれていた。

つまり、今日一日は家中の水が使用出来ないということ。

そうだ、そうだった。

今日は断水の日。この前、水道管に異常が見付かった為、今日修理する予定だったんだ。

おいおいおい、これは本格的に不味いんじゃないか？　もう喉は限界だぞ？　カッサカサだぞ？

飲み物は無く、家の水は使えない。そして俺の喉はもう限界。軽い脱水状態にまで陥っている始末。

こんなしょうもないことで死にたくない！　いや、しょうもないなんて言ったら力石さんりきいしとかに失礼か。

とにかく、なんとしても、早急に水分を摂取せねば！



「ただいまー！」

私、はな華 ひまわり 向日葵は、友達の家から帰ってくるなり元氣良く挨拶をする。

「……？」

でも、おかしいな。お帰りの挨拶が返ってこない。いつもなら必ずクラさんが言ってくれる筈なのに。あの人、基本的に引きこもりだし。めんどくさい星人だし。残念星人だし。

二階にも届いてると思うんだけど。聞こえてないのかな？

「まいつか」

どうせ寝てるとか、そんなでしょ。まったく、鍵も閉めないで無用心だなあ。

私は靴を脱ぎ、洗面台へと手洗いする為に向かう。

「あり？」

水が出ない。おかしいな。もう一度蛇口を捻る。捻る。捻る。でも出ない。

そこで、ふと思い出す。

そういえば、今日は水道管の工事かなんかで家の水は使えないんだっけ。忘れてた。

じゃあ、どうしよう。手が洗えない。きたない。

私はバイキンマンも黙る超絶良い子ちゃんだからね。こんな手で物なんか触れないのです。

「うーん。なんとか水道管の工事が終わるまで、手を使わずに過ごさないと」

洗面所からリビングへ向か……手使えないから扉開けらんない。うーん。

「んしょんしょ」

ガチャ。

というわけで、掌以外の腕全体を駆使して、なんとか扉を開ける。ぜんとたなん、ってやつだね。

リビングに入り、冷蔵庫を視界に探す。さて、喉も渴いたし、何か飲み物でも――――

――――絶句。

私は、その生物のあまりの奇行に、一步後退する。ひく、とも言
う。

そこには、

「み……みず……みじゅ……」

血走った目で、花瓶に被りつく私の姉――クラさんが居た。

「なにごと!?!」

「……ひまか――……おかえり――……」

「あ、うん、ただいま。じゃなくて! 何やってんの!?!」

「いやコイツがよ――……なかなか出すもん出さねんだよ――……オラ
ー、早く出せよコラこの野郎――……」

ほれジャンプしてみろジャンプ、まだ持ってんだろ? と、空の

花瓶を逆さにブンブン振りながら、安いカツアゲのようなことを言うクラさん。理性が正常に働いてないっぽい。

「花瓶に何を求めているの！」

「オアシス」

「陶器に求めるレベルの願望じゃないよ！」

「……あー、うっせえなー……水だよ水」

「水？ ああ、なんだ、花瓶の中の水を飲もうとしてたんだね、それもおかしいでしょ！」

そもそも、その花瓶空なんだから水は一滴も入ってないし。ただ思考が働いてないの。

「お、落ち着いてクラさん！ まずは何があったか話して、ね」

「かくかくしかじか」

「いや、現実にかくかくしかじかとか言われても意味分かんないし」

「……断水……冷蔵庫……水ない……死ぬ」

めんどくさそうに、というか意識が朦朧としているだけかな、端的にそれだけいう。しばし考え、理解。なるほど。私とクラさんは、これだけの断片からでも意思疎通し合える。

ゴト。

「……………」

いきなり、花瓶を落として放心状態のクラさん。え、何？ 末期症状？ 割れなくて良かった花瓶。

焦点が合っていない目でこちらを向くと、一言、爆弾発言。

「トイレ」

「落ち着いて！ 落ち着いてクラさん！」

フラフラと、トイレのある方向へと漂い始めたクラさんの足にガシッと抱きつき、なんとか止める。

ダメ、それだけはダメ。いくら喉渴いても、その水だけはダメ。なんかもう、色々な方向からダメ。

「は、はなしえ……はなしえ……水……水う」

「クラさんが壊れちゃったあああ」

ピンポーン。

「ちわー白猫運送でー……し、失礼しましたー」

今、風通しのために開けていたドアの間から誰か覗いてたけど、そんなことどうでもいい。なんか凄い気まずい顔で首引っ込めたけど、今はどうでもいい。

クラさんの一大事に白猫運送に構っている余裕はない。

「……ど、どけ……どくんじゃああああ」

「に、じゃ……？ ああ、もう、こうなったら実力行使だよ！」

仕方ない、気絶させよう。今の弱っているクラさんなら、子犬一匹にも勝てないはず。

一旦クラさんから離れ、一メートルぐらい退がり、前のめりになったクラさんはバランスを崩し、倒れそうになる。そこにすかさず飛び蹴り！

「ぴゃっ」

私の右足が腹に激突し、仰向けに倒れるクラさん。そのままの勢いでマウントポジションを取り、

「てい、てい、てい、ていていていてい、」

「びっ、ぴゃっ、ぴゃふっ、ぴえぴえ、」

連続チョップを下す。

なんか、チョップする度に気持ち悪い悲鳴上げるけど、気にしたら負けな気がする。

それにしても、なかなか気絶しない。

ピンポーン。

「あのう、先程お訪ねした白猫運送ですけど、荷物だけでも受け取ってもらーーー」

「これでもか！ これでもかっ！ これでもかああああ！！」
「ぐあっ、ふえぶっ、ちっ、ちょ、おまつ、お、おちっ、ふえぶら
りっ、」

「――失礼しましたー」

今、風通しのために開けていたドアの間から誰か覗いてたけど、
そんなことどうでもいい。なんか凄い気まずい顔で首引っ込めたけ
ど、今はどうでもいい。

だってなんか楽しくなってきたっ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラ無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄」

「.....」
.....
.....」



「ごめんなさい」
「.....」

「調子こきました」
「.....」

「ついついディオ家とジョースター家の血が騒いで」
「.....」

「で、でもほら、こうして、ちゃんと水も飲めたわけだし、過ぎたことだし、ね？」

「……………」

「それに、ああしなかったら、クラさんトイレの水に手出してたんだよ？」

「……………」

「ていうかあの運送屋さん、水届けに来てたんだね。お父さんからだったよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「あの、本当ごめんなさい」

「……………」

「ゆ、ゆるして？」

「…………ちよっと…………あっち行って」

「…………はい」

8月〇〇日 華 桜・華 向日葵

20話『めでたい日』

華で桜なクラです。今日は、ヒマと雑貨屋まで来ています。

ああ、めんどくせえ。

明日ヒマの友達が誕生日らしく、そのプレゼント選びを手伝っている。

気持ちがおもってればいいんでね？　と適当にあしらおうとしたんだが、『何で皆ブランド品を欲しがるのか分かる？　高いからだよ。高いだけで良い物に感じるの。マツタケだって高いから美味しく感じるんだよ。だからプレゼントも高ければいいの』と、つまり何渡せばいいのか分からないからとりあえず高い物プレゼントしとけば喜ぶでしょ、とそういう結論に至ったらしく、でも金がないからクラさん買ってとのこと。

で、承諾。

俺の銀行口座には、バイク一台ぐらいなら買えるだけの貯金がある。破格のバイト代を貰っているのにも関わらず、特に使う用事がないからな。たまには奮発してやろう、とそういうわけで、ヒマと共に雑貨屋へと繰り出しています。

「プレゼントねえ。とりあえず、この店で一番高そうなの探してみるか」

「おーけい、ズネーク」

「ず、ずね？」

「何をもたもたしているズネーク、速やかに任務を遂行させるぞ。

我輩は二時の方向を漁ってくる、四時の方向は任せた」

「わ、我輩？」

言いたいことだけ言い残し、スタコラ突撃に行ってしまうヒマ。しかもあれ七時の方向じゃねえか。……今度は何の影響を受けたのだろうか、ミリタリー系統だという推測はつくけど。

ヒマの背中を見送り、俺もどこぞの方向へ出撃する。流すように、パツと見て棚に鎮座する商品を見ていく。

ううむ、なかなか選びがたい。適当に手に取ってみよう。
これなんかどうだろうか。

『商品名…ヤランゾ』

変わったデザインの貯金箱だな。人型の化け物が宝を死守しているデザインだ。……どこかで見覚えがある気がするが気のせいだろう。

『説明書き…硬貨を入れたら最後、二度と出てこない構造になっています』

本末転倒である。更に続きを読んでもみると、

『材質は白金プラチナなので割ろうとしても無駄です。そもそも、あなたにプラチナを割る勇気がありますか？』

ねえよ。

『そもそも、あなたにプラチナを買う勇気がありますか？』

ねえよ。

『そもそも、満タンにしても本体の値段には遠く及びませんよ？』

そもそも、ヤランゾ自体を盗まれる可能性が高いのでお気をつけ下さい』

本末が横転しまくっている。

『だが金は誰にもやらんぞ！』

お前にもやらねえよ。

よし、見なかったことにしよう。そっと元あった場所に戻す。値段だけなら法外だったが、色々法外すぎて無理。

他に良さ気なものはないかな、と。適当に選んでみる。

これなんかどうだろうか。

『商品名…アゲンゾ』

……変わった形のてんぷら鍋だ。

『説明書き…この子に揚げ物をあげたら最後、二度と“あげません”（笑）』

……。

『そもそも、プラチナ製なので揚げたら台無しですよ？ あなたにプラチナをあげる勇気がありますか？』

……。

何も見なかったことにしよう。無言で元あった場所に戻す。

今度こそ良さ気なものはないか。パツと選んでみる。

これなんかどうだろうか。

『商品名…アカンゾ』

……変わったデザインの小物入れだ。

『説明書き…この子に何か入れたら最後、二度と開きません。入れたら絶対に、あかんぞ（笑）』

……。

『そもそも、プラチーーー』

元あった場所に戻す。

うん。気を取り直していこう。

これなんかどうだろうか。

『商品名…マケンゾ』

……。………変わった形の……なんだこれ。

『説明書き…戦ったら最後、この子は絶対に負けんぞ。絶対に値段もマケンぞ。そもそも、プラーーー』「うるさい！ もういい、プラチナはもういい！ ヤランゾアゲンゾアカンゾマケンゾで！ 悪ノリし過ぎだろ！？」もう売る気ないだろ！？」

「ど、どしたのクラさん、突然叫びだして。……盛り？」

いつからそこに居たのか、隣で心配そうに見つめるマイシスター。誰が盛りだ誰が。つかそんな言葉使っちゃいけません。でも突如叫んだのも事実である。

「あ、ああ、ごめん、ナンデモナイズ。大丈夫だ、ナンデモナイズ」

「何それ」

「ナンデモナイズ」

う、うつった……。恐るべしプラチナシリーズ。

とにかく、一旦落ち着こう。このままだと、ヤランゾどもにペースをもっていかれてしまいそうだ。

すーはー、と深呼吸をし、不思議そうな顔をしているヒマに話題をふる。

「……で、見付かったか？ 友達にあげるプレゼントは」

生意気に腕を組み、やれやれのジェスチャー。

「いやあ、なかなか私好みのセンスなんだけどね、この店。さすがに人にあげるものじゃないというか」

「お前好みではあるんだ。なんだその中途半端な常識」

「一応、いくつか目星は付けたんだけど。見てみる？」

「おうけい」

では行くぞズネーク、とまたもやミリタリーなヒマに先導され、目星を付けた商品とやらの場所へと移動する。

それにしても、なんだこの店。どこを見ても妙なもののしか目に映らない。なんかもう、若干オカルトチックですらある。誰が来るんだよこの店。もし、こんなところでプレゼント選びなどする輩が居たならば、きつとそいつらはろくでもない連中に違いはない。

「あ、これこれ」

どうかな？ とちよつと期待気味のこもった視線で見上げられ、ヒマの指差すソレを見やる。

「こ、これは……」

『商品名…愛で鯛^{めでたい}』

ドヤ顔の、目の飛び出た鯛を模した置物。

「きめえ」

「キモ可愛いって言うじゃん」

「お前、キモ可愛いって言われて嬉しい？」

「嫌だよ」

「だろう。キモいもんはキモい」

何はともあれ、案の定あった説明書きを読む。

『説明書き…誕生日や年明けなど、めでたい日には是非!』

鯛だけに？

『鯛だけに。存分に愛でてやって下さい。ははは、めでたい日は鯛を愛でたい、くくく』

うぜえ。この鯛のドヤ顔がまたうぜえ。こんなもん何の役に立つんだ。

『玄関先にでも置いてみれば？ 魔よけぐらいにはなるんじゃない？』

会話すんな。てか、ぐらいにはって、やっぱまるっきり売る気ないだろこいつら。ほら、裏を見てみると案の定ヤランゾと同じメーカーだ。

「誕生日にぴったりじゃない？」

「嫌がらせ以外の何ものでもないだろ」

「でもご利益はありそうだよ？」

「お前、これ誕生日に送りつけられて、どうする？」

「その友達の誕生日に送り返す」

「次の誕生日にはまた帰って来るがな」

「うわあ」

「だろう」

「それはそれで面白そう」

「ええ!？」

「こう、毎年ね、書き込むんだよ、メッセージを。交換日記みたいな。十年後二十年後になると、それが友情の証みたいになるの。ス

テキヤん？」

「五十年後には、呪詛まみれみたいなキモい鯛の置物が拝めるのか。真っ黒な友情だな。ステキヤん」

「そんな鯛、愛でたくないよ」

「めでたくないな」

お互い首肯し、鯛の置物を棚に戻す。さらば、愛で鯛。いつかきつと、お前のことを愛してくれる人が見付かるはずさ。

「で、他にめばしいものは？」

期待せずに聞いてみる。こんなわけの分からん魚介類に目を付けるセンスだからな。期待すると大目玉を食らうはめになる。

「そうだね。では付いてきたまえズネーク。目標はここから西のエリアだ」

なぜ移動時にはミリタるのかよく分かんが、そしてそっちは東の方向のはずだった気がするが、うん、スルーしよう。

「あ、あった、これだよこれ」

ほい、とヒマがそれを手渡してくる。

『商品名…モーマンタイ
モーマンタイ
鯛』

ドヤ顔の、目の飛び出た鯛の置物だ。

「きめえ」

つかこれ愛で鯛じゃん。ただ、さっきのは赤だったが、これは青だ。さらに気色悪い。

「お前、このデザインそんなに気に入ったの？」

「いや全然」

「じゃなぜこんなもんに目を付けた」

「こいつのドヤ顔見るとイラっとくるでしょ。この挑戦的な目が腹立つの。やんのかコラみたいなのりで」

「受けてたつなよ……」

そしてそんなもん友達にプレゼントしようとするなよ。

まあ、説明書きだけでも見とくか。

『説明書き…この子にかければ、どんな問題もモーマントイ。肌が青くて一見死にそうだけど、所詮置物なのでモーマントイ。この子だけプラチナじゃないけど、そこはコスト削減のためだからモーマントイ。だいたい、他のシリーズに金掛けすぎてうちの会社はすっからかんなんだよモーマントイ。でもあなたが買ってくればモーマントイ。無駄に値段高いけど、そこはそれ、あんたの財布が薄くなるだけモーマントイ』

これは……確かに喧嘩売ってる。実際に売ろうとしてるし。

『もうけ鯛』

売れるか。

『こんな仕事辞め鯛』

辞めちまえ。

『でも会社の期鯛には答え鯛』

知らん。

『まあ、そろそろオレ首だしモーマントイ(笑)』

ちよ……。

『商品のデザイン任されたけど、オレには無理だった。こんな気色の悪い鯛を量産して、一時的に注目されたぐらいで、商品全く売れないし。そりゃそうか。昔から何やっても馬鹿にされてきて、いつか見返してやろうと必死に勉強して。親の金盗んで、皆の制止も聞かずに、村を飛び出て上京。悪い女に騙され、一文無しになっちゃって。でも、こんなどうしようもないオレを、社長は拾ってくれた。自暴自棄になっていたオレを諭し、飯まで奢ってくれて。久々に食った温かい飯は、美味かったな。そんな社長に恩返しがしたくて、ここまで二十年頑張ってきたのに……。そんな社長にも見捨てられちゃった。はは、これからどうしようかな。村が恋しいな。父ちゃん母ちゃん、元気にやっているかな。いや、足手まといが一人減ったんだ、元気にやっているはずだ。オレなんて居なくても、誰も困んねえよな。オレなんて居なくても……。オレなんか居なくても……。』

……。

『まあ、全て嘘だからモーマンタイ』

……。

『騙された？（笑）』

……。

『鯛を持ったアホが一匹いるぜ、フハッ！』

……。

『鯛を持ったカモが一匹いるぜ、フハッ！』

……。

「お、落ち着いてクラさん！ 気持ち分かるけど落ち着いて！
商品床に叩き付けちゃ駄目！」

ガッ、と腕に飛びつかれ、すんでのところで止められる。

「う、うるさい！ こんな腐った鯛ぶち壊してやる、いや、ぶち壊し鯛！」

「駄目だよ！ そうやって壊させて強制的に買わせるのがヤツラの手口なんだよ！」

「乗ってやろうじゃねえの！」

「それこそ鯛を持ったカモだよ！」

「おりゃっ！！」

「……あ」

その日、雑貨屋内に、一匹の鯛が砕け散る音が鳴り響いたそうなの。



「はい、誕生日おめでとう、南ちゃん」

「おおきにね。めっさ嬉しい」

「どういたしまして」

「ところでヒマちゃん、これ何なの？　ちゅうか壊れてへん？」

「モーマン鯛。壊れてても元が元だからモーマンタイ」

「何言うтонこの子」

「これもあげる」

「あ、いいのん？　ありがとう」

「どういたしまして」

「またけつたいなもんやね。これは何なん？　……鯛？」

「愛でたいでしょ。今日はめでたい日だからね」

「めっちゃ可愛いねん」

「……ええ！？　あ、ああそう？　それは良かった。あ、あとこのプラチナシリーズ詰め合わせもあげる」

「ほんま？　こんなにもらってええの？」

「うん、全部もらいものだから気にしないで。クレームつけたらお詫びにくれたの」

「ほんまありがとう。ヒマちゃんも誕生日楽しみにしたってなあ」

「……え？　いやいいよそんな。その愛で鯛返してくれるだけでいいよ」

「何言うтон」

「だからね、その鯛に毎年メッセージ書いて、誕生日に交換し合うの。二十年後とか、これが私達の友情の証になるの。ステキやん？」
「ステキやねえ」

8月〇〇日 華 桜
家にて。

妹とその友達のやり取りに微笑みながら。

21話『道端で拾った……』

こんにちは。今日も元気に怠惰に愚痴ります、華 桜ことクラです。

土曜、バイトが終わり家善の尾行を振り切り、帰路をふらふらしっていると、目も当てられないぐらいやっかいな“やつ”に出くわしてしまいました。

「おなかへりました」

「……」

そいつは、道端のと真ん中で仰向けに寝転びながら、腹が減ったとほざく。

……。

三秒ほど思考し、俺の脳は“何も見ていない”というベストアンサーを導き出す。

さて、今日の夕飯は何にしようかな。昨日のカレーの残りがあつたよな、確か。

華家の食事は基本的に俺に任されていて、これでも料理の腕には自身があったりする。他のアホどもに任せると負の遺産が量産ダークマターされることになるから、必然、食事当番は俺に回ってくるという寸法だ。やつら、カレー鍋に火を付けることすらしようとしないからな、早く帰ってやんねえと。

「前方に異常なし、仰向けに倒れているアホなんぞ存在しないであります、クラ号全速前進」

「まちたまへ」

空耳は無視し、足の動きを早送りにする。

あっはは、風邪かな。まちたまへまちたまへと幻聴が聞こえるよ。
ガシッ。

「まちたまへ、とおりがかりの桜ちゃん」

すっかり名前まで呼ばれてしまった。なかなか生意気な幻覚だな。
「何だ、誰だアンタ、俺はアンタなんか知らない、消えなさい幻覚」
「いやですねー、なにをいつているのかしらこのこはうふふ。わたしと桜ちゃんの仲ではありませんか」

幻覚は、どうしても消えない。

ちっ。どうしても見逃さないつもりだなコイツ。仕方ないので適当に相手をしてやる。

とその前に、まずはこいつの特徴を言うと、あれだ、俺の妹の美み菊きくから清楚さだけを取り出して召喚したような、つまり真正銘の
“深窓のお嬢様”風だ。

服も真っ白な薄いドレスっぽいのを着ている。なんと言うんだろうか、この服、まあいいや。

年齢はパツと見て、うん、小、中学生程度。

「まったくもー、こまっちゃいますよねー。今月は東のほうへいつてみたんですけどね、やんちゃんな子ばかりで、もー」

ニコニコ、常に笑顔を絶やさずに、文句を垂れ流す行き倒れ。

隙を見て掴まれた手から抜けようとするが、案外油断ならない、俺が足を動かそうとする度にグツと力を入れられる。

「なんでもいいから桜ちゃん、ごはん食べたいのですが、ごいっしょにどうでしょう？」

疑問系だが、ニコニコ細められた目の奥を見ると、命令形で言っているのが見て取れる。

「あ、それとすみません、わたし今お金もっていないのですが、どうしましょう。ねえ、桜ちゃん、どうしましょう？」

「あー、もう、分かった分かったから、ほら手を離せ。それでもって、まずは立て、みつともない」

行き倒れの手を掴み引き剥がし、そのまま力を入れて立たせる。

ふらふらと足取りは覚束ないが、ちゃんと自分の足で立つ力はまだ残っていたようだ。

「あらー、やさしいんですね桜ちゃん、ありがとうございますう」
わざとらしいヤツだ。

「それではこのれすとらんが良いでしょうか？」

「いつの間に奢り決定したんだ」

「それではいきましょー」

どこまでも人の話を聞かない人だ。

俺の手を掴み、どこぞへと先導していかれる。



「で、アンタはなんであんな場所で行き倒れていた？」

近場のレストラン『ユニクス』にて。行き倒れ少女に尋ねる。

「あのもぐがもぐしたのですがねもぐもぐでもぐもぐつまりもぐもぐでもぐもぐ美味しいもぐもぐもぐなのですよもぐもぐだからもぐもぐもぐ」

もぐもぐもによもによ何言ってんのか全然わかんねえ。

「まずは口の中を片付けろ」

「もぐん」

妙な返事を返された。それからしばらく顎を必死に動かし続ける行き倒れ少女。

待つ間暇なので、適当にあたりを見回す。

『ユニクス』に客としてくるのは久しぶりだな。いつも見慣れている店内だが、こうして見てみると、なかなか洒落た店だ。

若干薄暗く、店のアンティークな雰囲気を実際立たせていて、椅子やテーブルなどからは店長のセンスの良さが見て取れる。微かに香る、なんだろこれ、とにかくアロマな良いかんじ匂いと、微かに聞こえる、なんだろこれ、良いかんじのメロディが、うん、ミスマツチで良いかんじである。

「もういいですよー、桜ちゃんぱくぱくぱく」
パンッ。

「こふっ」

行き倒れ少女の頭を軽くはたき、微量に口内のものも吹き出る。

「なにをするのですかー桜ちゃん」

「こっちのセリフだよ。言ってるそばから口にものを詰め込むな」

「まったくー、おぎょうぎが悪いのですね桜ちゃんは」

「手元を見てから言え」

食べこぼしで無残な有様になったテーブルを指して言う。「あらーもったいないですねパクパク」とそれも食い始めたのもう一度はたいておく。

「コラやめなさい、みつともない」

「ううー桜ちゃんはいじわるなのですねー」

ああ、腹立つ。あああ腹立つ。コイツ見てると腹立つ。だって、そりゃあそうだろう、コイツは……。

「分かった分かったから。話を戻すぞ」

「しかたないですねー」

頬を膨らませ怒っているアピールをされるが、怒らせるようなことはした覚えがないのでスルー。

「だから、何であんなところで行き倒れていたんだ？」

「まいごだったからですー」

「……あんたが？」

「いいえー、たかし君がですよ」

「誰だそれ」

「お花屋さんのむすこさんですねー」

「知り合いか？」

「みずしらずですー」

「……………」

駄目だ、全く要領を得ない。

何言ってるのかサッパリわからない。この言語は本当に日本語だ

ろうか。

仕方ないので、質問を変える。

「ああ、分かった。全然分からなかったが、大体分かったから、質問変えるぞ」

「ばっちこいやですなー」

「今までどこほつつき歩いてた？」

「ちきゅうです」

わお、大雑把すぎる。ワールド級ときたか。逆に火星とか言ったらどうすりゃいいんだよ。

「もうちよつと的を絞って」

「陸です」

逆に海とか言ったらビックリだ。

「あ、でも海もですよー」

ビックリだ。水陸両用か。

「空もですねー」

ビックリだ。陸空海制覇。

「海底はちようちんあんこーさんがかわいかったですよー、あ、地中ではきよだいモグラさんがかわいかったですね。雷雲のなかはラピュタさんがとってもおおきかったのですよー。それにしても腐海の地下はすごきれいでしたねーげんそうてきでー。オームさんかわいかったですよオームさん。でも崇り神さんはこわかったですねー。それから――」

「待て。ちよつと待て。とりあえず黙れ」

駄目だ。コイツは駄目だ。

頭がワンダーし過ぎで、もはや何語か分からない。ジブリ語にしか聞こえない。

ふーっと溜息一つ、遠くを見やる。

……どうしたものか。

「あー」

「うん、黙れ」

……さて、どうしたものか。

「桜ちゃん」

「うっさい」

「いまのはなし、もちろん映画館ではなしですよー」

「……」

「桜ちゃん？」

「う、うっさい！」



それから一通りの意思疎通をはかり、なんとか大体の事情を掴むことに成功する。

なんかもう、それはそれで信じられない話だが、まあ、とりあえずは信じておく。常に信じられん人世を送っているのがコイツだからな。

レストラン『ユニークス』を後にし、帰路につく。

歩きながら、隣のソイツを見るたび、なんか複雑な気分になる。

やつらになんと説明をつけたらいいのか。いや、素直に道端で拾ったと言えばそれでいいか。

……と、気付いたら華家まで辿り着いていた。

「というわけでー、ただいまですよーみなさん」

「」「……………」

リビングにて。

俺の帰りを待ち、食卓にっていた向日葵、美菊、球根が、こちらを見ながら固まる。

始めに口を開いたのは、ヒマ。

「どこ行ってたの、お母さん」

8月〇〇日 華 桜

22話『一家団欒玄關にて&第一回ゲリラジオ』

こんにちは。ヒマです。クラさんの妹こと、華^{はな} 向日葵^{ひまわり}です。今日はちよつと大変なことになっています。

なんとバイトから帰ってきたクラさんが、お母さんを拾って帰ってきたのです。

詳しくは21話を参照。

……え？ なぜ日記なのに一話完結じゃないんだ、って？ 私に言われても。知らないよ。例の“投稿者”が分けて投稿したんじゃないの？

そんなことはさておき、一年振りにお母さんが帰宅して来た。

「あらあらー、向日葵ちゃんはずいぶんせいちょうしましたですねー。こんなにくましくなつてー。五十センチぐらいのびましたねー」

お母さんが、球根^{きゅうこん}の上半身をペタペタ触りながら、そう言う。

「我輩、球根^{たまね}だから！ 母のの目は相変わらず節穴だな！」

「あらあら？ あらーこれはこれはもうしわけないですよー、お客様がいらっしゃっていたのですねー。どちらのかたですかー？」

「お客様扱い！？ 実の母に存在を忘れられる俺って何なんだっ！？」

ずーん、と床にうな垂れる球根兄貴。あわれだね。おもいつきり素が出てるし。

ていうか、お母さんもお母さんで、私とこんなのを一緒にしないでほしい。

「ジョークですよー、ブラジリアンジョークですよー、球根ちゃんはこの家に必要な方ですよー」

……なんでブラジリアン？

お母さんがドヨンモードに突入している球根の頭を撫でる――

――

———足で。

撫でてるといふか踏んでるよっ！ お母さん、それ足だよっ！

「……ほ、本当か、母さん」

球根は球根で普通に慰められてるし。なんなのこの家族。

「本当ですよー。えいや、えいやっ」

ふみっ。ふみっ。

絶対わざとやってるよお母さん。えいやとか言ってるし。この人、天然なのかドス黒いのか、どっちなのか未だに分からない。

「母さん、俺は……俺は華家に居てもいい存在なのかな？」

なんか球根がシリ阿斯もどきなこと言い始めた。踏まれながら言っても笑えるだけだよ。というかまだ素のままなんだ、完全にキラ崩壊だね。

「そうですよー、球根さんは鼻家に居てもいい存在ですよー」

発音がおかしいよ。多分、今、華家じゃなくて鼻家っていったよね、アクセント的に。

「そ、そうか……。そうだよな。俺、じゃなくてごほごほ我輩は鼻家の長男なのだからな！ 居てもいいに決まってるよな！ むしろ今ここでは母のを抜いて一番の年長者なのだからな！ むしろ偉いのだ！ 我輩は鼻家の中でも特に偉いのだ！ 貴様らなんぞ虫けらよ！ ふはははははは」

なんでこいつは実の母に踏まれながら高笑いしてるのかな。ていうか自分で“鼻”家って言ってるよね。アホなのかな、アホなんだね。お母さんに球根きゅうこんって呼ばれたことにも気付いてないし。

「そうか、ならさっさと鼻家に帰れ球根。華家の敷居を汚すな球根」
ガスッ、

「ふぎゃっ」

えげつないね。クラさん、踏まれたままの球根の顔面をシュートしたよ。

「えい」

ゲシッ、

「おぎゃっ」

そんな私も後頭部をシュート。実に良い蹴り心地で。

「まあ、馬鹿はさておきだ。アンタ、なんで今頃になって帰って来たんだ？ 三ヶ月も家を空けておいてよくものこのこニコニコ帰って来れたな」

あり……なんだかシリアスな雰囲気。

「……ごめんなさいですよー。じぶんでも、こまったせいかくだつて自覚はあるのですけどねー」

お母さんの性格、っていうか癖、っていうかもはや体質のようなもの。

それは、一言で言うところ“超絶お節介”だね。困っている人を見かけると、ついついお節介を焼いてしまう、なんて生易しいものじゃないよ？ お母さんの場合は、困っている人をついつい“探知”し、お節介を焼いてしまう、だからね。つまり、自ら困っている人を探し出して手を貸しちゃうっていうこと。なんか知らないけど、お母さん曰く“わたしは困っているにんげんから出るタスケテオーラを感知できるのですよー”なんだって。

タスケテオーラって何？ って疑問の解答は、“助けを求めるオーラですねー”だってさ。

お母さんはこのタスケテオーラを感じ取ることができるらしい。で、タスケテオーラを発する人間を助けずにはいられないんだって。そんでもって、人を助けて助けてしている内に、気が付いたらどこか遠い国に辿り着いていた、なんてことがよくある。

いや、説明してる私自身も意味が分からないんだけどね？

でも、今回はちょっと帰還するまでの期間（駄洒落ちゃうよ）が長くて、前に家を出てから三ヶ月も経ってて。いつもは数日か、長くて数週間で帰ってきてただけ。今回ばかりは見逃せない、と心配性のクラさんはご乱心みたい。それに、華家には基本的に仕

事でお父さんがいないから、お母さんが保護者として子供達の面倒を見ないといけないしね。そっちの意味でもクラさんは怒ってるっぽい。

「まったくアンタは。お人好しなのはいいけど、あんまりどを越すんじゃないよ。アンタには向日葵と美菊の面倒を見る義務があるんだから」

便乗する私。

「そうだーそうだー。誰のせいでミキ姉がグレたと思ってるんだー」

「誰がグレてるでやがりますか!」

「ごめんなさいですよー」

「なんでそこで謝るのでございますか母様!？」かかさま 本当に私がグレて

るみたいじゃねえですか!」

ちなみにミキ姉はお母さんのことを母様かかさまと呼ぶ。クラさんは姉御でお母さんは母様って、基準が全然分らないね。

「グレてないとも言うのですかー?」

「グレてねえです!」

「あらあらー。ではもう喧嘩はやらなくなったのですねー?」

「ぐっ、け、喧嘩じゃねえです、果し合いでございます!」

それを喧嘩と言うのでは? とでも言いたげなクラさん。

ミキ姉は毎日のように果たし状をもらっては決闘しに行くからね。グレてると思われても仕方ないね。

いやそれは普通にグレてるのでは? とでも言いたげなクラさん。

「それを喧嘩というのですよー」

「断じてちげえですよ! 果し合いとは、拳と拳で語り合う神聖なスキンシップでございますよ! 拳と拳で殴り合うだけの喧嘩なんて野蛮なものと一緒にしやがらないで下さい!」

「「同じやんけ」」

思わずハモる私とクラさん。ハモツツコミと呼ぼう。

「っ、何を言うのですかお二方! 同じものなどでは――、」
数秒硬直するミキ姉。多分、さっきの自分の台詞を反芻してるん

だろうね。

「―――あ、同じですね」

認めちゃったよ。

「そうですよー。美菊ちゃんはお女の子なのですからもおしとかにしないとだめなのですよー」

「むうん、言い返せねえです。……でしたら私は女の子なんかじゃなくていいです！ 拳で語り合うのが女の子らしくないと言うのなら、私は喜んで男として生きましょう！」

拳をガツと上げ、後ろにザッパーンと波のシルエットが見える。

何言ってるのこの人。

「皆様方、私はこれから男、いえ、漢おとこの中の漢として生きていくことを決意しやがりました！ それで文句なしですね母様！」

「それでいいのですよー」

「「いいの!？」」

またもやクラさんとハモツツコミを繰り返す。

「ところで漢になるには何をしやがればいいのですか？」

「生やせばいいのですよー」

とんでもないこと言い出したよこの人。

「何をですか？」

「バベルの塔ですねー」

ニコニコしながら何を……。

「そいつはどうやって生えてきやがるのですか？」

「かんとんですよー。まずはそこらに生えてるバベルの塔をもぎとるのですよー」

ヒイツ、となぜか変な悲鳴を上げる球根。どうしたんだろう。

「それをすりつぶして家の庭に撒くのですねー。そうすることで一家ぜんいんのからだだからバベルの塔が生えてきますよー」

全員から!？

「球根ちゃんのばあい二本になりますねー」

気持ち悪っ！

「ヒマの、なぜ我輩を気持ちの悪いものを見る目で見るのだ!？」

「寄らないで妖怪!」

「妖怪!？ 我輩、妖怪!？」

「この珍妖怪が!」

「ひどいっ」

「うるさいパズウ!」

「パズウ!？」

球根ちゃんちよつとうるさいですよー、とお母さんにしかられる球根兄貴。

「何で我輩だけ……」

ぶつぶつ言いながらシュンとなる。

「それと、さっきからそ知らぬかおしてますけどねー。もっと女の子らしくなくちゃいけないのは桜ちゃんもなのですよー?」

「お、俺?」

目を逸らすクラさん。

「それなのですよー。性格はしかたないですけどねー。せめて口調だけでも、いえ、その“おれ”という一人称ぐらいはなおさないですよー?」

「くっ……で、でも今までずっとこれで通してきたんだから今更……なあ?」

何で私に振るの面倒くさい。

仕方ないから渋々ながらも弁護してあげるけど。

「そうだよ。クラさんから男っぽさ取ったら何も残らないよ」

「残るわ」

「あたっ」

ピシリとデコピンをもらう。

「あー……」

「アンタもアンタで納得したような反応するな!」

得心顔のお母さんにデコピンを放とうとするクラさんだけど、ゆるーりと避けられてしまう。相変わらず掴み所の無い人だね。見た

目も小中学生で実年齢不詳だし。我が母ながら色々謎だらけな人だよ。

「じょうだんはさておきですねー」

その場に居る全員を軽く見回し、ニコリと笑む。

「こんなところで一家団欒というのもあれですしー。つもるはなしは食卓でもかこみながらにでもしましょー」

「まあそうだな……」

すると、ぺこりと頭を下げるお母さん。

「では、改めて、ただいまなのですねー」
こうして。

何はともあれ、華家の母、華鎖百合が帰ってきた。

八月〇〇日 華日向葵

「……あれ？」

「どうしたヒマ」

「や、どうしたってゆうか……この日記と現実の時間が四ヶ月もずれてるよ？」

「そりゃあな。これ四ヶ月前の日記だし」

「え？ でも私、この四ヶ月間の記憶が……」

「子供はそんなこと気にしちゃいけません」

「なんかごめんなさい」

「よろしいよ」

「で、また会話記録取ってるの？」

「うん、まあ」

「ぶっちゃけこれ意味ある？」

「俺に聞かれてもな」

「特に喋ることなんか無いよね」

「だな。というわけで、今回からここで『クラ&ヒマ・ゲリラジオ』なる企画をやることになった」

「ゲリラジオ!? 何そのお腹痛くなりそうなネーミング!」

「“ゲリラ的に行われるラジオ”略して“ゲリラジオ”だよ。俺とお前の二人でやる不定期ラジオだって。“投稿者”からの依頼だ」

「センス最悪だね……」

「でも金払いだけはいいいからな“ヤツ”は。喜んでノッてやったぜ」

「私を巻き込まないでよ、っていうか事前に言つてよ、こういうのコーナーとか色々考えなきゃいけないでしょ? いきなり言われ
ても」

「まあまあ、コーナーは俺が考えてあるから大丈夫。正直ラジオとか全く聞いたことねえけど、なんか勘でやればいけるだろ」

「クラさん、ラジオのこと完全になめきってるね。それでよく引き受けたね、この企画」

「でもだって依頼金が〇〇^{ビー}だぜ? 〇〇^{ビー}。即答でOKしちゃった」

「ごめん、直接口で“ビー”とか言われても伝わらないから」

「とても言える額じゃないってことだ。……聞きたいか?」

「いくら?」

「百二十万ペソカ」

「ペソカ!?!」

「どうだ、あまりの金額に驚いたか？」

「や、そっちじゃなくてっ！ ペソカって何！？」

「ペリカとペソのキマイラじゃねえ？」

「よく分かってないんじゃないん……」

「でも百二十万だぞ」

「五十万ペソカで一ユーロとかだったらどうするの」

「ジュースでも奢ってやるよ」

「あ、別に金額とかどうでもいいんだ」

「どうせ使う用事ないし」

「じゃあなんで受けたの」

「こう、ノリで」

「ノリね。なら仕方ないね」

「ああ。“ヤツ”がくれる海苔^{ノリ}、すげえ美味いんだよ」

「まさかの海草」

「うん。正直言うとそのっちで誘惑された。ぶっちゃけペソカとかい

らね」

「この食いしん坊娘め」

「でも美味しいもんは美味しいし。お前も食う？ ヤツからもらった海苔」

「ありがと。……パリパリむしゃむしゃ」

「パリパリもしゃもしゃ」

「なにこれ凄い美味しい!？」

「だろう?」

「何で海苔なのにステーキの味がするのかはあえてツツコまないけどね!」

「コンブ味とワカメ味もあるぞ」

「もう海苔じゃないよそれ。普通に乾燥させたコンブとワカメだよ」

「タケノコンブ味もある」

「タケノコンブ!？」

「タケノコンブ」

「タケノコンブ!？」

「だからタケノコンブ」

「何それ!？」

「タケノコとコンブのキマイラ」

「美味しいの!？ タケノコンブ味で!」

「外はサクサク、中はフワフワ、間はモニョペチヨ」

「や、外と中はともかく、間って何？ モニョペチヨってどんな食感？」

「食べば分かる。つうか食べ。ほれほれ。やめられなくなるぞ。いから食べ!」

「ク、クラさん、なんか怖いっ。なんか目が怖い! 絶対やばい食べ物だよタケノコンブ!」

「ふ、ひゅふふ、さあ食べ、お前もこれ食べてこちら側に来い!」

「や、やめ……!」

「問答無用!」

「っ!？ うば太・千葉・あかお・bj・いとbい……!?!?」

（諸事情によりカット）

「さて、次のコーナーいこうか」

「……はっ。……私は一体？ 確かクラさんに変なの食べさせられて……。ていうかさっきの会話、ラジオコーナーの一つだったんだ」

「尺の問題で、あれで一つ目終わりってことにしといた。だってそろそろ本編のはずの日記よりも長くなるし」

「身も蓋も無いね」

「というわけで、次のコーナーやって今回のゲリララジオは終わりだ」

「凄いグダグダ感」

「はい、では『皆の身嗜みチェックコーナー』」

「ほうほう、身嗜みチェックね。して、内容はいかに？」

「登場人物達が普段何を着ているのか、とか、どんな容姿なのか、とか。そんな感じのアレコレについて迫ります」

「そっか、普段そんなこと書かないもんね私達。いつだったか、トクッチが書いた日記にクラさんの格好と容姿について少し書かれてたぐらいだよな」

「あつたな、そんなことも」

「8話の『レストラン・徳川日記』だね」

「じゃあ、今日は俺とお前の身嗜みについて」

「ええと……そうだね。まずクラさんのパツと見の特徴から」

「自由」

「うーん……。……胸は板。チビ。やる気無さそうな釣り目。ヒョロくてモヤシみたい。ドラム缶スタイル。くびれどこ？」

「殴るよ？」

「あ、それと鬱陶しいチョンマゲ（ポニーテール）。千切れればいいのに」

「お前を千切るよ？」

「ごめんなさい」

「次はお前を晒してやる」

「ドンと来い」

「ええと……。……アホ面^{ツラ}。バカ面。間抜け面」

「あんまりだよっ！」

「ガキ面」

「そりゃ小学生だからねっ！」

「ヅラ」

「地毛だよっ！」

「見辛^{みツラ}」

「私の顔が醜いとても!？」

「さっきの仕返しヅラ」

「口癖みたいになってる！」

「ズーラヅラヅラヅラ」

「笑い声みたいになってる！」

「次は服装についてだな」

「待って、さすがにそれは待って！ このまま進めたら私が凄いアレな子供になっちゃうよっ！」

「ええー、仕方ないな。じゃあ軽くまとめてやる。髪の毛の長さはミディアム（笑）。なぜか左側の一部だけ結っていて、そこだけ長い（おそらく触手）。背は小学生としては標準（縮め）。目は小生意気な活気に溢れている（ガキっぽい）」

「悪意をひしひしと感じるよ。触手で」

「気のせいにしとけ」

「しとけて……」

「はい次。普段の服装について。とっとと進めるぞ」

「もう投げやりだね」

「俺の最近の標準装備。ズボン。シャツ。終わり」

「はやっ！　そして質素！　もっとう、ファッションとかオシャレとか……」

「ファッション？　オシャレ？　ごめんなさい、外来語分らない」

「オシャレは外来語じゃないよっ」

「だってこれが一番動きやすいし。涼しいし。機能重視派だもん」

「女っ気がないだけでしょ」

「はい次。お前の普段着」

「私？　ええと……、普通に女物のズボンとかスカートとか」

「とかってなんだよ、とかって。もっと具体的に言えよ」

「クラさんに言われたくないけどね」

「俺はあれ以上言うことがないだけ」

「その髪留めとかは？　どこで買ったの？」

「これか？」

「そう、そのチョンマゲ縛ってる桜を模した髪留め」

「これは中学の時のプレゼントだ。あとマゲゆーな」

「なんだつまらん、トクツチからか」

「そうだけど。何さつまらんって」

「はいはいノロケノロケ」

「うわ、イラッとする。じゃあヒマ、逆に聞くけど、お前のその触手を結ってるゴムについて聞いていいか？」

「これ？ このヘアゴム？ あと触手ゆーな」

「前々から思ってたんだが、なんだその気色の悪い笑顔の装飾が施されたヘアゴムは」

「これはスマイリー君。とっても可愛い」

「いやきめえよ！ どっからどう見ても変態がニヤニヤしてるようにしか見えない。初めて見た時、正直ギョッとしたわ」

「おや、スマイリー君の良さが分からないとな？ これだからファッションセンスゼロのおこちゃまは」

「小学生に言われるとは……」

「ちなみにこれ、クラさんのと同じで、もらいものなんだよ」

「そうなのか？ 南ちゃんから？」

「いんや。それは秘密。それじゃあ、今日はこれぐらいでお開きにしますか」

「なんだ、わざとらしいタイミングだな」

「わざとだもん。だってもう、本編より長くなっちゃってるから終わらせないと」

「マジか。……では、これにて、第一回『クラ&ヒマ・ゲリラジオ』終了。それでは、また会えることを祈って」

「なにそれ？」

「さよならの挨拶だと。定着させるらしい。ヤツのお達し」

「あそう」

「それでは、また会えることを祈って」

「また会えることを祈って」

第一回『クラ&ヒマ・ゲリラ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3735u/>

世界に一つだけの華族

2012年1月12日15時48分発行